岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第440集

宿（しゅく）遺跡発掘調査報告書

八重畑地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第440集

宿遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤	正
9	15	65…土師器、堀、壕	66…土師器、堀、溝
11	8	…二十三年の紫波城の	…二十三年の志波城の
11	9	…三郡を置く」（日本後記）	…三郡を置く」（日本後紀）
12	下	第7図　八重畑館跡付近図	第7図　八重幡館跡付近図
65	右下	0　2m	0　1:60　2m
68	20	…（第36図・写真図版30:21）	…（写真図版28右下、第36図・写真図版30:21）

宿（しゅく）遺跡発掘調査報告書

八重畑地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする埋蔵文化財の包蔵地が数多く分布しております。そして、これら先人の残した多くの貴重な文化遺産を保存し後世に伝えていくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有しながらも山地が広い本県では、限られた平坦地で稲作を中心とする農業が営まれてまいりましたが、近年は宅地開発や減反問題に加え農業後継者の減少などにより農地面積の大幅な減少を見ており、これに対し、農地の集約化を柱とする効率的な営農を目指す動きが起きております。そのため、埋蔵文化財の包蔵地域でも掘削を伴う整地作業が度々必要とされるようになってまいりました。したがいまして、埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和が改めて今日的課題の一つとなってきたのであります。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、石鳥谷町八重畑地区ほ場整備事業に関連して、平成14年度に発掘調査を実施した宿遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって縄文時代および古代～中世と思われる遺構や遺物が確認され、当該地域の歴史や周辺の遺跡との関連性を考える上で貴重な資料を提供することができました。この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力賜りました岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室、岩手県教育委員会生涯学習文化課、石鳥谷町教育委員会をはじめとする多くの関係機関、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成15年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県稗貫郡石鳥谷町八重畑第26地割ほかに所在する宿遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。なお、隣接する宿館遺跡（八重幡館跡）および蛇蜒蛆遺跡との関連性についても若干言及している。

2．本調査は、県営ほ場整備事業（八重畑地区）に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課と花巻地方振興局農林部農村整備室との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、当センター）が記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．本遺跡の岩手県遺跡登録台帳における遺跡番号と、本調査時の遺跡略号は次の通りである。

　遺跡番号　〔宿遺跡〕ME17－0110　　（〔宿館遺跡〕ME17－0111、〔蛇蜒蛆遺跡〕ME17－1046）

　遺跡略号　SK－02

4．野外調査期間、調査面積、調査担当者は次の通りである。

　野外調査期間　平成14年８月９日～11月７日

　野外調査面積　3,020 m²

　調査担当者　早坂　淳、高木　晃、小林弘卓

5．室内整理期間、整理担当者は次の通りである。

　室内整理期間　平成14年11月１日～平成15年３月31日

　整理担当者　早坂　淳

6．出土品の鑑定は、次の機関に依頼した。

　石器・石製品の石材鑑定　　花崗岩研究会（矢内桂三　岩手大学工学部教授ほか）

7．基準点測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。

　基準点測量　　有限会社北上測量設計

　空中写真撮影　　東邦航空株式会社

8．土層および土器の色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局および財団法人日本色彩研究所の監修による「新版標準土色帖」を参考にした。

9．野外調査および本報告書作成にあたり、石鳥谷町他に在住の野外作業員26名および遺跡周辺の住民と次の方々のご協力・ご教示を得た。（敬称略）

　石鳥谷町教育委員会

　井上雅孝（滝沢村埋蔵文化財センター）

　日下和寿（岩手県教育委員会生涯学習文化課）

10．本報告書の執筆・編集は早坂淳が担当した。

11．本報告書の記載事項は、本遺跡の現地公開資料あるいは「平成14年度岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」の記載事項に優先するものである。

12．本調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管・管理されている。

目　次

序
例言

【本文】

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 1
　1．位置と立地 …… 1
　2．地形・地質 …… 1
　3．基本層序 …… 5
　4．周辺の遺跡 …… 5
　5．周辺の歴史 …… 11
　　(1) 稗貫郡の歴史 …… 11
　　(2) 稗貫氏の興りと没落 …… 11
　　(2) 八重幡館と八重幡氏 …… 11
　参考・引用文献 …… 13
Ⅲ．野外調査方法と室内整理の方法 …… 14
　1．野外調査の方法 …… 14
　　(1) グリッドの設定 …… 14
　　(2) 粗掘り・遺構検出 …… 14
　　(3) 遺構名の付け方 …… 14
　　(4) 遺物の取り上げ …… 15
　　(5) 遺構の記録 …… 15
　2．室内整理の方法 …… 15
　　(1) 遺物の処理 …… 15
　　(2) 遺構図面 …… 15
　　(3) 図版について …… 15
　　(4) 遺物写真図版について …… 15
Ⅳ．検出された遺構と出土遺物 …… 20
　1．掘立柱建物跡 …… 20
　2．柱穴列 …… 23
　3．陥し穴状遺構 …… 25
　4．堀跡 …… 45
　5．溝跡 …… 47
　6．土坑 …… 58
　7．その他の柱穴状小土坑 …… 68
　8．出土遺物 …… 73
Ⅴ．まとめ …… 79
　1．遺構について …… 79
　2．出土遺物について …… 81
　参考・引用文献 …… 81
報告書抄録 …… 82
平成15年度職員一覧 …… 115

【図版】

第1図　岩手県全図における遺跡位置図 …… 2
第2図　遺跡位置図 …… 3
第3図　遺跡周辺地形分類図 …… 4
第4図　基本土層(1) …… 6
第5図　基本土層(2) …… 7
第6図　周辺の遺跡分布図 …… 10
第7図　八重幡館跡付近図 …… 12
第8図　遺構配置図(全体) …… 16
第9図　遺構配置図(拡大)A区西側・東側 …… 17
第10図　遺構配置図(拡大)B区西側、D区 …… 18
第11図　遺構配置図(拡大)B区東側、C区 …… 19
第12図　1号掘立柱建物跡 …… 21
第13図　2号掘立柱建物跡 …… 22
第14図　柱穴列 …… 24
第15図　陥し穴(1) …… 28
第16図　陥し穴(2) …… 30

第17図　陥し穴(3) …… 31
第18図　陥し穴(4) …… 33
第19図　陥し穴(5) …… 35
第20図　陥し穴(6) …… 37
第21図　陥し穴(7) …… 39
第22図　陥し穴(8) …… 40
第23図　陥し穴(9) …… 42
第24図　陥し穴(10) …… 44
第25図　1号堀跡、溝跡(1) …… 46
第26図　溝跡(2) …… 48
第27図　溝跡(3) …… 49
第28図　溝跡(4) …… 51
第29図　溝跡(5) …… 53
第30図　溝跡(6) …… 54
第31図　溝跡(7) …… 57
第32図　土坑(1) …… 60
第33図　土坑(2) …… 61
第34図　土坑(3) …… 65
第35図　土坑(4) …… 67
第36図　出土遺物(1) …… 76
第37図　出土遺物(2) …… 77

【表】

第1表　周辺の遺跡一覧(1) …… 8
第2表　周辺の遺跡一覧(2) …… 9
第3表　柱穴状小土坑観察表(1) …… 69
第4表　柱穴状小土坑観察表(2) …… 70
第5表　柱穴状小土坑観察表(3) …… 71
第6表　柱穴状小土坑観察表(4) …… 72
第7表　出土遺物観察表(1)［縄文土器］…… 78
第8表　出土遺物観察表(2)［陶磁器］…… 78
第9表　出土遺物観察表(3)［土師器］…… 79
第10表　出土遺物観察表(4)［石器・石製品］‥ 79

【写真図版】

写真図版1　調査区航空写真等 …… 85
写真図版2　基本土層 …… 86
写真図版3　作業風景、発掘状況 …… 87
写真図版4　掘立柱建物跡、柱穴列 …… 88
写真図版5　陥し穴(1) …… 89
写真図版6　陥し穴(2) …… 90
写真図版7　陥し穴(3) …… 91
写真図版8　陥し穴(4) …… 92
写真図版9　陥し穴(5) …… 93
写真図版10　陥し穴(6) …… 94
写真図版11　陥し穴(7) …… 95
写真図版12　陥し穴(8) …… 96
写真図版13　陥し穴(9) …… 97
写真図版14　陥し穴(10) …… 98
写真図版15　堀跡 …… 99
写真図版16　溝跡(1) …… 100
写真図版17　溝跡(2) …… 101
写真図版18　溝跡(3) …… 102
写真図版19　溝跡(4) …… 103
写真図版20　溝跡(5) …… 104
写真図版21　溝跡(6)、遺物出土状況(1) …… 105
写真図版22　溝跡(7) …… 106
写真図版23　土坑(1) …… 107
写真図版24　土坑(2) …… 108
写真図版25　土坑(3) …… 109
写真図版26　土坑(4) …… 110
写真図版27　土坑(5) …… 111
写真図版28　土坑(6)、遺物出土状況(2) …… 112
写真図版29　土坑(7) …… 113
写真図版30　出土遺物 …… 114

Ⅰ．調査に至る経過

宿遺跡は、ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）八重畑地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、石鳥谷町南東部に位置し平成9年度より進められている区画整理面積369haを行う事業であり、大区画１haを造成し大型機械による低コスト農業を目指すことはもとより、農地流動化を図り担い手農家を育成し、地域全体として高生産性農業と安定経営を目的としている。

（岩手県花巻地方振興局農林部農村整備室）

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．位置と立地

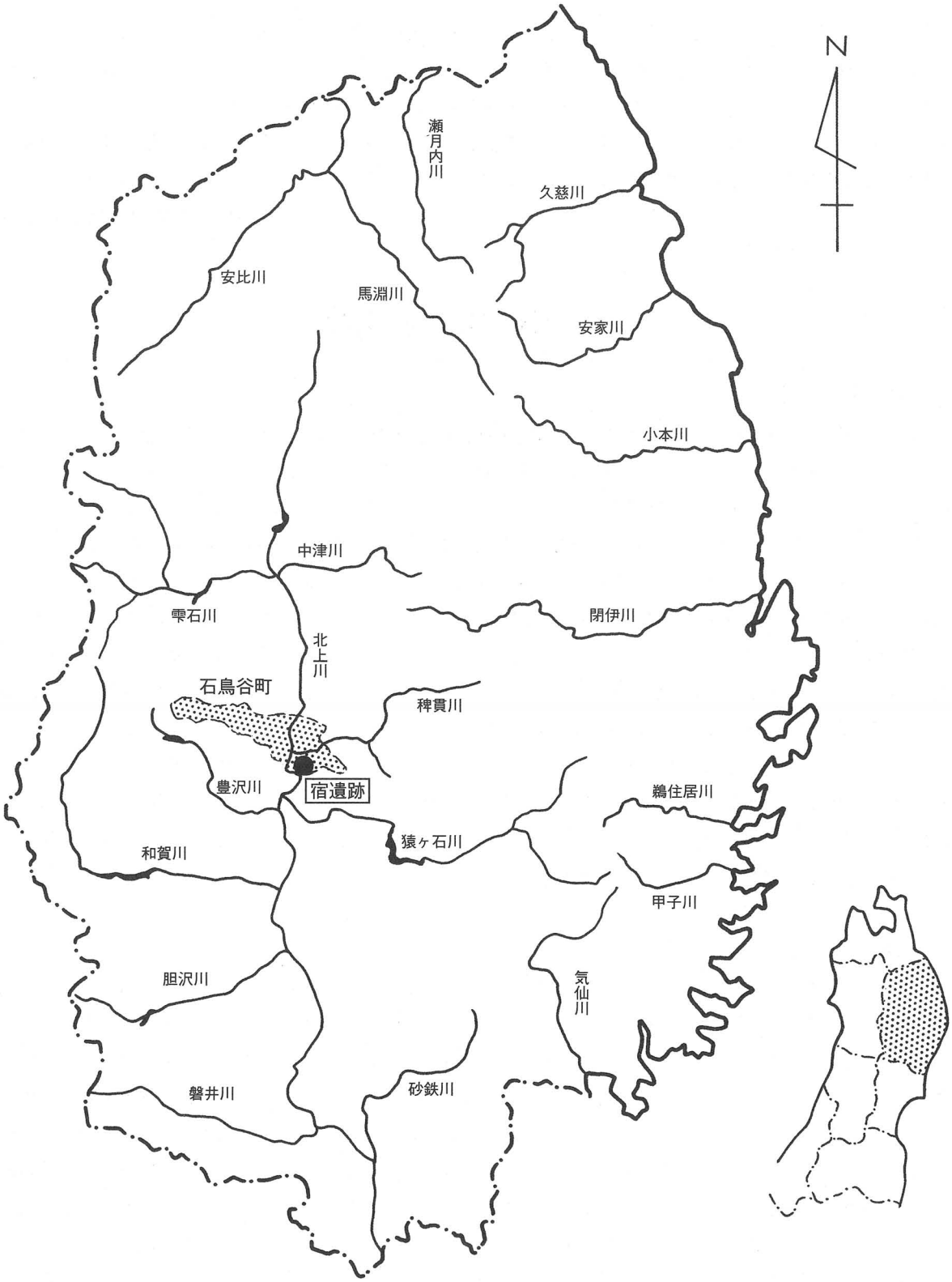
石鳥谷町は、岩手県のほぼ中央に位置し、稗貫郡西部の北上川中流域に東西に細長く広がっている。東は大迫町および東和町、西は岩手郡雫石町、南は花巻市、北は紫波郡紫波町に接している。北は稗貫川沿いに大迫町へ、南は添市川沿いに東和町に抜けることができ、古来より交通の要衝に位置している。

宿遺跡は、岩手県稗貫郡石鳥谷町八重畑第26地割ほかに所在し、花巻空港から東におよそ４km、北上川が大きく西へ蛇行する手前の左岸段丘上（標高83m前後）に位置している。周囲は全て平坦地で、現況は水田および果樹園である。本年度調査区域も、調査開始前は水田からの転作による畑作地および果樹園に隣接する農道であった。東西に「へ」の字状に延びた農道沿いの長さ約230m、幅約10mの細長い区域（Ａ区・Ｂ区）、さらにその中央付近および東端から、それぞれ長さ約100m、幅約５mで細長くＬ字型を描くように南に延びる区域（Ｃ区・Ｄ区）からなっている。

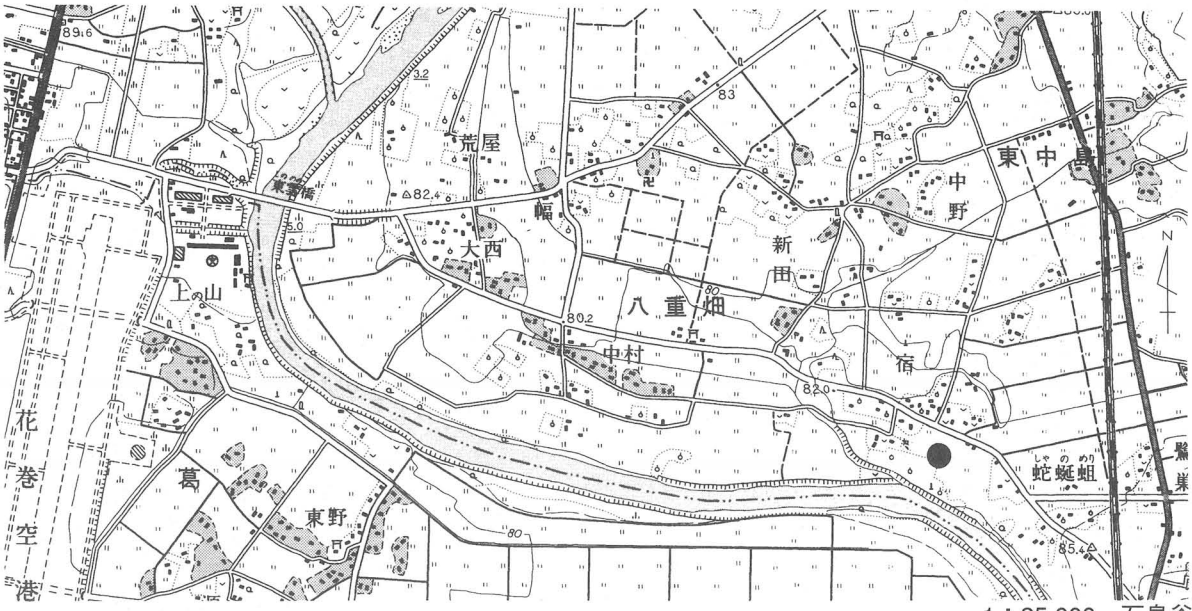
なお、本年度調査区の西隣、北上川と二郷川の合流する左岸段丘上には八重幡館（宿館）があったとされ、また、南東側には平安時代と目される蛇蜒蛆遺跡が隣接している。この地の南方は北上川の流れによって形成された段丘崖に守られ、さらに西・南を巻くようにして北上川に流れ込む二郷川が外堀の役目はを果たしているため、天然の要害として利用されたと考えられる。

２．地形・地質

石鳥谷町を流れる北上川には、奥羽脊梁山脈に源を発する葛丸川、耳取川、滝名川、さらに北上山系早地峰山に源を発する稗貫川がそれぞれ注ぎ込み、それらの河川に沿って低地が広がっている。西に奥羽脊梁山脈の標高約 600 ～ 800 mの中起伏山地の台山・塚瀬森・高狸山・権現森・諸倉山、東に早地峰山の小・中起伏山地の廻館山・赤梅山・権現堂山が連なっている。奥羽脊梁山脈と北上山地に挟まれた地形を北上川中心に見てみると、西に花巻温泉丘陵・二枚橋段丘、東に鷹山丘陵・滝田丘陵・長沢丘陵といった河岸段丘が形成されている。そのため、ここ八重畑地区一帯では北上川の左岸が急峻な段丘崖になっている。北上川の両岸には、沖積世・洪積世の砂礫層や第四期のローム層が広がるが、標高が上がるにつれて両岸の表層地質は異なる。西岸は第三紀の火山性岩石である流紋岩質岩石や集塊岩、また東岸は沖積世の砂礫、第四紀の火山性岩石に分類されるロームや安山岩質岩石、中生代の深成岩に分類される花崗岩質岩石、蛇紋岩質岩石などで形成されている。土壌は、西岸の細粒灰色低地土壌真城統・細粒グライ土壌・褐色森林土壌に対して、東岸では細粒灰色低地土壌・細粒グライ土壌・黒ボク土壌で形成されている。



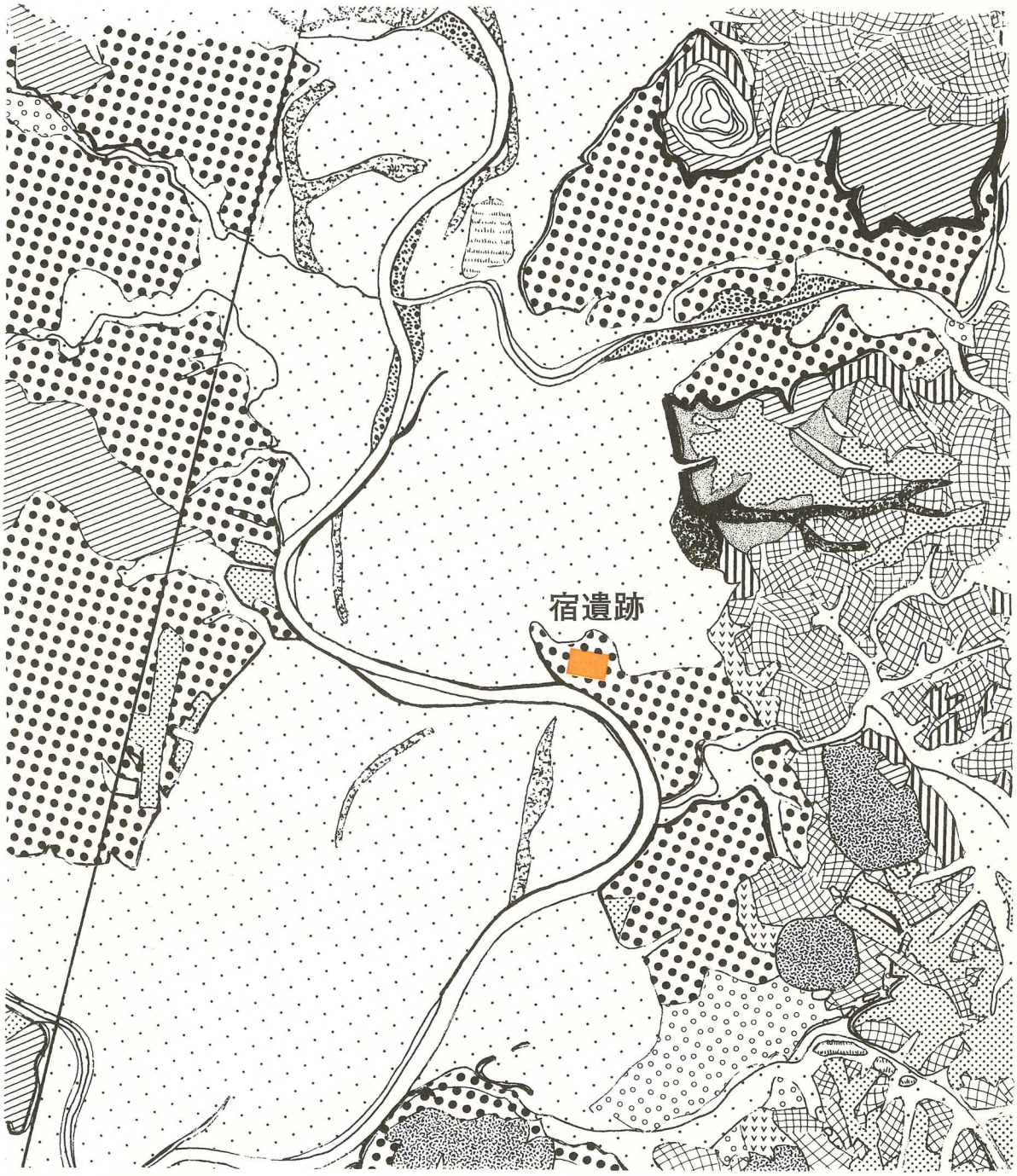
第１図　岩手県全図における遺跡位置図

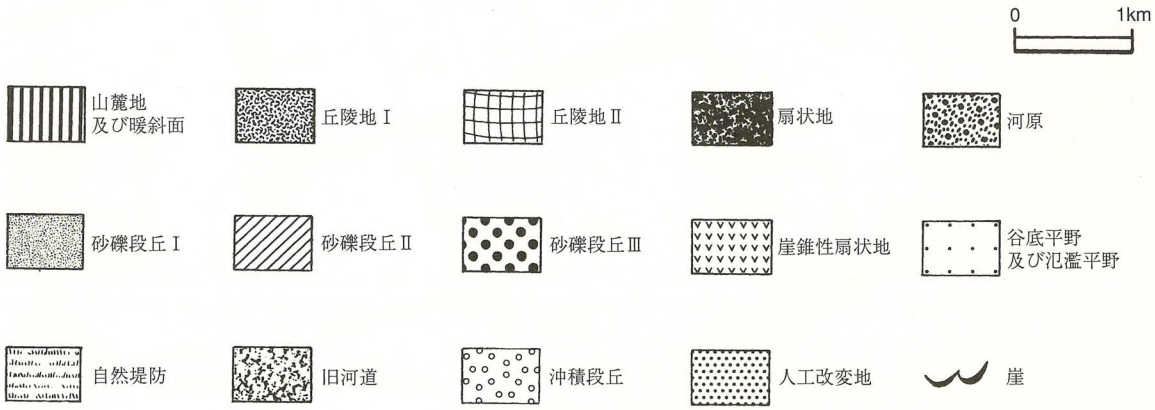


1：25,000　石鳥谷

1：2,000　県営ほ場整備事業 八重畑地区

第２図　遺跡位置図





第3図　遺跡周辺の地形分類図

3．基本層序

本遺跡は、地形図上は砂礫堆積層の上にある。北上川によって形成されたいわゆる段丘堆積物の段丘面に表土（Ⅰ層）、Ⅱ層が堆積していると考えられる。本調査においては、数カ所の深掘りトレンチを設けて層序を観察した結果、調査区域の基本層序は次のようにまとめることができた。

Ⅰ層　黒色シルト（10YR2/1）。粘性は弱く、しまりはない。耕作土である。

Ⅱ層　黒色シルト（7.5YR2/1）。調査区西側には頻繁に見られるが、調査区東側に向かって次第に薄くなり、C区南側からD区東側ではほとんど見られない。また、Ⅱ層下部にはⅢ層に向かって暗褐色シルトから暗褐色の砂や粘土へと変化する漸移層が認められる部分もある。

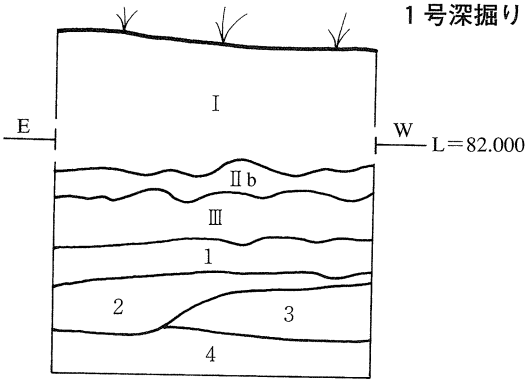
Ⅲ層　Ⅲ層以下の層序は、北上川など近隣の河川によって形成されたと考えられる粘土層および砂礫層の互層が観察され、層序の各深堀トレンチ間での対応が把握しきれなかった。調査区西側のA区（1号～3号深掘りトレンチ）では、褐色～にぶい黄橙色の砂層・粘土層・シルト層がほぼ一定の厚さで水平に重なっているように観察された。B区（4号・5号深掘りトレンチ）では薄い粘土層と薄い砂層が粒径や種類を変えながら幾層にも重なって堆積しており、中には強い水酸化作用を受けて赤褐色に変色している砂層も観察された。C区は厚い粘土層の下に砂層、D区北西側は厚い砂層の下に粘土層、D区南東側は厚い粘土層がⅢ層とし観察されている。したがって、Ⅲ層以下は、北上川をはじめとする河川の水流の影響を複雑に受けて形成された堆積層ととらえることが出来る。今回の調査では、段丘面形成の一般的な過程を考慮するとともに、深掘りトレンチによる試掘でもⅢ層以下からの出土遺物が全くなかったことを考え合わせ、Ⅲ層上面を遺構の唯一の検出面ととらえて調査を行った。

なお、本報告書では遺構配置図他への記載を省略したが、B区で旧河道が2条検出されている。まず、A15グリッド東側～A16グリッド西側には、およそ南北の軸方向で開口幅約6m、開口部からの深さ約1.4mの旧河道が一条確認されている。埋土は主として均質な黒色土で、下半部から底部にかけて厚さ10㎝程度の自然堆積と考えられる粘土層が形成されていた。一部にベルトを残して掘り上げたが、遺物は皆無であった。同じくA21グリッド東側～A22グリッド西側には、およそ東西の軸方向で開口幅約10m、開口部からの深さ約1.4mの旧河道一条が検出されている。埋土は主として均質な黒色土で、その検出面上の一帯で縄文土器片を主とする50点近い遺物破片が出土しているが、全て遺構外遺物として処理している。

4．周辺の遺跡

岩手県教育委員会の試掘調査によれば、花巻市を含め、稗貫郡一帯には旧石器時代から近世にかけての数多くの遺跡が存在している。石鳥谷町内にも、平成13年度現在187カ所の遺跡が登録されている。しかし、本格的な発掘調査の実施された遺跡は非常に少ない。昭和49年に行われた東北縦貫自動車道や東北新幹線に伴う調査が数例あり、縄文時代や平安時代の遺構や遺物などが発掘されたことから、各時代における人々の生活の営みが少なからず明らかにされているが、それ以降、調査例は減少する。最近になってやっと道路整備事業あるいはほ場整備事業にともなう部分的な調査が実施されるようになり、当センターでも、平成13年度には島岡Ⅱ遺跡と稲荷遺跡の部分的な発掘調査を行い、本年度は、貝の淵遺跡や高畑（たかばたけ）遺跡でも発掘調査が行われた。また、各事業に沿う形で、本遺跡に隣接した宿館（八重幡館）跡や蛇蜒蛆（じゃのめり）遺跡他の試掘調査も岩手県教育委員会によって断続的に行われている。これら周辺の遺跡の調査結果の詳細については、岩手県

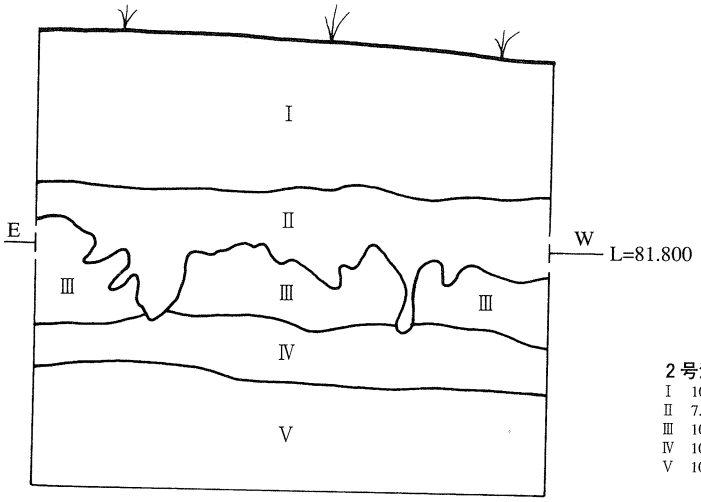
1号深掘りトレンチ



1号深掘りトレンチ

Ⅰ　10YR2/1　黒色　シルト　表土(耕作土)
Ⅱb 10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　漸移層　この地点にはⅡ層黒色土がない。Ⅱ層下部の漸移層か。
Ⅲ　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂（粗砂）
1　10YR6/4　にぶい黄褐色　粘土　マンガン斑および斑鉄散見
2　10YR8/2　灰白色　粘土　a層との境に酸化鉄層
3　10YR6/4　にぶい黄褐色　粘土　マンガン斑集中
4　10YR7/4　にぶい黄褐色　粘土　斑鉄散見

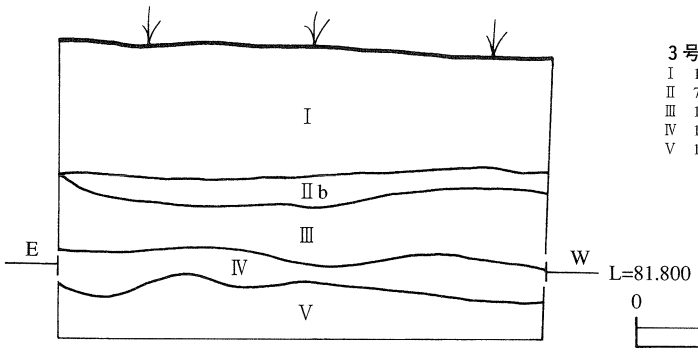
2号深掘りトレンチ



2号深掘りトレンチ

Ⅰ　10YR2/1　黒色　シルト　表土(耕作土)
Ⅱ　7.5YR2/1　黒色　シルト
Ⅲ　10YR4/6　褐色　砂
Ⅳ　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂
Ⅴ　10YR6/4　にぶい黄褐色　粘土

3号深掘りトレンチ

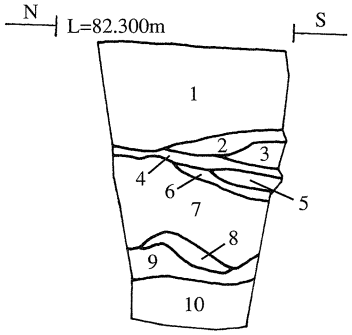


3号深掘りトレンチ

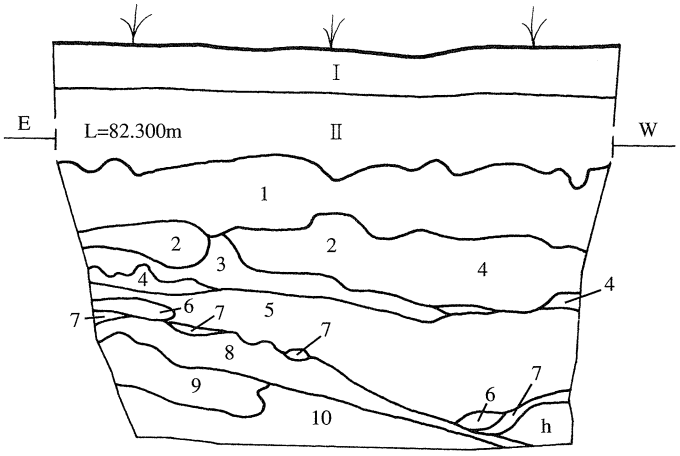
Ⅰ　10YR2/1　黒色　シルト　表土(耕作土)
Ⅱ　7.5YR3/3　暗褐色　砂質シルト　Ⅱ層下部の漸移層か
Ⅲ　10YR4/4　褐色　砂
Ⅳ　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂
Ⅴ　10YR6/4　にぶい黄褐色　粘土

第4図　基本土層（1）

4号深掘りトレンチ（DT4）



東　壁

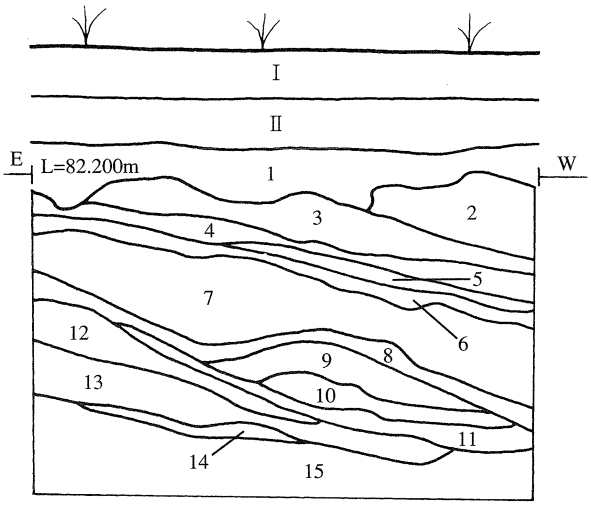


南　壁

4号深掘りトレンチ

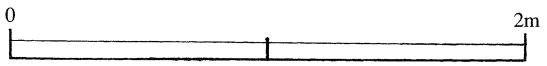
I　10YR2/1　黒色　シルト　表土（耕作土）
II　7.5YR2/1　黒色　シルト
1　10YR4/6　褐色　中砂
2　10YR2/2　黒褐色　シルト混じりの細砂　ラミナ含む
3　10YR7/7　明黄褐色　中砂
4　10YR7/7　明黄褐色　砂質　シルト
5　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
6　10YR6/4　にぶい黄褐色　シルト
7　7.5YR6/6　橙色　粗砂　赤っぽく変色（酸化）
8　10YR5/2　灰黄褐色　細砂　全体が赤っぽく変色（酸化）
9　10YR5/2　灰黄褐色　細砂
10　10YR5/2　灰黄褐色　細砂（ややシルト的）下部赤っぽく変色

5号深掘りトレンチ



5号深掘りトレンチ

I　10YR2/1　黒色　シルト　表土（耕作土）
II　7.5YR2/1　黒色　シルト
1　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト
2　10YR4/6　褐色　細砂　黒色土ブロック含む
3　10YR4/6　褐色　細砂　黒色土ブロック含む
4　10YR4/6　褐色　細砂
5　10YR4/6　褐色　中砂
6　10YR4/6　褐色　細砂
7　7.5YR4/4　褐色　粗砂　斑鉄含む
8　10YR5/4　にぶい黄褐色　細砂
9　10YR5/4　にぶい黄褐色　粗砂
10　10YR4/2　灰黄褐色　細砂　ラミナ状
11　10YR6/4　にぶい黄橙色　粗砂～小礫
12　10YR6/4　にぶい黄橙色　粗砂～小礫
13　10YR5/4　にぶい黄橙色　細砂～砂質シルト
14　10YR5/4　にぶい黄橙色　細砂～斑鉄を含む
15　10YR5/4　にぶい黄橙色　粗砂
16　10YR4/2　灰褐色　粗砂～礫　酸化鉄層挟む



第5図　基本土層（2）

（石鳥谷町）

No	遺跡名	種別	時代等／備考
1	長善寺Ⅱ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器
2	島	集落跡	平安／土師器、須恵器
3	沼の欠	散布地	平安／土師器、須恵器
4	上和町Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器
5	上沢田Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
6	上沢田Ⅱ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
7	白幡林古墳	古墳	古墳／古墳
8	北向古墳群	古墳群	古墳／古墳
9	八日市	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器
10	光林寺館	散布地・城館跡	縄文・古代・中世／縄文土器、土師器、須恵器、堀
11	大興寺Ⅰ	散布地	古代／須恵器
12	大興寺Ⅱ	散布地	古代／土師器口縁部
13	塚原	集落跡	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器、住居跡
14	内御堂	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器
15	宇洞	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器
16	保沢川	散布地	平安／土師器、須恵器
17	久保Ⅰ	散布地	平安／土師器、須恵器
18	久保Ⅱ	散布地	平安／土師器、褒恵器
19	久保Ⅲ	散布地	平安／土師器、須恵器
20	明戸Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器
21	明戸Ⅱ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
22	明戸Ⅲ	散布地	平安／土師器
23	明戸Ⅳ	散布地	平安／土師器、須恵器
24	番屋	散布地	古代／土師器
25	島岡Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
26	島岡Ⅱ	散布地	平安・近世／土師器、須恵器、水路跡
27	種森	散布地	平安／土師器、須恵器
28	幅	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
29	幅欠	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
30	野沢川Ⅰ	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
31	野沢川Ⅱ	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
32	百目木	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器
33	大曲	散布地	平安／土師器、須恵器
34	上野々	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
35	上十日市	散布地	平安／土師器
36	志登計	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
37	戸塚蟹沢	散布地	縄文・古代／縄文土器土器、土師器
38	硯石	散布地	縄文・古代／縄文土器、須恵器
39	長石	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
40	滝田笹原	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器、石器
41	蟹沢Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
42	戸塚笹原	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
43	蒲沢	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
44	端館	散布地・城館跡	平安・中世／土師器、須恵器
45	下十日市古墳群	古墳群	古墳／古墳
46	塚の森Ⅰ	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
47	塚の森Ⅱ	散布地	平安／土師器
48	七ッ森古墳群	散布地・古墳群	縄文・古墳／縄文土器、古墳、土師器
49	七ッ森	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
50	貝の淵Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
51	猪鼻	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
52	猪鼻Ⅱ	散布地	古代／須恵器

第１表　周辺の遺跡一覧（1）

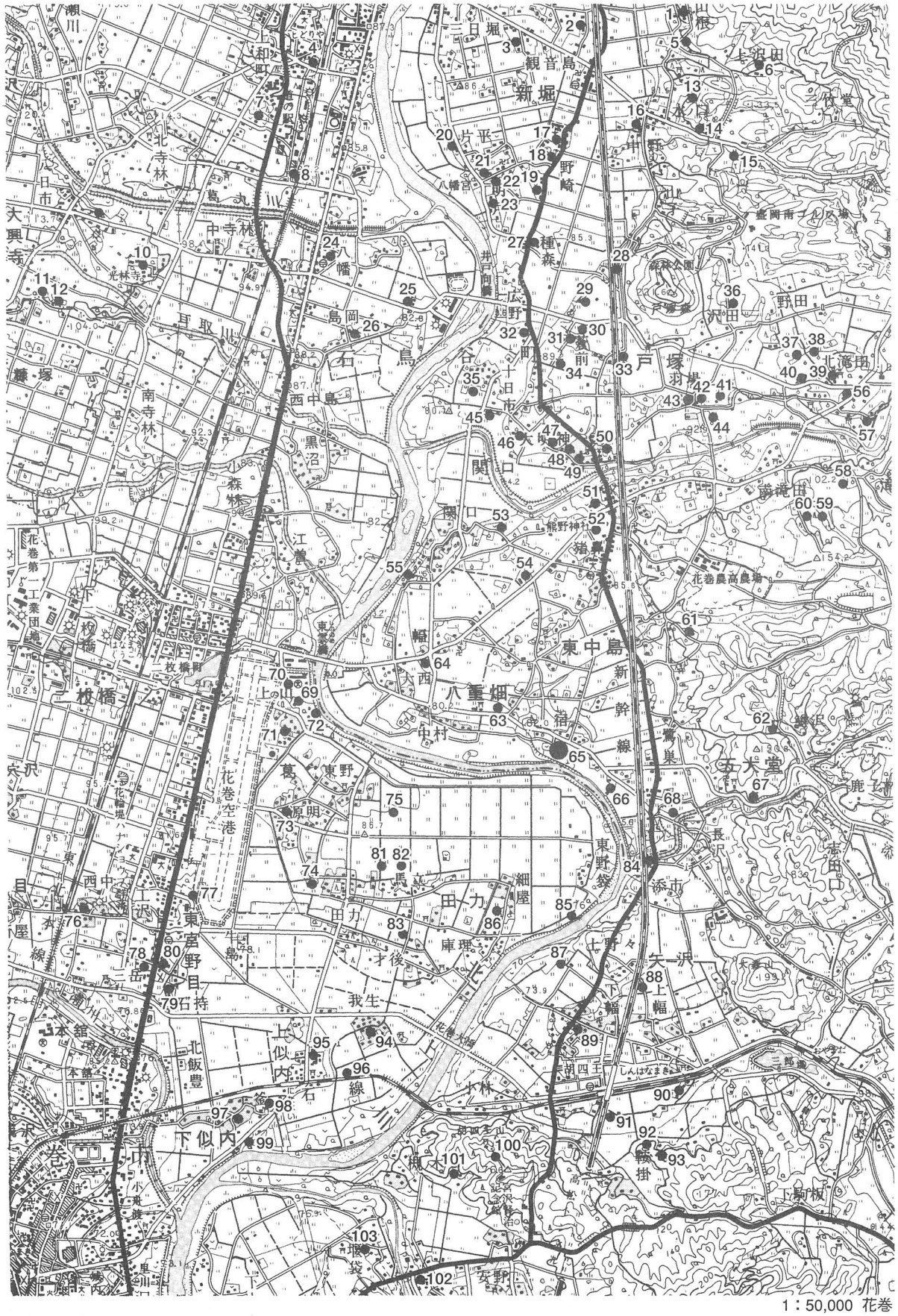
（石鳥谷町）

No	遺跡名	種別	時代等／備考
53	下館Ⅱ	散布地	古代／土師器
54	関	散布地	古代／土師器
55	関口	散布地	古代／土師器、須恵器
56	滝田歳の神	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
57	大川原館	散布地・城館跡	縄文・古代／縄文土器、土塁、堀
58	曲谷地	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
59	見山	散布地	古墳　縄文・古墳／縄文土器
60	見山古墳群	散布地	古墳／古墳
61	反町	古墳群・祭祀跡	縄文・古墳／縄文土器、古墳、住居跡
62	滝田硯石	散布地	平安／土師器
63	稲荷	集落跡	縄文・古代／縄文土器、土師器、須恵器、刀子、鉄棒
64	荒野	散布地	古代／土師器
65	**宿・宿館**	**集落跡・城館跡**	**縄文～中世／縄文土器、土師器、堀、壕**
66	蛇蜒蛆	散布地	平安／土師器
67	沢流	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
68	安堵屋敷	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器

（花巻市）

69	佐渡川古墳群	古墳群	古墳／円墳、土師器
70	宮野目方八丁	城館跡	平安／住居跡、土師器、須恵器、鉄器、堀
71	上ノ山	散布地	縄文・古代／縄文土器
72	上ノ山	集落跡・城館跡	縄文～中世／堀、縄文土器、石器、土師器、須恵器
73	源明Ⅰ	散布地	平安／須恵器
74	源明Ⅱ	散布地	古代／土師器
75	葛	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器
76	ＭＥ16－1069	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器、須恵器
77	十三塚	散布地	平安／塚、古銭
78	岳	散布地	古代／土師器
79	石持Ⅰ	散布地	古代／土師器
80	石持Ⅱ	散布地	古代／土師器
81	馬立Ⅰ	散布地	平安／土師器
82	馬立Ⅱ	散布地	平安／土師器
83	田力中野	散布地	縄文・平安／縄文土器、土師器
84	添市古墳群	散布地	古墳／古墳
85	東野袋	散布地	古代／土師器
86	庫理	散布地	縄文・古代／縄文土器、土師器
87	矢沢古堂	散布地	古代／土師器、須恵器、鉄製品
88	上幅	散布地	縄文・古代／石器、縄文土器、竪穴住居
89	下幅	散布地	古代・平安／土師器、竪穴住居、須恵器
90	ＭＥ27－0221	散布地	古代／土師器・須恵器
91	矢沢八幡	集落跡・城館跡	平安・近世／竪穴住居、掘立柱跡、土師器、須恵器、古銭
92	経塚森	経塚	古代／土師器、塚
93	寺場	集落跡	古代／竪穴住居跡、土師器、須恵器
94	ＭＥ16－2364		古代／土師器
95	似内	集落跡	古代／土師器、須恵器
96	似内	散布地	古代／土師器、須恵器
97	ＭＥ26－0233	散布地	古代／土師器
98	下似内	散布地	古代／土師器、須恵器
99	下東	散布地	古代／土師器、須恵器
100	胡四王山館	散布地	平安／縄文土器、土師器、須恵器、空濠
101	槻ノ木Ⅲ	散布地	縄文・古代／縄文土器、石器、土師器、須恵器
102	高松Ⅱ	散布地	縄文・弥生・平安／縄文土器、弥生土器、土師器
103	堰袋Ⅱ	散布地	古代／土師器、須恵器、土錘

第２表　周辺の遺跡一覧（2）



第６表　周辺の遺跡一覧（2）

教育委員会あるいは当センター発行の発掘調査報告書に譲るものとし、本報告では、周辺の遺跡の遺跡名・種別・該当する時代等の紹介とその遺跡分布図を掲載するのみに止める。

5．周辺の歴史

(1) 稗貫郡の歴史

稗貫郡成立以前はもとより稗貫郡の成立については詳細な史料が全く見つかっていない。初めてその名が登場するのは、岩手県一帯が陸奥国（むつのくに）とよばれていた頃とされる。延暦二十（801）年の征夷大将軍坂上田村麻呂は胆沢平定の後、二十一年の胆沢城の築城、さらには二十三年の紫波城の築城を経て、「弘仁二（811）年に、陸奥国に和我（わが）、稗縫（ひえぬき）、斯波（しわ）の三郡を置く」（日本後記）と紹介されているのみである。したがって郡家（役所）が置かれ郡司も任命されたと考えられるが、その後も何ら記録の残されないまま時が過ぎた。再びその名を現すのは、およそ三百年後に安倍氏の台頭を見てからである。

(2) 稗貫氏の興りと没落

鎌倉幕府による平泉藤原氏討伐の後、戦功のあった関東御家人が奥羽各地を所領として与えられ、一族や家臣が新たな郡司や地頭として下向した。それらの中から後に南部氏、斯波氏、和賀氏、稗貫氏、葛西氏、伊達氏などの有力な領主が現れ、鎌倉幕府崩壊の後も南北朝時代の戦乱を経て戦国時代へと生き抜いてきたのである。その中にあって稗貫氏の記録は極めて少ないが、元は三河の国の中條氏ではなかったかとする説がある。稗貫氏は、当初、現在の花巻市にあった十八ヶ城（さかりがじょう）に居を構え、後に鳥谷ヶ崎城（とやがさきじょう）（後の花巻城）に移り住んだとされる。鎌倉幕府が倒された後の南北朝期には、当初南朝方であったが、後に北朝方の有力な領主として存続し続けたと見られる。しかし、時代の趨勢（すうせい）を読み誤り豊臣秀吉の小田原征伐に参陣せず、後に秀吉の奥州仕置によって領地を没収され滅亡した。

(3) 八重幡館と八重幡氏

八重幡氏に関する詳しい資料が乏しく、また異説もあるが、その始祖は稗貫氏の始祖大和守広重の子光真（または光直）であったとされる。広重の子からは他にも後に有力支族となる亀ヶ森氏、大迫氏が出ている。八重幡氏は代々稗貫氏の重臣として仕え、中には家老や執権として活躍するなど稗貫氏一族の中でも有力な支族であったといわれる。永享年間には八重幡（現八重畑）の地に館を築き居住していたとされる。秀吉の奥州仕置による主家稗貫氏の没落によって館は廃棄された模様で、その後同じく秀吉によって領地を没収された和賀氏の家臣大竹氏一族が移り住み帰農して今日に至ったとされる。この地は、今は水田や果樹園あるいは宅地になっているため、往時の面影はないが、かつては複数の郭（くるわ）に分けられた群郭式（連郭式）の平城であったと考えられている。「本丸」「二の丸」「三の丸」「出丸」「牢舎」「学問所」「馬屋」など多数の郭（くるわ）があったとも伝承されるが、これらの呼称は中世に使用されていたものとは考えられない。現在では、北上川と二郷川の合流する左岸付近より、およそ北に向かって長さ約100m、幅・深さともに悠に７mを超える空堀跡が残るのみである。

（本節の内容は、主に参考・引用文献16～18より引用した。また、第７図「八重畑館跡付近図」は参考・引用文献3および19より引用し一部改変したものである。）

第７図　八重畑館跡付近図

県営ほ場整備事業　八重畑地区 推定標高図使用

＜参考・引用文献＞

岩手県

1．1974　「北上山系開発地域　土地分類基本調査　花巻」

岩手県教育委員会

2．2001　「平成13年度遺跡包蔵地一覧」

3．1986　「八重畑館」『岩手県中世城館跡分布調査報告書』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

4．2003　「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第423集）

5．2002　「稲荷遺跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第408集）

6．2002　「島岡Ⅱ遺跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第407集）

7．2002　「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第397集）

8．2001　「西長岡長谷田遺跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第361集）

9．2000　「似内遺跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第344集）

10．1998　「小森林館跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第280集）

11．1997　「松本館跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第256集）

12．1997　「白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集）

13．1995　「西田東遺跡発掘調査報告書」　（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第221集）

（財）岩手県埋蔵文化財センター

14．1984　「安堵屋敷遺跡発掘調査報告書」　（岩手県埋文センター文化財調査報告書第74集）

15．1984　「小森林館跡発掘調査報告書」　（岩手県埋文センター文化財調査報告書第73集）

稗貫氏探訪八百年記念実行委員会

16．1995　「稗貫氏探訪」　（稗貫氏八百年顕彰記念誌）

石鳥谷歴史民俗研究会

17．藤原正造　1988　「稗貫氏考」　（いしどりや歴史と民俗　第６号）

18．加藤辰五郎　1997　「八重畑(幡)氏物語」　（いしどりや歴史と民俗　第11号）

19．1997　「八重幡城址付近図」、「八重幡館(城)絵図」　（いしどりや歴史と民俗　第12号）

平凡社

20．1990　「岩手県の地名」金野静一ほか　（日本地名大系　第３巻）

Ⅲ．野外調査方法と室内整理の方法

１．野外調査の方法

(1) グリッドの設定

今回調査した範囲は、東西および南北に対してわずかにずれた方向に細長く延びた区域であったため、作業効率を優先させるために調査区の形状に合わせてグリッドを設定した。大グリッドは10m 間隔で組み、グリッド名には、およそ北から南に向かってＡ～Ｆのアルファベット大文字を当て、直行する線上でおよそ西から東に向かって１～24の整数を当てた。南北方向の軸の方向角は東偏18°35′45″である。さらに２m間隔で大グリッドの各軸を５等分して５×５の25区画の小グリッドに分け、北側から順にア行～ナ行のそれぞれ５文字を東向きに配して小グリッドを設定した。なお、グリッドの基点とした基準杭および補杭の座標は世界測地系に基づいて求めた。基準杭及び補杭の座標(Ｘ，Ｙ)と標高(H)は次の通りである。

基１：	X＝－62890.354	Y＝29011.399	H＝82.489(m)
基２：	X＝－62926.066	Y＝29117.531	H＝82.660(m)
補１：	X＝－62857.187	Y＝28912.830	H＝82.204(m)
補２：	X＝－62874.408	Y＝28964.010	H＝82.018(m)
補３：	X＝－62941.534	Y＝28994.177	H＝82.763(m)
補４：	X＝－62959.394	Y＝29047.253	H＝82.458(m)

(2) 粗掘り・遺構検出

調査は、調査区をＡ～Ｄの４区に分け、まずＡ区農道沿いに設置されていた水路のＵ字管をコンクリート製の台座ごと撤去した。２カ所の台座跡をトレンチ代わりに掘り下げたところ、すぐに玉砂利が大量に埋まっていることが分かった。それら２カ所の玉砂利は手作業で全て撤去した。同様の台座跡が20数カ所残っていたため、後日農道部分の掘り下げの際に撹乱部分として予め重機によって玉砂利の撤去を行った。また、Ａ区からＤ区にかけての耕作地部分にはＡ区西側から順次トレンチを入れた。途中、僅かに縄文土器片が出たが、いずれのトレンチでもⅡ層まで遺物や遺構が見あたらなかたことから、Ⅱ層まで一括して重機による粗掘りを行った。その後、台座跡を利用した深掘りトレンチで基本層序の確認を行うとともに、人手による遺構検出をすすめた。

(3) 遺構名の付け方

遺構名は、遺構の種類毎に次のような記号を定め、数字を付けて仮番号とした。なお、本報告では遺構の種類毎の掲載名をそれぞれ連番で表し、柱穴状小土抗のみ掲載番号と仮番号を観察表（第３～６表）に示した。

ＳＫ１、ＳＫ２、～：土坑（陥し穴含む)、

［ＡＰ１、ＢＰ１、ＣＰ１、ＤＰ１］～：［Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ］区の柱穴状小土坑

ＳＤ１、ＳＤ２、～：溝・堀

ＳＢ１、ＳＢ２、～：掘立柱建物跡

(4) 遺物の取り上げ

遺物は遺構外出土のものがほとんどで、日付の他に小グリッド単位で層位を記入し、遺構内出土の場合はやはり日付の他に遺構名と出土層位を記入して取り上げている。

(5) 遺構の記録

遺構の記録は主に実測図作成と写真撮影により行い、実測図に表現できないものはフィールドカードに記録した。作図は、主として簡易やり方測量によって平面図と断面図を作成した。また、必要に応じて平板による平面図も作成した。また、遺構の形状・深さにより正確な断面形を図化できない場合には完掘後にエレベーション図を作成した。なお、縮尺は20分の1を基本とした。

写真は、半截して得られる断面より埋土の堆積状況を、また完掘状態での全景をそれぞれ精査の途中で必要に応じて撮影している。フイルムは 35mm 判と 6 × 9 cm 判のモノクロームネガフィルムを用いたほか 35mm カラーリバーサルフィルムも使用した。調査区全景については航空写真撮影を行った。

2．室内整理の方法

(1) 遺物の処理

遺物の処理は次の手順を踏んだ。

①水洗・乾燥　②注記　③接合・復元　④掲載遺物の選別　⑤実測図および拓影の作成（遺物の実測図は全て原寸で作成した。）　⑥トレース　⑦写真撮影　⑧写真図版および図版の作成　⑨収納

(2) 遺構図面

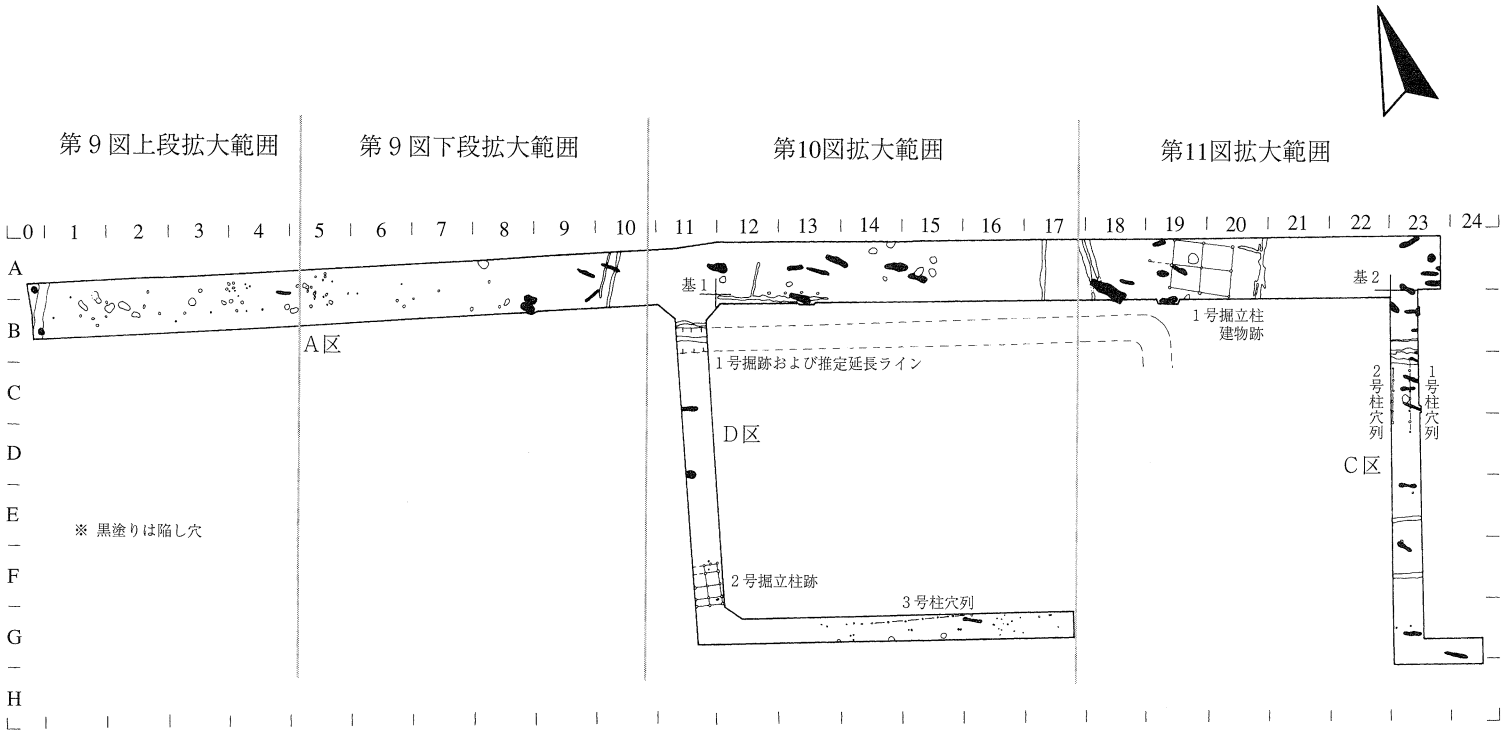
各遺構毎に第１原図（平面図と断面図）を合成し第２原図を作成した。遺構の第２原図は全て縮尺 20 分の１とした。また、遺構配置図は縮尺 400 分の１の全体図と縮尺 200 分の１の部分拡大図を作成した。

(3) 図版について

主に第２原図を縮尺20分の１のままトレースし、必要に応じて台紙のサイズを変え、土器・陶磁器については縮尺を３分の１にし、剥片については、大きめのものは縮尺を約３分の１とし、小さいもののみ原寸のままとして報告書掲載用の図版を組んだ。

(4) 遺物写真図版について

遺物写真は２個の微少な剥片のみ縮尺約２分の１で仕上げ、他は全て縮尺約３分の１で仕上げたものを原寸用台紙に貼り付けて報告書に載せるための写真図版組を行った。



基1　X＝－62890.354
　　Y＝　29011.399

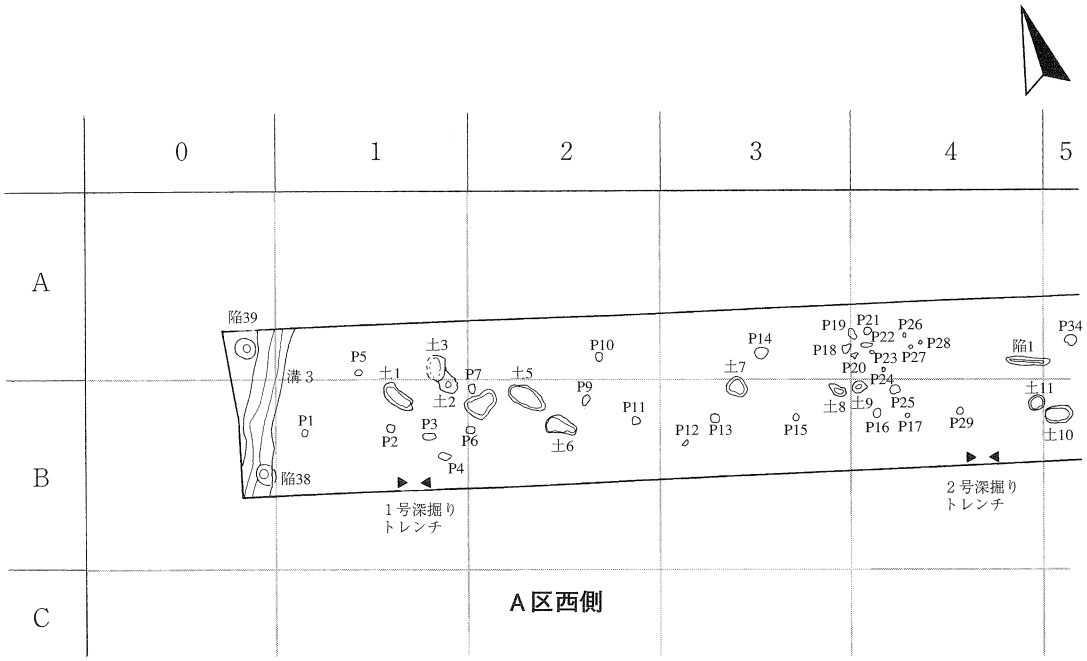
基2　X＝－62926.066
　　Y＝　29117.531

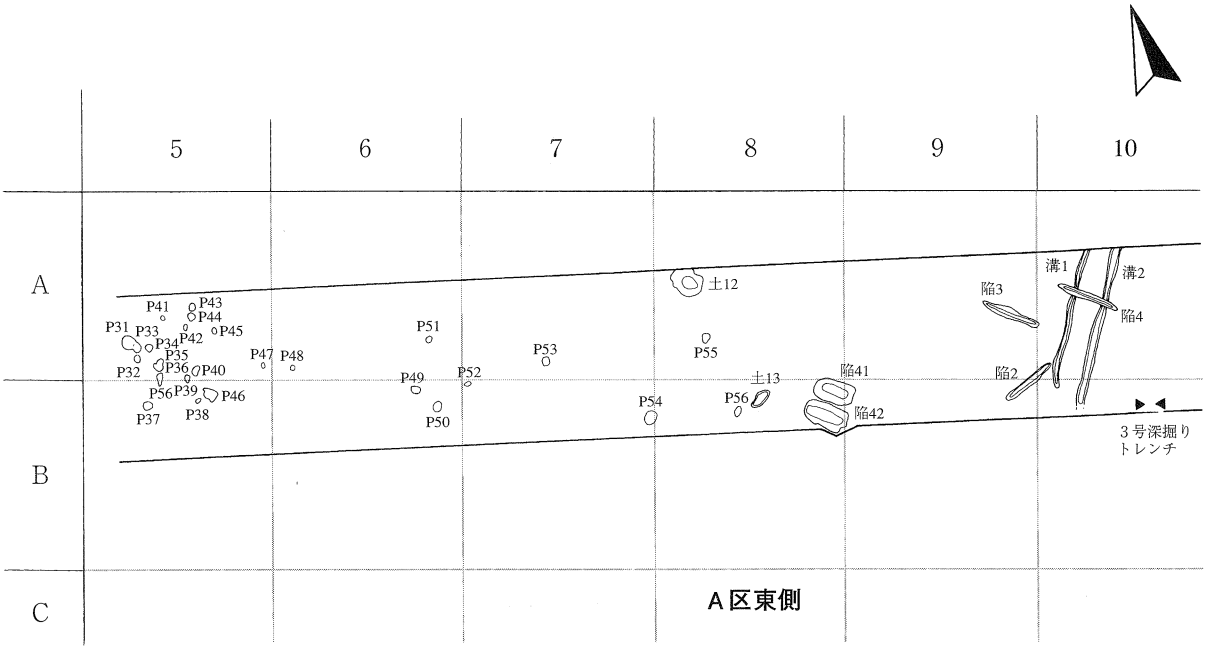
（世界測地系）

1：1,250

0　10　20　30m

第８図　遺構配置図（全体）

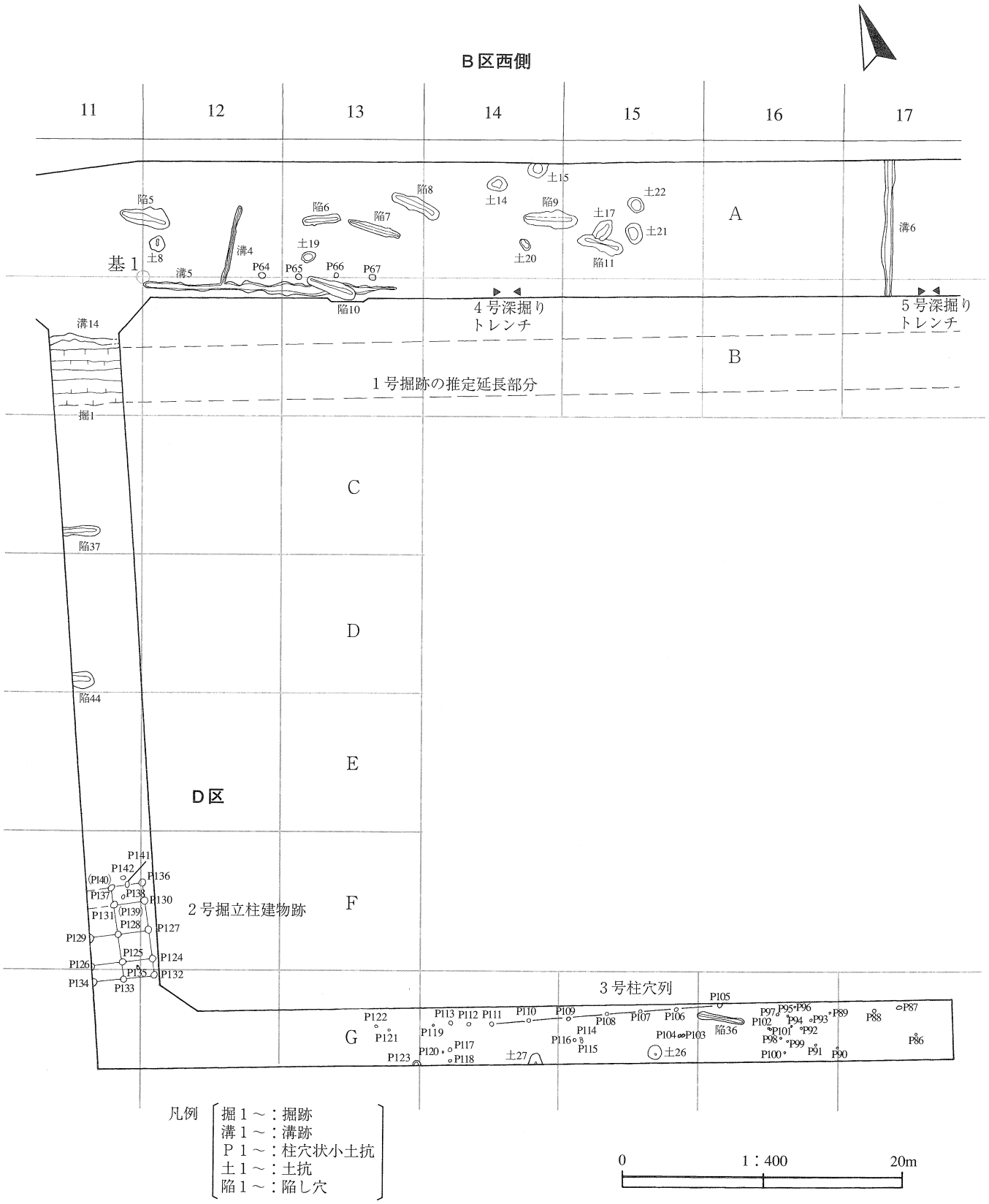




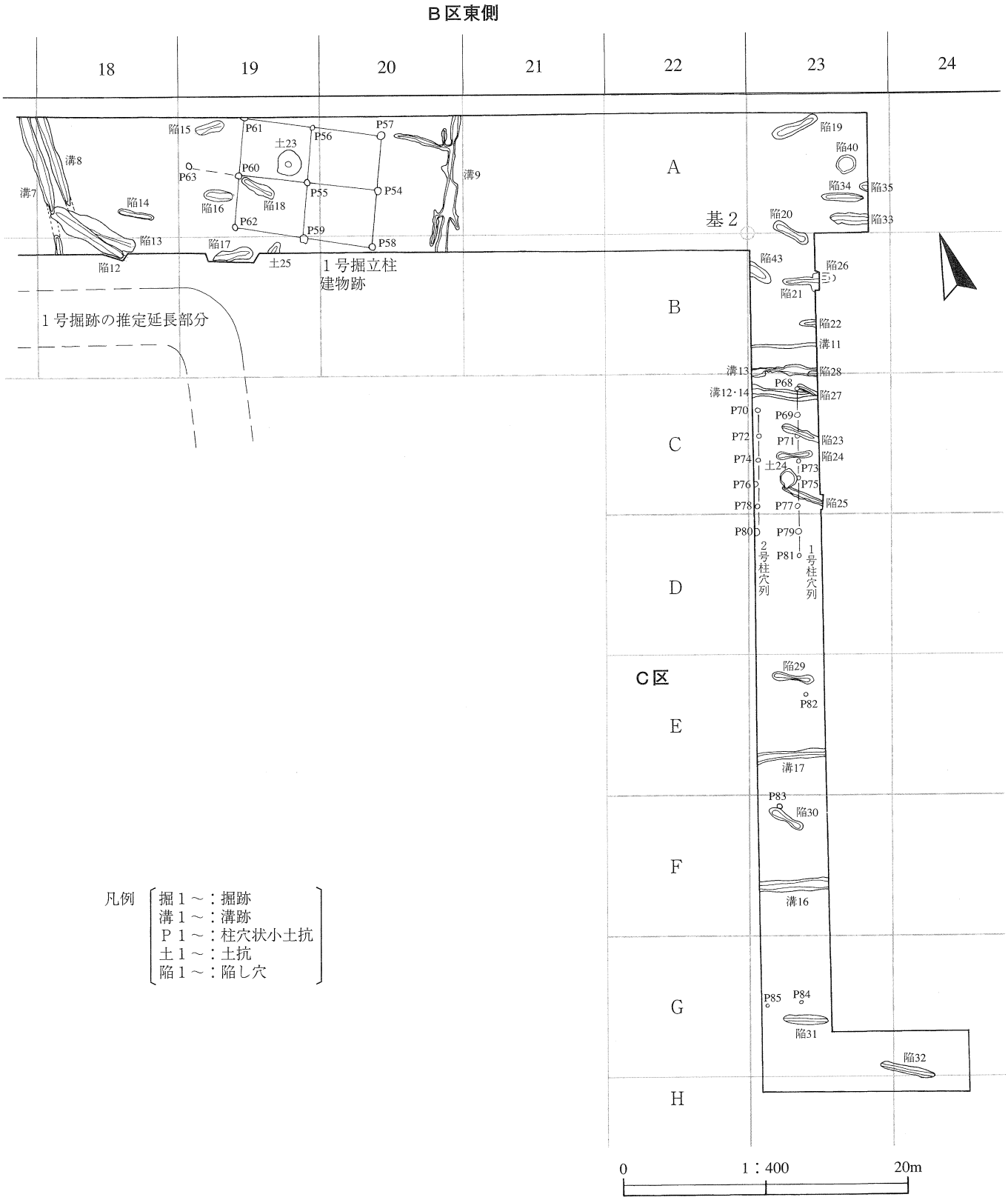
凡例
- 溝１～：溝跡
- Ｐ１～：柱穴状小土抗
- 土１～：土抗
- 陥１～：陥し穴

0　1：400　20m

第９図　遺構配置図（拡大）Ａ区西側・Ａ区東側



第10図　遺構配置図（拡大）B区西側・D区



第11図　遺構配置図（拡大）B区東側・C区

Ⅳ．検出された遺構と出土遺物

今回の発掘調査により、掘立柱建物跡２棟、堀跡１条、溝跡16条、陥し穴状遺構44基、土坑27基、柱穴列３条、その他に柱穴状小土坑多数を検出した。なお、遺構配置図では省略したが、Ｂ区では、A15グリッド東側～A16グリッド西側にかけて、およそ南北の軸方向で開口幅約５ｍの旧河道が一条確認されている。また、同じくＢ区A21グリッド東側～A22グリッド西側にかけて、およそ東西の軸方向で開口幅約10mの旧河道一条と複数の風倒木痕が確認され、特にこの旧河道の開口部付近のⅡ層底部を中心として、Ａ区・Ｂ区のⅡ層から散発的に縄文土器片等が出土し、そのほとんどを遺構外遺物として取り上げた。

１．掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第12図、写真図版４、第４表）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ19サ、Ａ19ウ～Ｂ20イ、Ａ19ニ～Ａ20ク。**P5**を除く各柱穴はⅢ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。**P5**は、攪乱と考えられる浅くて楕円形に近い黒褐色シルトのプランの中央付近で検出された。

＜重複・新旧関係＞　18号陥し穴及び23号土坑との重複が確認されているが、柱穴と重複する遺構はなかった。18号陥し穴の方が１号掘立柱建物跡よりも旧いと考えられる。23号土坑との新旧関係は不明である。

＜規模＞　桁行２間(9.8m)、梁行２間(8.0m)、柱間は桁行間3.9～4.1m(13～13.7尺)、梁行間4.9m(16.3尺)を測る。柱穴の深さは検出面から14.5～61.0㎝を測る。柱穴の配置はおよそ長方形を呈しているが、柱位置には若干のゆがみが見られ、全体がやや平行四辺形状を呈する。また、主軸上で**P4**から北西側に3.5m(11.6尺)離れて検出された**P10**は、１号掘立柱跡の柱穴と規模が似ており、庇の柱穴の跡と判断した。なお、南北両側の調査区境に接しているため、遺構が調査区外へ延びている可能性もある。

＜主軸方向＞　Ｎ－24°－Ｅ

＜柱穴の埋土の状況＞　いずれの柱穴も柱痕は確認できず、上半部にⅡ層相当の黒色シルト、下半部には同黒色シルトに地山褐色砂の混在層が堆積している。

＜出土遺物＞　遺物は出土しなかった。

＜時代＞　不明である。

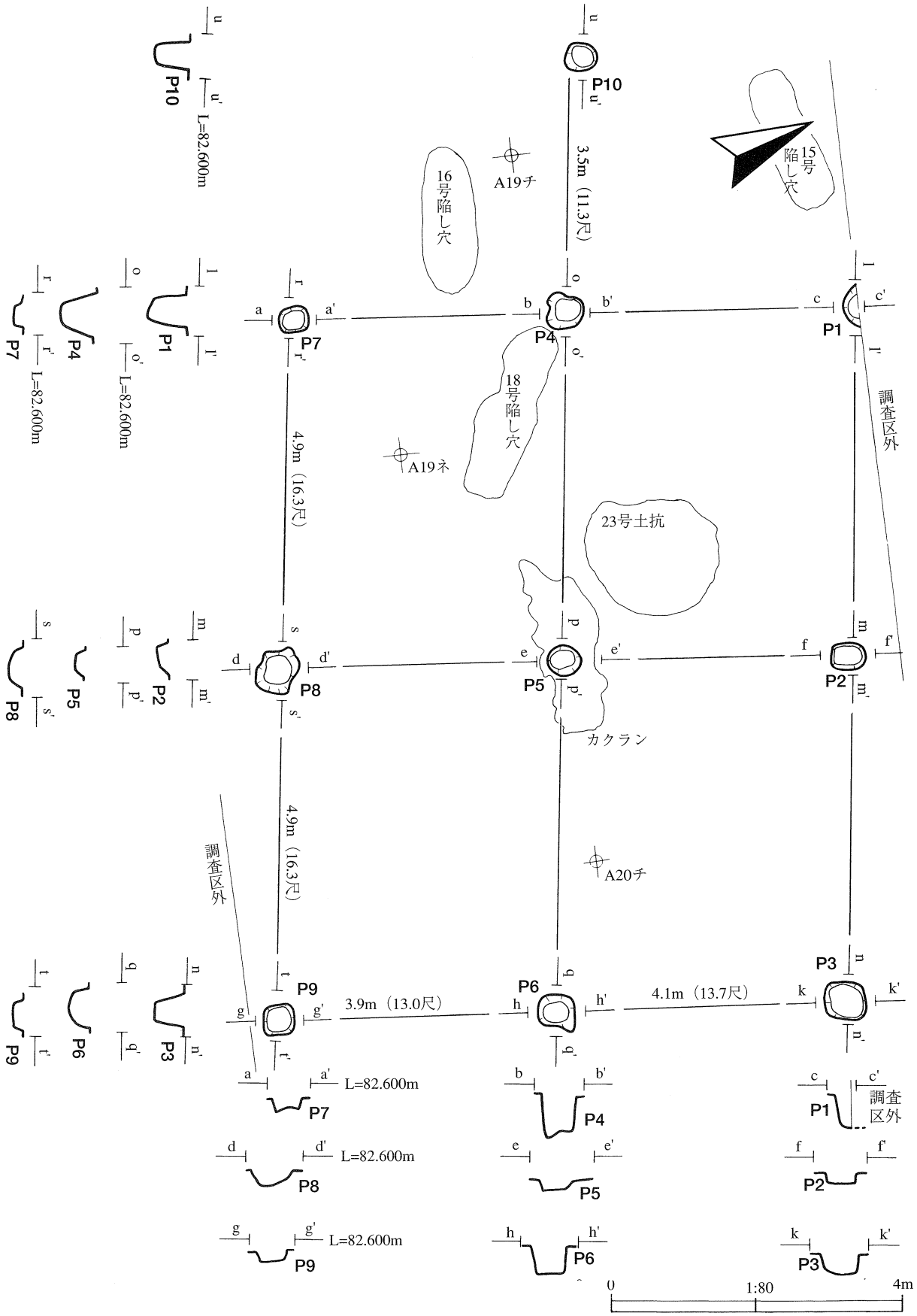
＜建物の性格＞　総柱であることから、高床式の倉庫あるいは板張りの床をもった家屋の跡ではないかと考えられる。

２号掘立柱建物跡（第13図、写真図版４、第６表）

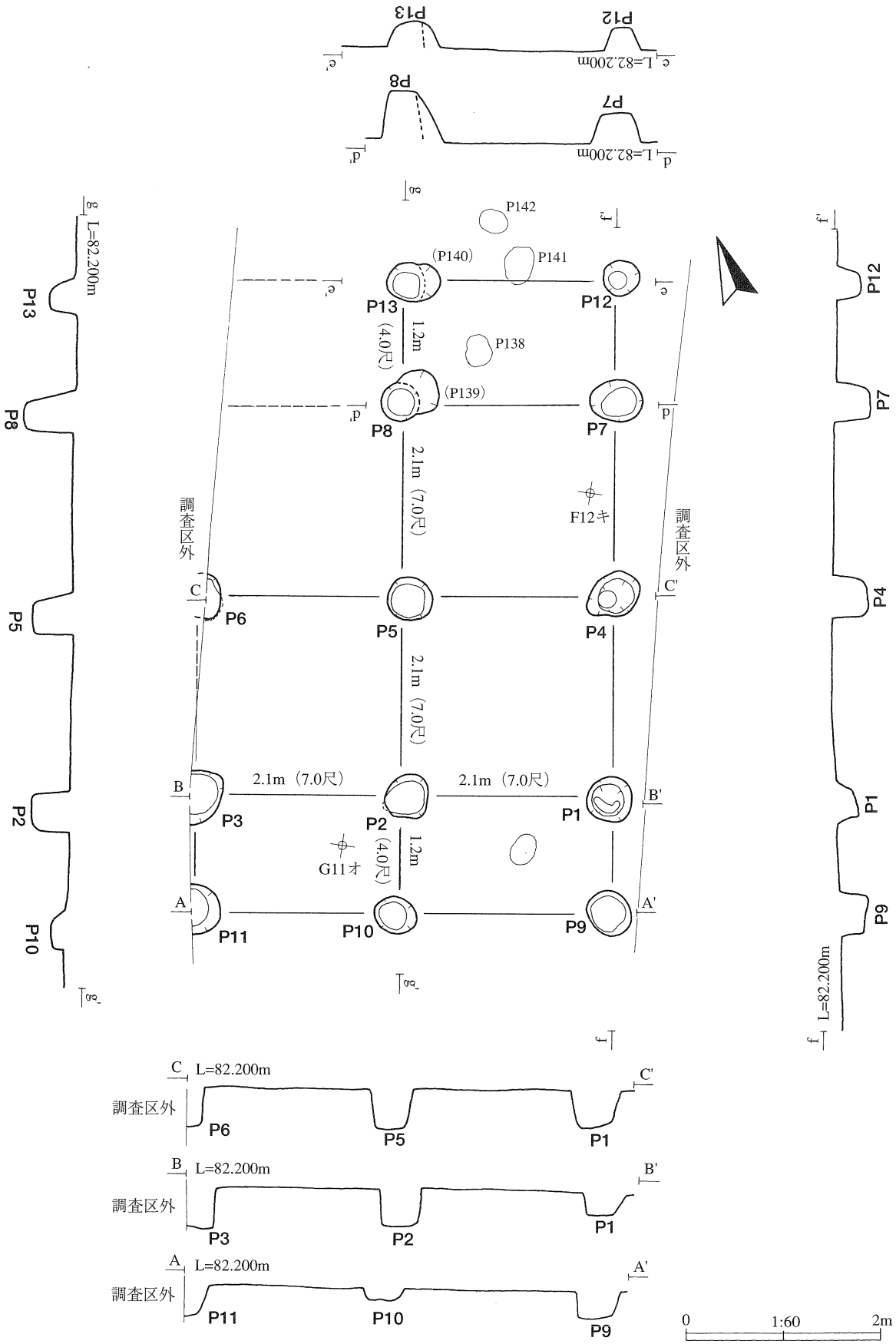
＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｆ12カ～G11ネ、G11エ、Ｆ11キ～Ｇ12、Ⅲ層褐色砂の上面で均質な黒色シルトのみの明瞭なプランや黒色シルトと暗黄色砂～粘土のブロックが混在する明瞭なプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　**P8**及び**P13**の東側には抜き取り痕が検出された。〔第10図：(P140)、(P120)〕その他、時代の新旧関係が不明な柱穴状小土坑が２基重複しているのみである。〔第10図：P135、P136、P141〕

＜規模＞　桁行２間(4.2m)、梁行２間(4.2m)、柱間およそ2.1m（７尺）を測る。柱穴の深さは検出面から24.0～52.0㎝を測る。検出した範囲では総柱で正方形状を呈している。さらに南北にそれぞれ1.2m（４尺）



第12図　1号堀立柱建物跡



第13図　2号堀立柱建物跡

離れた位置に桁行きと平行な柱穴列が各１列並び、南北方向に平行に建て替えをした跡のようにも見えたが、総柱と見た場合、中央部分の柱穴に関しては移動の跡がなく、最終的に南北両側に庇のある建物であったと判断した。なお、東西両側で調査区境に接しているため、遺構が調査区外へ続いている可能性もある。

＜主軸方向＞　Ｎ－77°－Ｗ

＜柱穴の埋土の状況＞　いずれの柱穴も柱痕はなく、褐色砂（地山）混じりの黒色シルト（10YR2/2）及びⅡ層相当の均質な黒色シルト（7.5YR2/1）で埋まっていた。埋土の状態はそれぞれの柱穴で多少は異なるが、Ⅱ層相当の黒色シルトが下になっている柱穴が多く、希にⅡ層相当の黒色シルトにも地山砂ブロックが入っている程度の違いであった。そのことから、ほぼ同時期に全ての柱を抜いて埋め戻したものと考えられる。

＜出土遺物＞　柱穴**P11**の埋土上部より縄文土器片が１点出土した。

＜時代＞　不明である。柱穴**P11**から出土した縄文土器片は、検出面付近のⅡ層起源の埋土（黒色シルト）から出土したものなので、黒色シルト中に含まれた状態で柱穴内に流入したものと判断し、時代判定の材料とはしなかった。

＜建物の性格＞　総柱であるが柱間が狭いことから、高床式の倉庫の跡ではないかと考えられる。

２．柱穴列

１号柱穴列（第14図、写真図版４、第４・５表）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｃ23イ～Ｄ23キ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。２号柱穴列と軸方向がほぼ並行で、柱穴位置の対応も若干見られるが断定はできない。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜規模＞　柱間1.26～1.94m（4..2～6.5尺）、平均1.69m（5.6尺）、**P1**～**P8**の８基の柱穴状小土坑からなる。柱穴は検出面から10㎝前後と浅いが、検出面のⅢ上にⅡ層が残っていないことから、Ⅲ層上部がある程度削り取られている可能性がある。

＜主軸方向＞　Ｎ－18°－Ｅ

＜柱穴の埋土の状況＞　黒色シルトが均質な状態で入っていた。

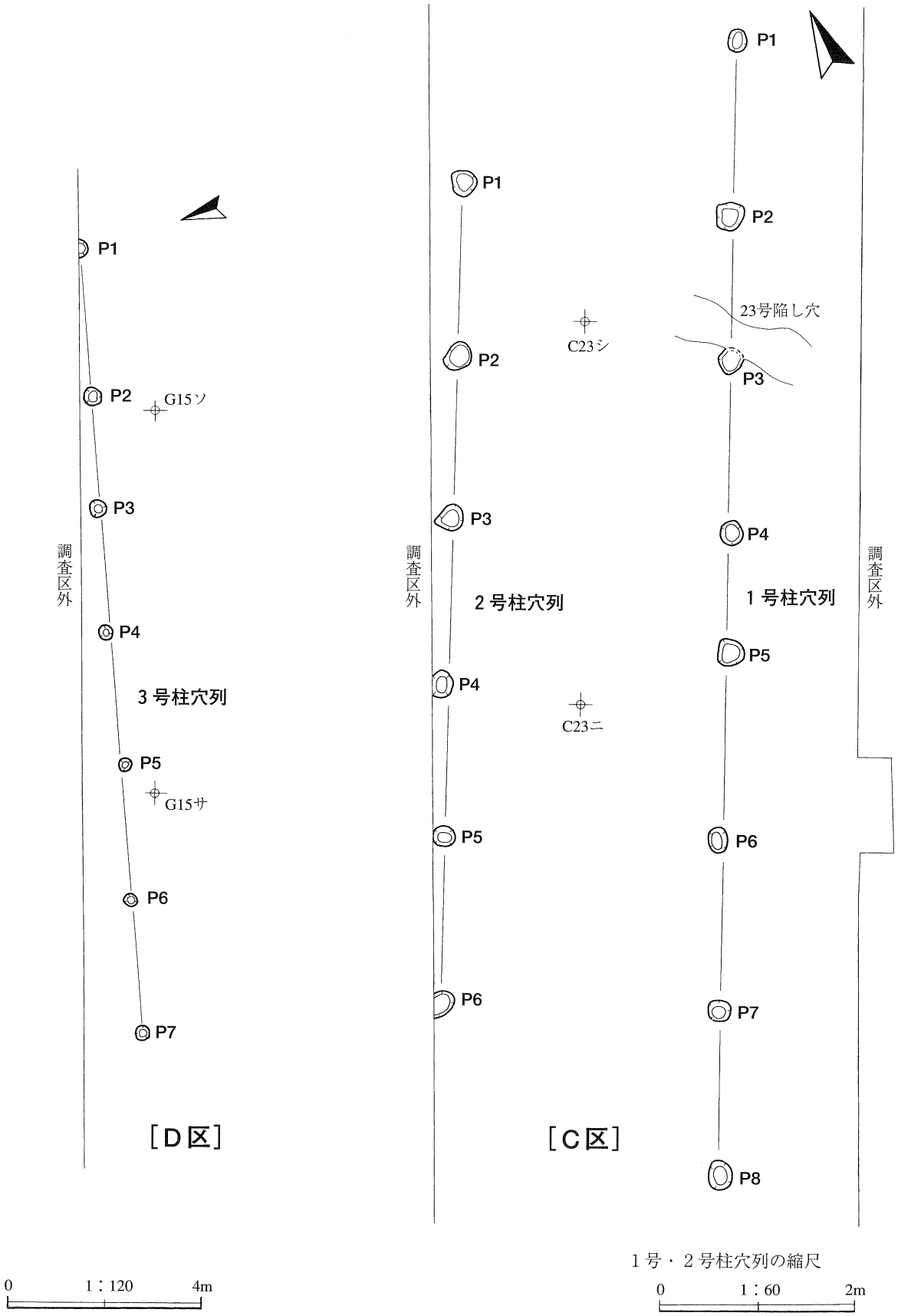
＜出土遺物＞　遺物は出土していない。

＜時期＞ 時代は不明である。

＜柱穴列の性格＞　２号柱穴列との間で柱穴の位置の対応も一部には見られるが、２号柱穴列の柱間で２ヶ所ほど極端に狭い部分がありそれらの部分で対応できていないことや、２号柱穴列の**P1**に対応する柱穴が検出されないこと、１号側の**P2**～**P3**と**P4**～**P5**の柱間が、２号側の柱間と大きくずれていること、さらに１号・２号柱穴列ともに検出面からの深さが10㎝前後と浅く表土上面からもそれほど深くないこと、また、プランの輪郭が比較的はっきりしている状況などから、あまり古くない時代の柵列などの跡である可能性もあると判断した。その場合、２号柱穴列と同時に使用されていたものか、建て替えの関係にあるものかは分からない。

２号柱穴列（第14図、写真図版４、第４表）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｃ23カ～Ｄ23ア、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。１


P1
P2
G15ソ
P3
P4
3号柱穴列
P5
G15サ
P6
P7
調査区外
[D区]
0
1：120
4m
P1
P2
C23シ
P3
P4
2号柱穴列
P4
C23ニ
P5
P6
調査区外
[C区]
P1
P2
23号陥し穴
P3
P4
1号柱穴列
P5
P6
P7
P8
調査区外
1号・2号柱穴列の縮尺
0
1：60
2m

第14図　柱穴列

号柱穴列と軸方向がほぼ平行で、柱穴位置の対応も若干見られるが断定はできない。
＜重複・新旧関係＞　柱穴状小土坑**P3**の一部分が23号陥し穴と重複し、これを切っているので、２号柱穴列の方が新しい。
＜規模＞　柱間1.60～1.80m(5.3～6.0尺)、平均1.71m(5.7尺)、**P1**～**P6**の６基の柱穴状小土坑からなる。１号柱穴列と同様に柱穴は検出面から10㎝前後と浅いが**P5**のみ20㎝に達している。検出面より上にⅡ層が残っていないことからⅢ層の上部がある程度削り取られている可能性がある。
＜主軸方向＞　N－20°－E
＜柱穴の埋土の状況＞　黒色シルトが均質な状態で入っていた。
＜出土遺物＞　遺物は出土していない。
＜時期＞　時代は不明である。
＜柱穴列の性格＞　１号柱穴列との間で柱穴の位置の対応も一部には見られるが、極端にずれている関係も見られる。また、それぞれの埋土の状況からそれほど古くない時代の柵列である可能性も高い。その場合、１号柱穴列と同時に建っていたものか、建て替えの関係にあるものかは分からない。

３号柱穴列（第14図、第５表）
＜位置・検出状況＞　Ｄ区、Ｇ14ク～Ｇ14カ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。
＜重複・新旧関係＞　他の遺構との重複関係は認められない。
＜規模＞　柱間2.24～3.08m(８尺～10尺)、平均2.70m(6.9尺)、７基の柱穴状土坑からなる。検出面からの深さは、**P5**の16.5㎝が一番浅く、他の６基は20.0㎝以上であり、一番深い**P3**では57.0㎝にも達した。
＜主軸方向＞　N－77°－W
＜柱穴の埋土の状況＞　どの柱穴も上層に黒色シルト層、側面から底面にかけては小粒の褐色砂ブロック（Ⅲ層検出面相当）を含む黒色シルト層であった。上層の黒色シルト層は、柱を抜いた後の埋土であろう。
＜出土遺物＞　遺物は全く出土していない。
＜時期＞　時代は不明である。
＜柱穴列の性格＞　検出された柱穴はそれ程深いものではないが、１号・２号柱穴列に比べるとやや深い。遺物が全く出土しないため、時代を特定することができなかった。また、軸方向が、２号掘立柱建物跡の桁行き方向（N－77°－W）とほぼ同じで、柱穴列の延長が２号掘立柱建物跡の南側の間近を通る位置にあたる。この２号掘立柱建物跡との関連性について確かめることは不可能であるが、ここが北上川に面した段丘崖部分との境界線の役割を担う柵列であった可能性が考えられる。なお、調査区境にあるため、東側調査区外に延びている可能性も考えられる他、柱穴の深さから見て、北側調査区外に延びた掘立柱建物の一部である可能性も考えられる。

３．陥し穴状遺構

44基検出した。開口部平面形や横断面の形状から溝状37基、円筒形３基、長方形４基の３つのタイプに大きく分類した。溝状のものは、両端と中央部の幅の変化や壁面の切り方などでさらに細かく分類できる可能性もあるが、本遺跡では壁面の崩落で大きく変形したと考えられるものも幾つかあるため、細かい分類は試

みていない。また、溝状の場合は壁面の崩落によって開口部や底面の痕跡がはっきりしないものがあり、溝状の陥し穴状遺構では、概ね短径（溝の幅）を中央部に設けたベルト付近の一番狭い位置で計測し、検出面からの深さは同様にベルトの断面で確認した底面の位置で測っている。

なお、これらの陥し穴状遺構が、他の報告書や文献資料（参考・引用文献23）から見て全て陥し穴の跡であると断定し、本報告では、以後、単に「陥し穴」と表記する。また、他の遺跡調査報告書や研究報告書を比較すると、これらの陥し穴の形状的分類に付けられた名称には微妙な違いが認められ、単にアルファベット文字で機械的に分類している場合も多い。そこで、本報告においては、便宜上、前述の通り３つのタイプの陥し穴をそれぞれ「溝状陥し穴」「円筒形陥し穴」「長方形陥し穴」と表記することにした。

＜陥し穴の埋土の状況＞

埋土の堆積状況は、ほぼ全ての陥し穴で共通している。特に、溝状陥し穴では、最下部にしまりのない黒褐色～暗褐色のシルトまたは砂質シルトが薄い層状に堆積しており、今回の調査では底面及び底部の壁の識別に一定の役割を果たしている。上半部が厚い砂層になっている地区に掘られたものについては、上半部壁面より崩落したと思われる砂が厚い単層あるいは２～３層の重なりのようになって下半部に堆積している。また、上半部が厚い粘土層の地区に掘られたものについては、下半部に粘土質や黒色シルト質の薄い互層が形成されている。いずれの場合も降雨などによる流水によって壁面から崩れ落ちたり地表から流れ込んで堆積したものであると考えられる。その堆積層の上にはいずれの場合も浅い窪みが形成され、均質な黒色シルト層が形成されている。なお、縦断面の観察を試みた３号・４号陥し穴では、いずれも中央付近が先に埋没していく状況が認められる。これは、両端に比べて中央部の幅がやや狭いことがその理由と考えられる。一方、円筒形陥し穴や長方形陥し穴でも、雨水などによって流れ込んだり側壁から崩落したと思われる砂質シルト・粘土・黒色シルトなどが層を為して堆積している。したがって、いずれの陥し穴でも、埋土は自然に堆積したものと考えられる。

＜陥し穴からの出土遺物と掘られた時期について＞

各陥し穴からの出土遺物は24号陥し穴の上部埋土からの縄文土器片が１点あるのみで、出土遺物からそれぞれの陥し穴が掘られた時期を判断することは出来ない。しかし、これまでの陥し穴研究（参考・引用文献23、）によれば、溝状、円筒形、長方形のいずれもが縄文時代後半に盛行するタイプであることから、本遺跡でも縄文時代に帰属するものと考えられる。

(1) 溝状陥し穴

１号陥し穴（第15図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ａ４ノ～Ａ５ナ、Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－65°－Ｗ

＜規　模＞　長径226cm×短径36cm、中央部深さ84cm。

2号陥し穴（第15図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ａ９セ～Ａ10タ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－49°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径320cm×短径36cm、中央部深さ96cm。３号陥し穴状遺構とハの字状に対を為すように検出されたが、時期的な関連は不明である。

3号陥し穴（第15図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ９オ～Ａ10ナ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。第２号陥し穴状遺構とハの字状に対を為すように検出されたが、時期的な関連は不明である。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－68°－Ｅ

＜規　模＞　開口部は長径300cm×短径44cm、中央部深さ84cm。

4号陥し穴（第15図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ａ10サ～Ａ10ツ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　１号溝跡および２号溝跡に切られており、第４号陥し穴の方が旧い。

＜主軸方向＞　Ｎ－49°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径334cm×短径74cm、中央部深さ98cm。

5号陥し穴（第16図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ11ソ～Ａ12タ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの長楕円形プランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－57°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径360cm×短径74cm、中央部深さ98cm。砂層に掘られたため、側壁の崩落の跡が著しく観察され、元の規模は不明である。

6号陥し穴（第16図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ13タ～Ａ13ス、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

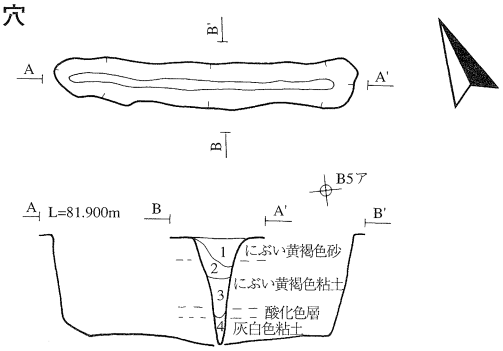
＜主軸方向＞　Ｎ－73°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径272cm×短径48cm、中央部深さ84cm。砂層に掘られていたため上半部は周囲から砂が崩落して窪んだ厚い砂層が形されていた。下半部の壁も明瞭ではなかったが、周囲の厚い砂層に堆積時のラミナが残っており、崩落による堆積部分との区別がかろうじて可能であった。

7号陥し穴（第16図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ13ス～Ａ13ト、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

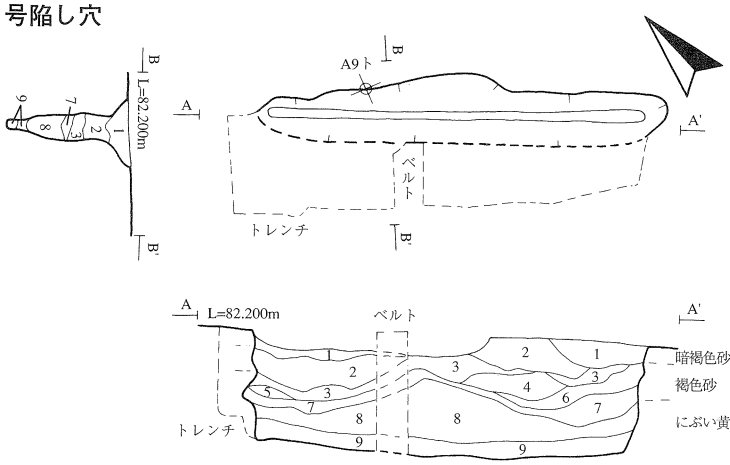
1号陥し穴



1号陥し穴

1　10YR1.7/1　黒色　シルト　均質
2　10YR1.7/1　黒色　シルト　暗褐色・褐色土ブロック50%
3　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　褐色土ブロック20%
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂　しまり弱い

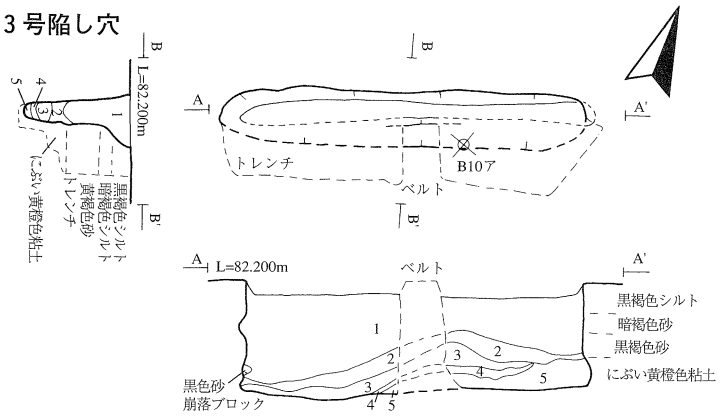
2号陥し穴



2号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト　黒色土ブロック10%　しまり弱い
2　10YR4/4　褐色　砂　黒色土斑状に20%　しまり弱い
3　7.5YR2/1　黒色　シルト　褐色土ブロック20%　しまり弱い
4　10YR4/6　褐色　砂　黒色土斑状に20%　しまり弱い
5　10YR4/6　褐色　大ブロック　しまり弱い
6　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　褐色土ブロック20%　しまり弱い
7　10YR4/6　褐色　砂　暗褐色ブロック20%　しまり弱い
8　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　均質　しまり弱い
9　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　しまり弱い

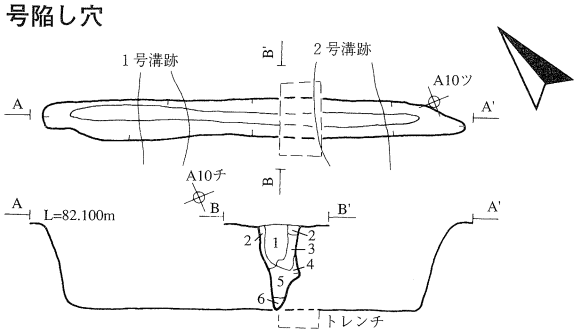
3号陥し穴



3号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト　下部に褐色砂ブロック5～20%
2　10YR4/4　暗褐色　シルト　2～3枚帯状に重なる
3　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　褐色土ブロックを斑状に含む
4　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　底面を覆う

4号陥し穴



4号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト　下部に褐色砂ブロック
2　10YR4/4　褐色　砂質シルト　黒色土斑状10%
3　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
4　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
5　10YR4/6　褐色　砂　地山のラミナを断ち切っている。
6　10YR4/6　褐色　砂　5との境に黒色土が薄く入っている。

0　1:60　2m

第15図　陥し穴（1）

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　N－55°－W
＜規模＞　開口部は長径384cm×短径44cm、中央部深さ80cm。砂層に掘られていたため上半部には周囲から砂が崩落して窪んだ厚い砂層が形されていたが、下半部の壁と初期の堆積層が残っていた。

8号陥し穴（第16図、写真図版6）
＜位置・検出状況＞　B区、A13ケ～A14サ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　N－48°－W
＜規　模＞　開口部は長径358cm×短径68cm、中央部深さ84cm。砂層に掘られていたため上半部には周囲から砂が崩落して窪んだ厚い砂層が形されていたが、下半部の壁と初期の堆積層が残っていた。

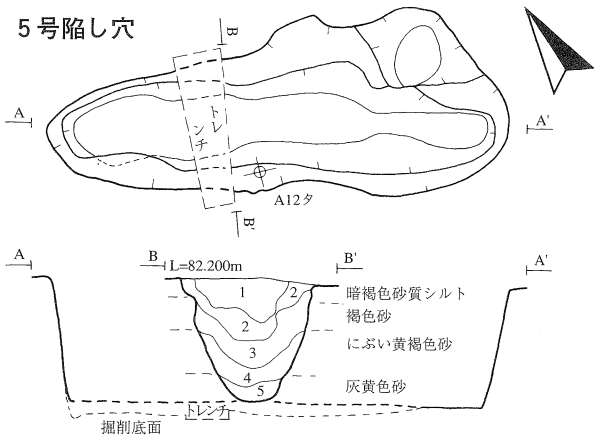
9号陥し穴（第16図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞　B区、A14セ～A15タ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　N－69°－W
＜規　模＞　開口部は長径380cm×短径72cm、中央部深さ120cm。

10号陥し穴（第17図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞　B区、A13イ～A13ウ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　N－53°－W
＜規　模＞　開口部は長径354cm×短径60cm、中央部深さ120cm。

11号陥し穴（第17図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞　B区、A15シ～A15チ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの楕円形のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　17号土抗と重複するが、新旧関係は不明。
＜主軸方向＞　N－56°－W
＜規　模＞　開口部は長径328cm×短径54cm、中央部深さ98cm。

12号陥し穴（第17図、写真図版7）
＜位置・検出状況＞　B区、A18タ～B18エ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　第13号陥し穴と重複しており、断面観察から12号陥し穴の方が新しいと考えられる。
＜主軸方向＞　N－38°－W
＜規　模＞　開口部は長径618cm×短径60cm、中央部深さ106cm。他の溝状のものに比べて2倍程度の長さであったが、厚い砂層地域であったため、全体的に崩落の痕跡が強く認められ、溝状陥し穴が2基が直列に並んでつながってしまったものかどうかの判別はできなかった。

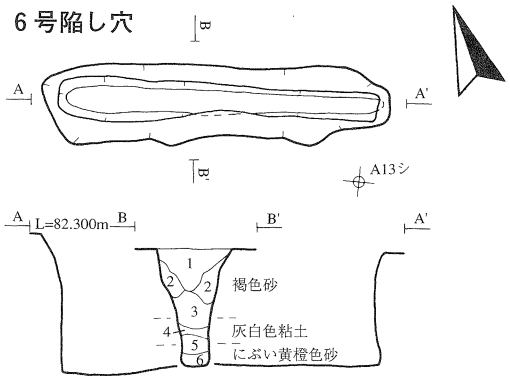
5号陥し穴



5号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト　均質
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト
3　10YR5/6　黄褐色　砂　均質　一気に埋まった状態
4　2.5YR6/4　にぶい黄色　砂　中央がへこむ　ラミナ状
5　2.5YR6/2　灰黄色　砂　底面に薄く褐色シルト層（厚19mm）

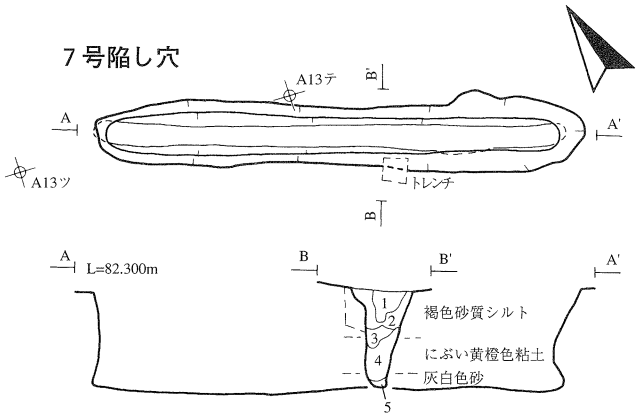
6号陥し穴



6号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト　下部に褐色土ブロック含む
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　黒色を土斑状に含む
3　10YR4/6　褐色　　砂　均質　一気に埋まった状態
4　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　一気に埋まった状態
5　10YR4/6　褐色　　砂　3層に同じ
6　10YR4/4　褐色　　砂質シルト　底面に薄く帯状に黒色シルト層有り

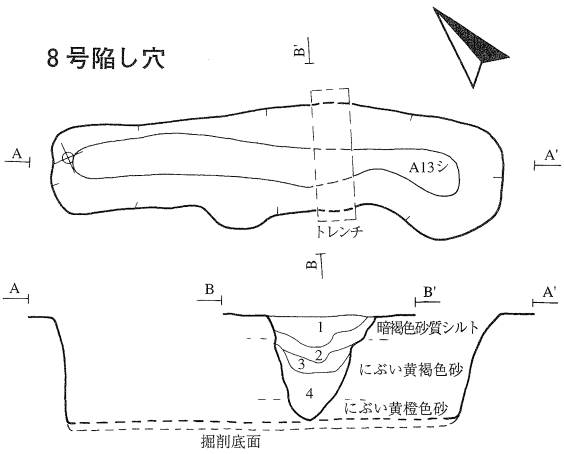
7号陥し穴



7号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　斑状に褐色土大ブロック
3　7.5YR2/1　黒色　シルト　均質
4　10YR4/6　褐色　シルト　均質　一気に埋まった状態
5　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト

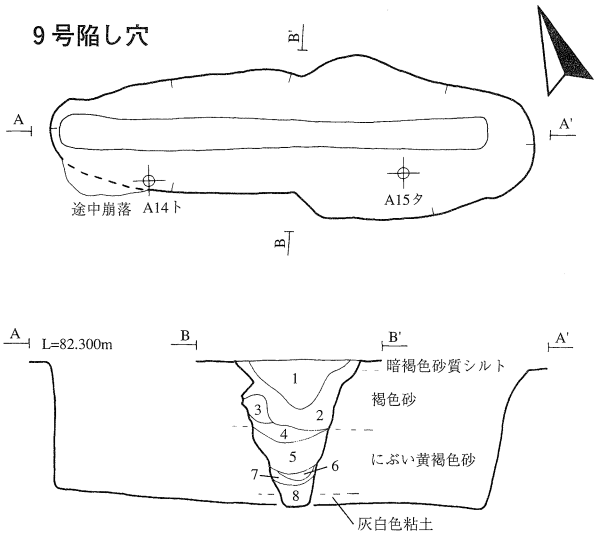
8号陥し穴



8号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト　下部に褐色土ブロック含む
2　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　褐色土ブロック20～30%
3　10YR4/6　褐色　　砂　黒色土ブロック20～30%
4　10YR4/6　褐色　　砂　均質　一気に埋まっている

9号陥し穴

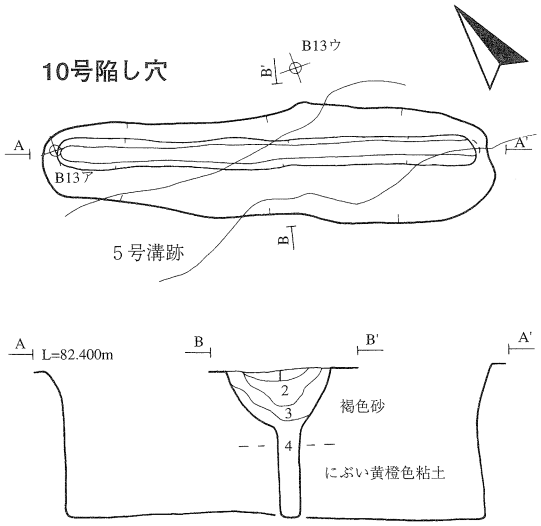


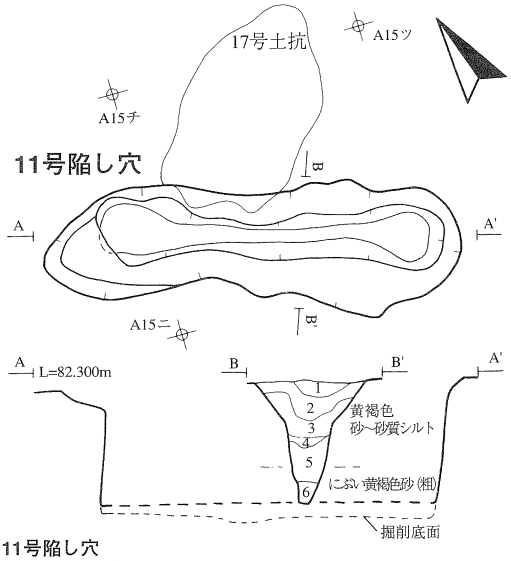
9号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト
2　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　下部褐色砂ブロック30～50%
3　10YR4/6　褐色　　砂　崩落したブロックで黒色土を斑状に含む
4　10YR4/6　褐色　　砂　均質　一気に埋まった状態
5　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　均質　ラミナ状に見える　壁のラインは確定できない。崩れた部分と生きている部分の境界は不明瞭
6　10YR2/1　黒色　シルト
7　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂
8　7.5YR2/1　黒色　砂質シルト

0　1:60　2m

第16図　陥し穴（2）



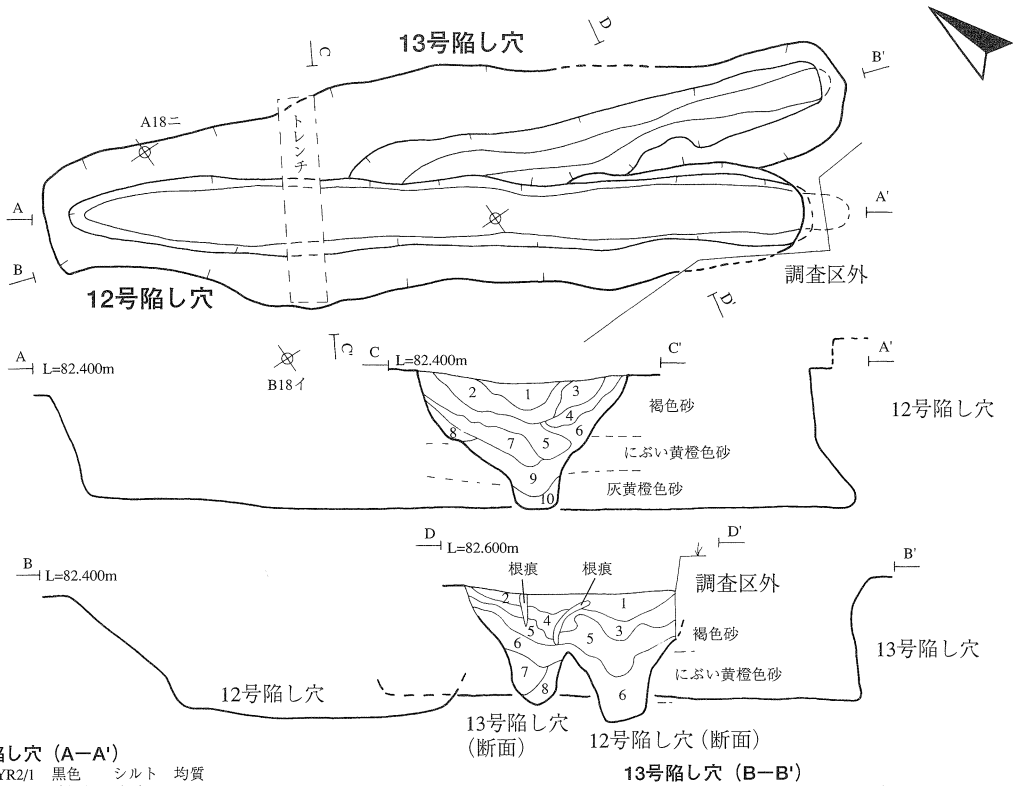


10号陥し穴

1　10YR2/2　黒色　シルト　表土に近い
2　7.5YR2/1　黒色　　シルト
3　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　褐色土ブロック含む
4　10YR4/6　褐色　砂　均質　しまり弱い　上部は地山の壁の褐色砂より細粒　底面に薄く黒色シルト層

11号陥し穴

1　7.5YR3/3　暗褐色　シルト　埋め戻しか？
2　10YR3/3　暗褐色　シルト
3　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　黒褐色土ブロック５％含む
4　10YR2/2　黒褐色　シルト
5　10YR5/4　にぶい黄褐　砂　均質　一気に崩れて埋まった状態
6　10YR4/4　褐色　砂　しまり弱い



12号陥し穴（A―A'）

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト　均質
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト
3　10YR3/3　褐色　　砂
4　10YR5/6　黄褐色　砂　均質
5　10YR5/6　にぶい黄褐色　砂　均質
6　10YR4/4　褐色　　砂　黒色土がしみ状に混在
7　10YR5/6　黄褐色　砂　均質
8　10YR4/3　にぶい黄褐色　粗い砂
9　10YR4/4　褐色　　粗い砂　黒色土がしみ状に混在
10　10YR4/3　にぶい黄褐色　粗い砂　均質

13号陥し穴（B―B'）

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト　均質
2　10YR4/4　褐色　　砂
3　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト
4　10YR3/4　暗褐色　砂　黒色土しみ状
5　10YR4/4　褐色　　砂　均質　黒色土しみ状
6　10YR4/6　褐色　　砂　均質
7　10YR3/2　黒褐色　砂質シルト
8　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　粗砂ブロック30%

0　1:60　2m

第17図　陥し穴（3）

13号陥し穴（第17図、写真図版７）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ18タ～Ｂ18エ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　12号陥し穴と重複しており、断面観察から13号陥し穴の方が旧いと考えられる。

＜主軸方向＞　Ｎ－52°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径（410）cm×短径 90cm、中央部深さ 90cm。厚い砂層に掘られたため、全体的に側壁が崩落しているようだ。

14号陥し穴（第18図、写真図版９）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ18ツ～Ａ18ノ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－58°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径 260cm×短径 28cm、中央部深さ 80cm。

15号陥し穴（第18図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ19カ～Ａ19イ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－62°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径 204cm×短径 56cm、中央部深さ 76cm。

16号陥し穴（第18図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ19タ～Ａ19チ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－68°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径 208cm×短径 79cm、中央部深さ 88cm。

17号陥し穴（第18図、写真図版９）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ｂ19イ～Ｂ19ウ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－82°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径(284)cm×短径 64cm、中央部深さ 74cm。

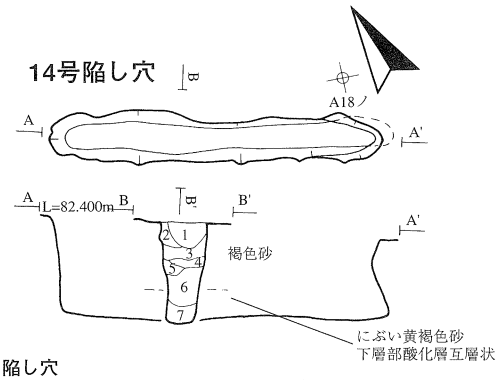
18号陥し穴（第18図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ19ス～Ａ19テ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

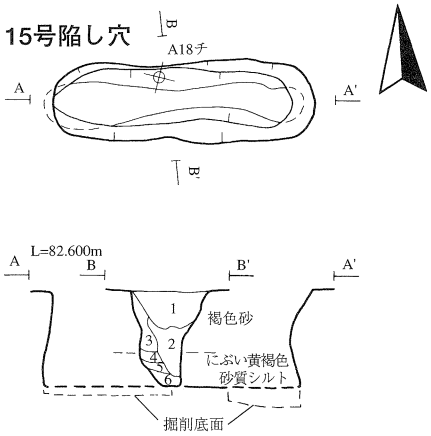
＜主軸方向＞　Ｎ－46°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径 254cm×短径 56cm、中央部深さ 76cm。



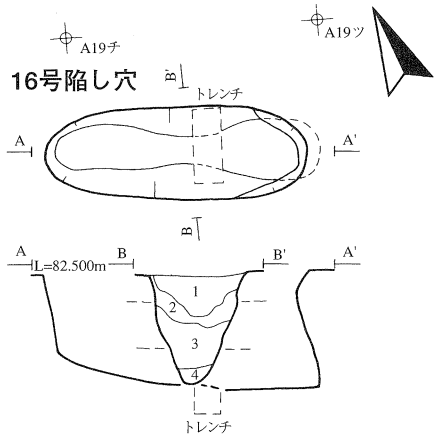
14号陥し穴

1　10YR2/2　黒褐色　シルト　褐色土ブロック含む
2　10YR4/6　褐色　シルト　崩落ブロック
3　10YR3/3　暗褐色　シルト
4　10YR4/6　褐色　シルト　崩落ブロック
5　10YR2/2　黒褐色　シルト
6　10YR4/4　褐色　砂
7　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂　壁より暗色



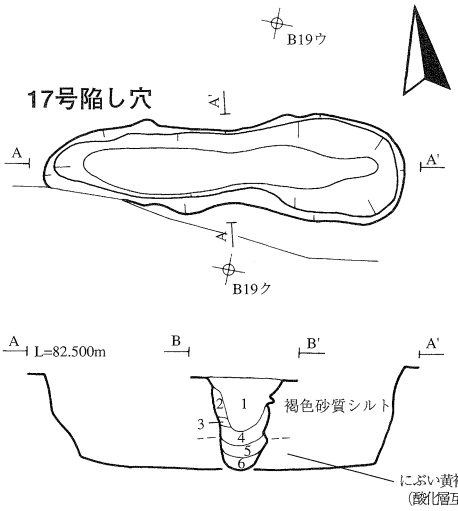
15号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト　均質
2　10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト
3　10YR4/6　褐色　シルト　崩落ブロック（黒色土小ブロック）含む
4　10YR3/3　暗褐色　シルト（２層と同質）
5　10YR4/4　褐色　砂質シルト
6　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト底面に薄く黒色土層



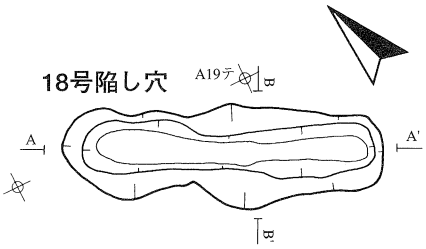
16号陥し穴

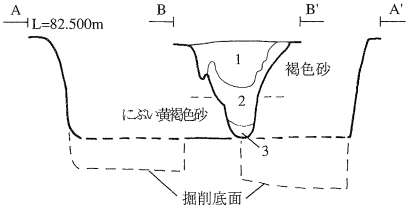
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　下半に褐色土ブロック含む
2　10YR4/4　褐色　砂質シルト　黒褐色土ブロック含む
3　10YR4/6　褐色　砂　均質
4　10YR4/4　褐色　砂　しまり弱



17号陥し穴

1　10YR2/1　黒色　シルト　褐色土ブロック斑状　下部に炭化物
2　10YR4/6　褐色　砂質シルト　壁面よりやや暗色
3　10YR4/4　褐色　シルト
4　10YR4/6　褐色　シルト　砂質シルト
5　10YR3/3　暗褐色　シルト
6　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　地山の互層状の酸化物がとぎれた所を壁と見た





18号陥し穴

1　10YR2/2　黒褐色　シルト　下部に褐色土ブロック含む
2　10YR4/6　褐色　砂　均質
3　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト

0　1:60　2m

第18図　陥し穴（4）

19号陥し穴（第19図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ23キ～Ａ23ウ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－87°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径 332cm×短径 44cm、中央部深さ 44cm。

＜覆土・堆積状況＞

20号陥し穴（第19図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ23ニ～Ａ23ウ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－42°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径 272cm×短径 60cm、中央部深さ 104cm。

21号陥し穴（第19図、写真図版９）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｂ23シ～Ｂ23ス、東端を調査区境のⅢ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。東側部分は、調査区外に延びている。

＜重複・新旧関係＞　26号陥し穴と重複し、これを切っているので、21号陥し穴の方が新しい。

＜主軸方向＞　Ｎ－70°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径 240cm×短径 44cm、中央部深さ 92cm。

22号陥し穴（第19図、写真図版９）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｂ23チ～Ｂ23ツ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。東端を調査区境に断ち切られた状態で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－71°－Ｗ

＜規　模＞　開口部は長径(92)cm×短径 24cm、中央部深さ 76cm。

23号陥し穴（第19図、写真図版９）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｃ23キ～Ｃ23ス、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　２号柱穴列の**P3**と重複しこれに切られているので、23号陥し穴の方が旧い。

＜主軸方向＞　Ｎ－51°－Ｗ

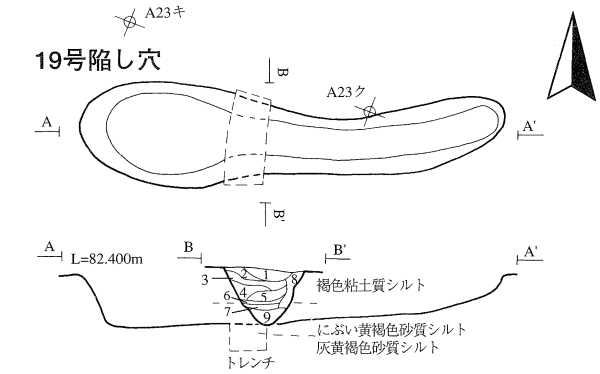
＜規　模＞　開口部は長径(264)cm×短径 30cm、中央部深さ 80cm。

24号陥し穴（第20図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｃ23シ～Ｃ23ス、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

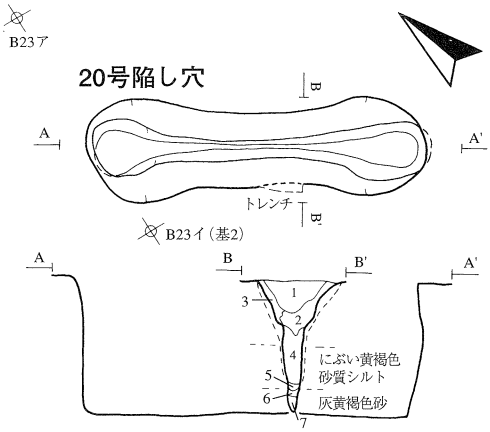
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　Ｎ－71°－Ｗ



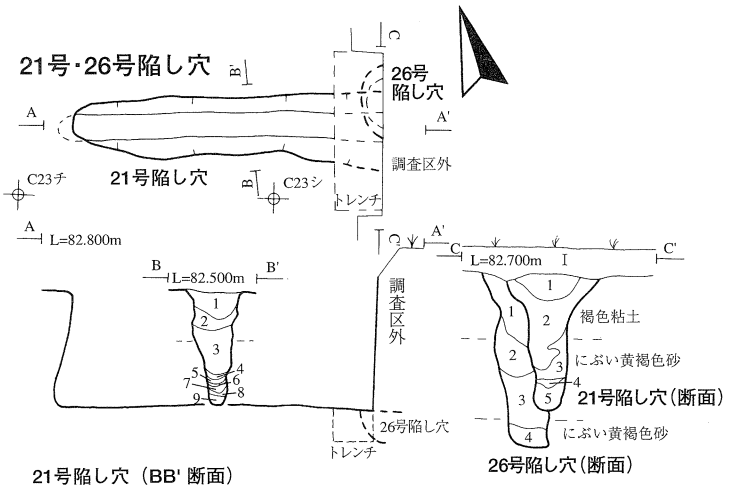
19号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR4/4　褐色　粘土質シルト
3　10YR2/2　黒褐色　シルト
4　10YR3/3　暗褐色　シルト
5　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト
6　10YR4/4　褐色　粘土質シルト
7　10YR2/2　黒褐色　シルト　褐色土粒30%
8　10YR3/3　暗褐色　シルト　褐色土ブロック30%
9　10YR4/6　褐色　砂　しまり弱い



20号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR2/2　黒褐色　シルト
3　10YR3/3　暗褐色　シルト
4　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　しまり強い
5　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト
6　10YR4/4　褐色　粘土質シルト
7　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト



21号陥し穴（BB' 断面）

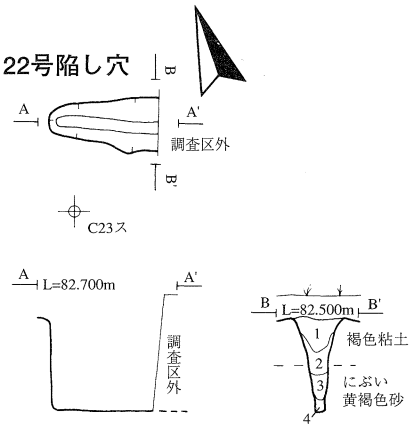
1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　7.5YR2/1　黒色　シルト　両脇に褐色粘土ブロック20%
3　10YR4/6　褐色　粘土
4　10YR2/1　黒色　シルト
5　10YR4/6　褐色　粘土
6　10YR2/1　黒色　シルト
7　10YR4/6　褐色　粘土
8　10YR2/1　黒色　シルト
9　10YR4/6　褐色　砂質シルト

21号陥し穴（CC' 断面）

1　10YR4/4　褐色　粘土質シルト
2　7.5YR2/1　黒色　シルト
3　10YR5/6　黄褐色　粘土
4　10YR2/2　黒褐色　シルト
5　3層の粘土と4層の黒褐色シルトが混在

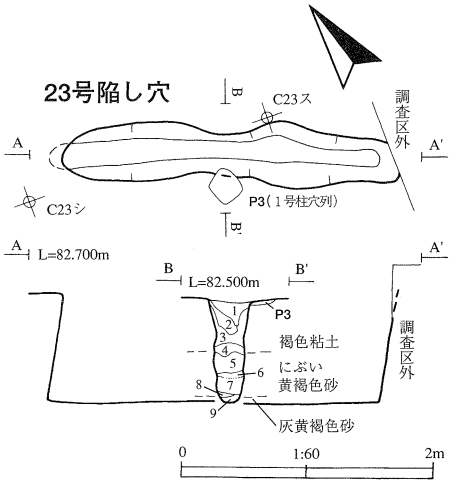
26号陥し穴（CC' 断面）

1　7.5YR2/1　黒色　シルト　SK54の一層よりわずかに明色
2　10YR4/6　褐色　粘土
3　10YR4/4　褐色粘土と黒色土混在
4　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト



22号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR4/6　褐色　粘土
3　10YR4/4　褐色　粘土質シルト
4　10YR2/1　黒色　シルト　褐色粘土シルトブロック20%



23号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR4/4　褐色　粘土
3　7.5YR2/1　黒色　シルト
4　10YR4/6　褐色　粘土
5　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　褐色粘土ブロック20%
6　10YR4/6　褐色　粘土
7　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト
8　10YR2/1　黒色　シルト
9　10YR4/2　褐灰色　砂質シルト

第19図　陥し穴（5）

＜規　模＞　開口部は長径 244cm×短径 44cm、中央部深さ 106cm。

25号陥し穴（第20図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞　C区、C23ニ～C23ヌ、調査区境のⅢ層上面で黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　24号土抗と僅かに重複するが新旧関係は不明である。

＜主軸方向＞　N－50°－W

＜規　模＞　開口部は長径 314cm×短径 30cm、中央部深さ 82cm。

＜出土遺物＞　埋土上部の黒色シルト層から縄文土器片が１点出土した。（第36図／写真図版30：16）

26号陥し穴（第19図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞　C区、B23ス、C区の東側の調査区境のⅢ層上面で 21号陥し穴を精査中に、調査区境付近で 21号陥し穴に切られた状態で遺構の西端を検出した。東側部分は、調査区外に延びている。

＜重複・新旧関係＞　21号陥し穴と重複し、これに切られているので、26号陥し穴の方が旧い。

＜主軸方向＞　不明。掘りすぎにより、調査区外へ出る部分の断面でしか存在を確認できなかった。

＜規　模＞　開口部は長径（不明）×短径 108cm、中央部深さ 138cm。

27号陥し穴（第20図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞　C区、C23イ ～ C23ウ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出された。東側部分は調査区外に延びている。

＜重複・新旧関係＞　13号溝跡と重複し、これに切られているので、27号陥し穴の方が旧い。

＜主軸方向＞　N－44°－W

＜規　模＞　開口部は長径(156)cm×短径 24cm、中央部深さ 90cm。

28号陥し穴（第20図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞　C区、B23ヌ、Ⅲ層上で面明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。東側部分は調査区外に延びている。

＜重複・新旧関係＞　12号溝跡と重複し、これに切られているので、28号陥し穴の方が旧い。

＜主軸方向＞　N－70°－W

＜規　模＞　開口部は長径(52)cm×短径 28cm、調査区境の断面での深さ 68cm。

29号陥し穴（第20図、写真図版11）

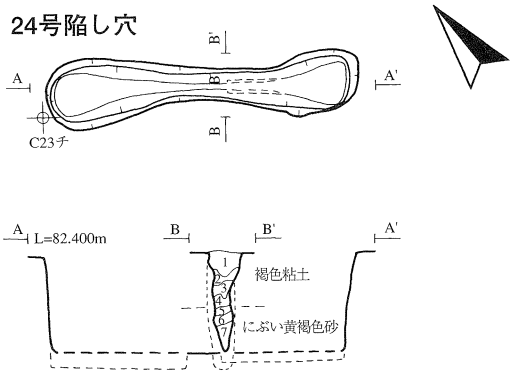
＜位置・検出状況＞　C区、E23ア～E23ク、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－63°－W

＜規　模＞　開口部は長径 282cm×短径 18cm、中央部深さ 80cm。

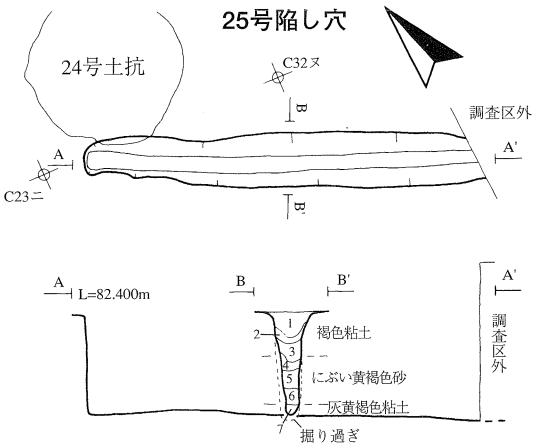
24号陥し穴



24号陥し穴

1	7.5YR2/1	黒色	シルト
2	10YR4/6	褐色	粘土
3	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト
4	10YR3/4	褐色	粘土質シルト
5	10YR4/6	褐色	粘土
6	10YR4/4	褐色	粘土質シルト
7	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト

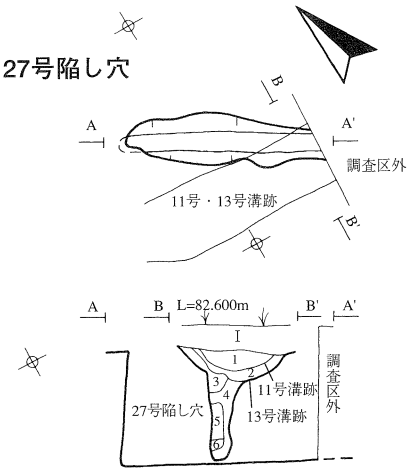
25号陥し穴



25号陥し穴

1	7.5YR2/1	黒色	シルト
2	10YR4/4	褐色粘土	
3	7.5YR2/1	黒色	シルト
4	10YR4/6	褐色	粘土
5	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト
6	10YR4/6	褐色	粘土
7	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト

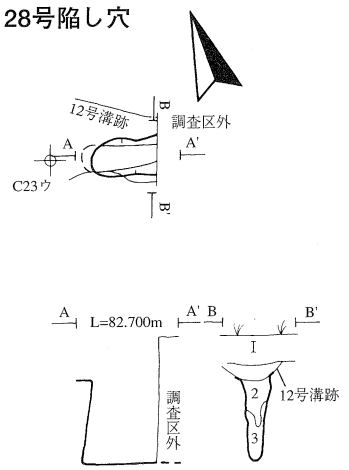
27号陥し穴



27号陥し穴

I	10YR2/1	黒色	シルト		
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	しまり有り	粘性有り
2	10YR2/3	黒色	シルト	しまり有り	粘性有り　黄褐色土ブロック少量混入
3	10YR3/4	暗褐色	シルト	しまり有り	粘性有り　黄褐色土ブロック中量混入
4	10YR6/6	明黄褐色	シルト	しまり有り	粘性有り
5	10YR3/4	暗褐色	シルト	しまり有り	粘性有り
6	10YR6/6	明黄褐色	シルト	しまり有り	粘性有り

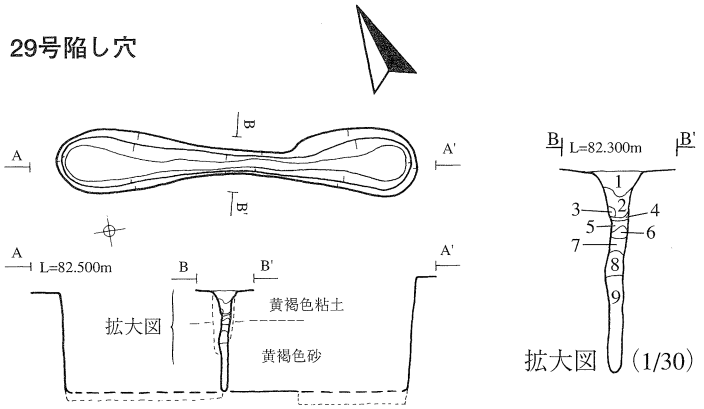
28号陥し穴



28号陥し穴

I	10YR2/2	黒色	シルト
1	10YR2/2	黒褐色	しまり有り　粘性有り
2	10YR3/3	暗黒色	しまり有り　粘性有り　褐色土ブロック混入
3	10YR5/6	黄褐色	しまり有り　粘性極有り

29号陥し穴



29号陥し穴

1	10YR2/2	黒褐色	しまり有り　粘性有り
2	10YR6/6	明黄褐色	しまり有り　粘性極有り
3	10YR3/3	暗褐色	しまり有り　粘性極有り
4	10YR3/4	暗褐色	しまり有り　粘性極有り
5	10YR6/6	明黄褐色	しまり有り　粘性極有り
6	10YR3/2	黒褐色	しまり有り　粘性極有り
7	10YR5/4	にぶい黄褐色	しまり有り　粘性極有り　明黄褐色ブロック少量
8	10YR4/4	褐色	しまりやや有り　粘性極有り
9	2.5YR4/4	オリ褐色	砂　しまり無し　粘性無し

0　1:60　2m

第20図　陥し穴（6）

30号陥し穴（第21図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　C区、F23ア～F23キ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－37°－W

＜規　模＞　開口部は長径268cm×短径34cm、中央部深さ76cm。

31号陥し穴（第21図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　C区、G23シ～G23ツ、Ⅲ層上面で黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－69°－W

＜規　模＞開口部は長径310cm×短径42cm、中央部深さ114cm。

32号陥し穴（第21図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　C区、G23ノ～G24ニ、C区東側の調査区境のⅢ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。東側部分は調査区外に延びている。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－60°－W

＜規　模＞　開口部は長径370cm×短径36cm、中央部深さ92cm。

33号陥し穴（第21図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞　C区、A23ネ～A23ノ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－67°－W

＜規　模＞　開口部は長径252cm×短径64cm、中央部深さ134cm。

34号陥し穴（第22図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞　C区、A23タ～A23ツ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－66°－W

＜規　模＞　開口部は長径296cm×短径36cm、中央部深さ76cm。

35号陥し穴（第22図、写真図版12）

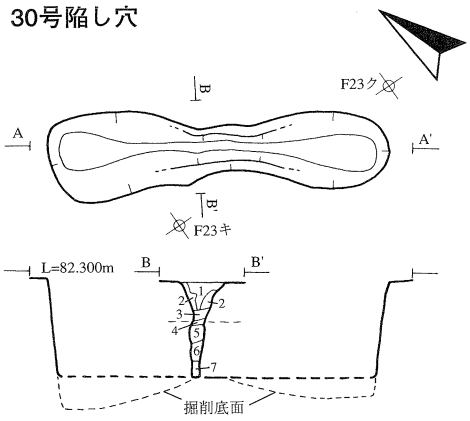
＜位置・検出状況＞　C区、A23ト、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出した。東側部分は調査区外に延びている。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－58°－W

＜規　模＞　開口部は長径(64)cm×短径38cm、中央部深さ108cm。

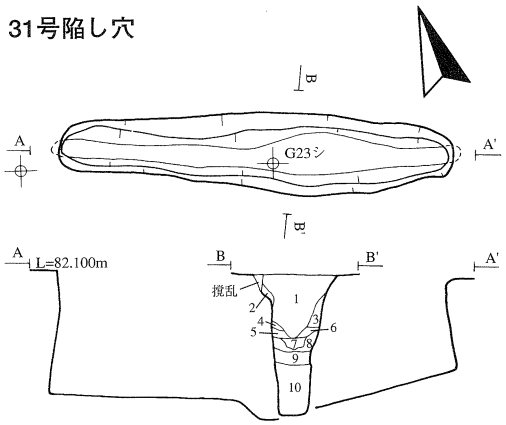
30号陥し穴



30号陥し穴

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り
2　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り　明黄褐色ブロック少量含む
3　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性有り
4　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り
5　10YR7/4　にぶい黄橙色　しまり有り　粘性有り　砂質シルト少量含む
6　2.5YR4/6　オリ褐色　砂　しまり無し　粘性極有り
7　2.5YR3/3　暗オリ褐色　砂　しまり無し　粘性有り

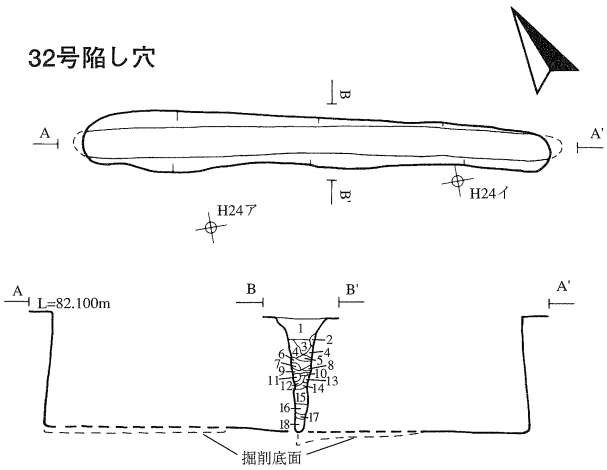
31号陥し穴



31号陥し穴

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り
2　10YR6/4　にぶい黄橙色　しまり有り　粘性有り
3　10YR5/8　黄褐色　しまり有り　粘性有り
4　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性有り
5　2.5YR4/6　オリ褐色　砂　しまりやや有り　粘性無し
6　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性極有り　明黄褐色土混入
7　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性有り
8　10YR3/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り　明黄褐色土ブロック
9　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性有り
10　10YR5/2　灰黄褐色　しまり有り　粘性有り

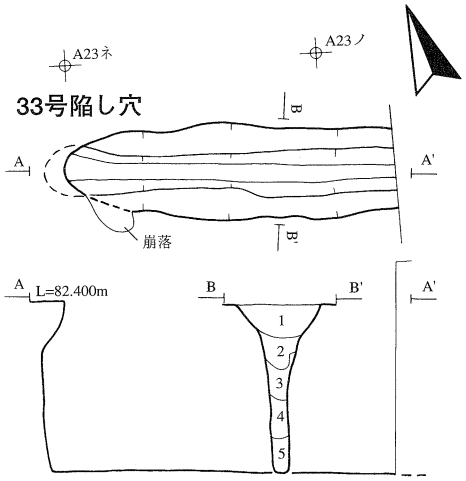
32号陥し穴



32号陥し穴

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性極有り
2　10YR7/4　にぶい黄橙色　しまり有り　粘性極有り
3　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性極有り　褐色土ブロック少量
4　10YR6/4　にぶい黄橙色　しまり有り　粘性極有り
5　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性極有り
6　10YR2/1　黒色　しまりやや有り　粘性極有り
7　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り　暗褐色土ブロック稿状に混入
8　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
9　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性極有り
10　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
11　10YR5/8　黄褐色　しまり無し　粘性無し
12　10YR3/4　暗褐色　しまり有り　粘性極有り
13　10YR6/4　にぶい黄橙色　しまり有り　粘性極有り
14　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
15　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり有り　粘性極有り　明黄褐色土少量混入
16　10YR5/8　黄褐色　しまりやや有り　粘性やや有り　砂質混入
17　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り
18　10YR5/8　黄褐色　しまりやや有り　粘性やや有り　砂質混入

33号陥し穴



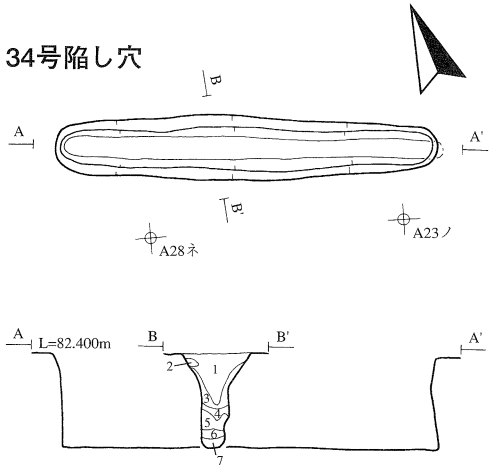
33号陥し穴

1　10YR2/1　黒色　しまり有り　粘性有り
2　10YR4/3　にぶい黄橙色　しまり有り　粘性極有り　明黄褐色ブロック中量混入
3　10YR5/6　黄褐色　しまり有り　粘性極有り
4　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
5　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り　明黄褐色ブロック少量混入

0　1:60　2m

第21図　陥し穴（7）

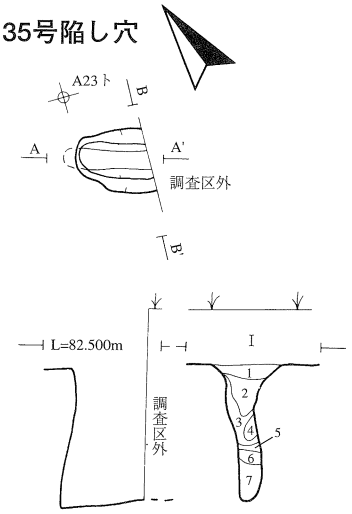
34号陥し穴



34号陥し穴

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り
2　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
3　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り　黒褐色土少量混入
4　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り
5　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
6　10YR3/3　暗褐色　しまり無し　粘性有り
7　10YR5/8　黄褐色　しまり無し　粘性有り　砂質シルト混入

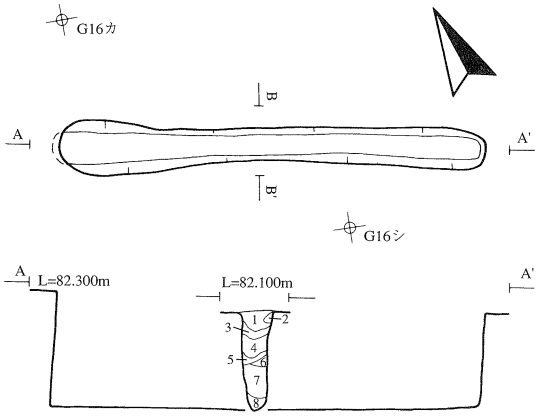
35号陥し穴



34号陥し穴

I　10YR2/1　黒色　シルト
1　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り　褐色ブロック少量
2　10YR3/4　暗褐色　しまり有り　粘性有り
3　10YR4/3　にぶい黄褐色　しまり有り　粘性有り　明黄褐色ブロック少量含む
4　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
5　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
6　10YR2/3　黒褐色　しまり有り　粘性極有り
7　10YR4/4　褐色　しまり有り　粘性有り　砂質土

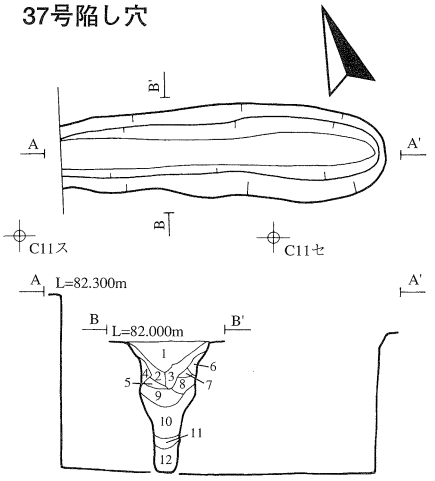
36号陥し穴



36号陥し穴

1　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り
2　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り　ブロック状
3　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
4　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り
5　10YR5/4　にぶい黄褐色　しまり有り　粘性極有り
6　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
7　10YR6/6　明黄褐色　砂質シルト　しまりやや有り　粘性無し
8　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性極有り

37号陥し穴



37号陥し穴

1　10YR2/1　黒色　しまりやや有り　粘性有り
2　10YR2/3　黒褐色　しまり有り　粘性有り
3　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り
4　2.5YR4/4　オリーブ褐色　砂質シルト　しまり無し　粘性無し　壁崩落土
5　10YR3/3　暗褐色　しまりやや有り　粘性有り
6　2.5YR4/4　オリーブ褐色　砂質シルト　しまり無し　粘性無し　壁崩落土
7　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り　オリーブ褐色の砂質シルト混入
8　10YR3/3　暗褐色　しまりやや有り　粘性有り
9　10YR4/4　褐色　しまり有り　粘性有り
10　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
11　10YR2/2　黒褐色　しまり有り　粘性極有り
12　10YR5/6　黄褐色　しまり有り　粘性極有り

0　1:60　2m

第22図　陥し穴（8）

36号陥し穴（第22図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞　Ｄ区、Ｇ16カ～Ｇ16キ、Ⅲ層上面で検出した。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　Ｎ－62°－Ｗ
＜規　模＞　開口部は長径 336cm×短径 26cm、中央部深さ 80cm。

37号陥し穴（第22図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞　Ｄ区、Ｃ11ク～Ｃ11ケ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの溝状のプランとして検出された。西側部分は調査区外に延びている。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　Ｎ－70°－Ｗ
＜規　模＞　開口部は長径(254)cm×短径 50cm、中央部深さ 106cm。

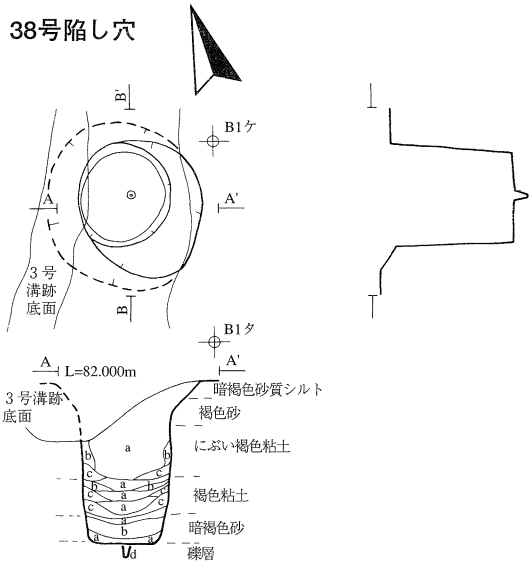
(2) 円筒形陥し穴

38号陥し穴（第23図、写真図版13）
＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ａ０テ～Ｂ０テ、Ⅲ層上面の３号溝跡の埋土の下に明瞭な黒色シルトの円形のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　３号溝跡に切られており38号陥し穴の方が旧い。
＜主軸方向＞　（Ｎ－10°－Ｗ）
＜規　模＞　開口部は長径 116cm×短径 94cm、中央部深さ 130cm。底部中央には、開口部長径 6.0cm×短径 6.0cm×深さ 9.0cmの逆茂木痕と思われる副穴が一カ所検出された。

39号陥し穴（第23図、写真図版13）
＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ａ０ネ～Ａ０ノ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの円形のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　（Ｎ－37°－Ｗ）
＜規　模＞　開口部は長径 116cm×短径 104cm、中央部深さ 94cm。底部中央には、開口部長径 8.0cm×短径 7.0cm×深さ 11.0cmの逆茂木痕と思われる副穴が一カ所検出された。

40号陥し穴（第23図、写真図版13）
＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ23ス～Ａ23ソ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの円形のプランとして検出した。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　（Ｎ－70°－Ｗ）
＜規　模＞　開口部は長径 144cm×短径 126cm、中央部深さ 78cm 。底部中央には、開口部長径 46.0cm×短径 30.0cm×深さ 14.0cmの逆茂木痕と思われる副穴が一カ所検出された。

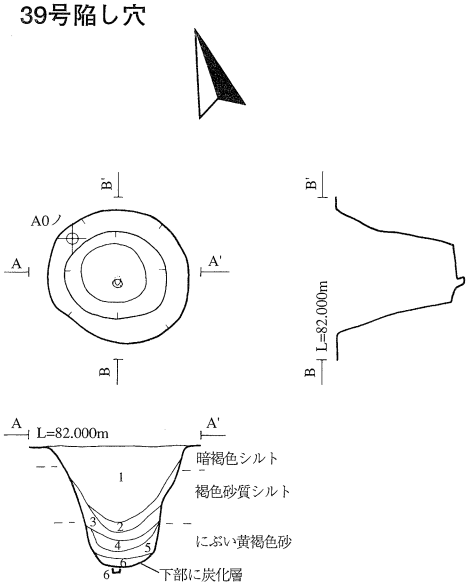
38号陥し穴



38号陥し穴

a	7.7YR2/1	黒色	シルト	炭粒含む
b	10YR4/4	褐色	砂	地山の崩落ブロックか
c	10YR4/6	褐色	砂	地山の崩落ブロックか
d	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	しまり無し

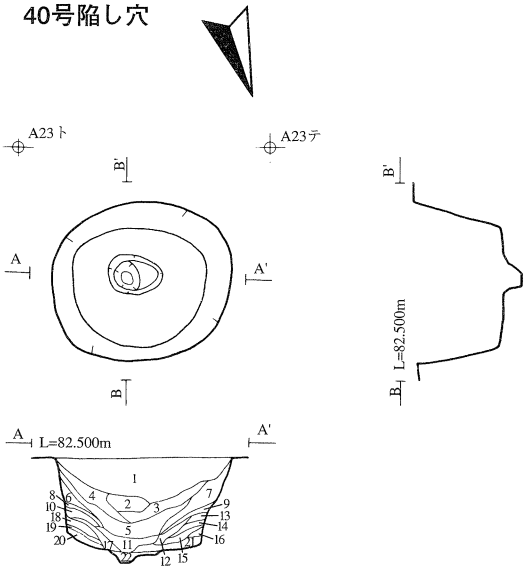
39号陥し穴



39号陥し穴

1	7.5YR2/1	黒色	シルト	上半均質　下部に褐色土ブロック
2	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	
3	10YR4/6	褐色	砂主体の崩落ブロック	
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	しまり有り
5	10YR3/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	
6	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	しまり無し

40号陥し穴



40号陥し穴

1	10YR2/2	黒褐色	しまり有り	粘性有り	
2	10YR2/3	黒褐色	しまり有り	粘性極有り	
3	10YR2/2	黒褐色	しまり有り	粘性極有り	
4	10YR3/2	黒褐色	しまり有り	粘性極有り	
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	しまり有り	粘性極有り	全体的に明黄褐色ブロック混入
6	10YR6/6	明黄褐色	しまり有り	粘性極有り	
7	10YR5/6	黄褐色	しまり有り	粘性極有り	
8	10YR /3	暗褐色	しまり有り	粘性極有り	
9	10YR4/6	褐色	砂質シルト	しまりやや有り	粘性無し
10	10YR6/6	明黄褐色	しまり有り	粘性極有り	
11	10YR5/4	にぶい黄褐色	しまり有り	粘性極有り	明黄褐色小ブロック混入
12	10YR4/4	褐色	しまり有り	粘性極有り	
13	10YR5/6	黄褐色	しまり有り	粘性極有り	
14	10YR5/8	黄褐色	砂質シルト	しまり無し	粘性無し　黄褐色小ブロック混入
15	10YR2/3	黒褐色	しまり有り	粘性極有り	
16	10YR5/8	黄褐色	砂質シルト	しまり無し	粘性無し　黄褐色小ブロック混入
17	10YR3/3	暗褐色	しまり有り	粘性有り	
18	10YR6/6	明黄褐色	しまり有り	粘性極有り	
19	10YR3/4	暗褐色	しまり有り	粘性有り	
20	10YR6/6	明黄褐色	しまり有り	粘性極有り	
21	10YR4/4	褐色	砂	しまり無し	粘性無し
22	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	しまり無し	粘性無し　副穴埋土

0　1:60　2m

第23図　陥し穴（9）

(3) 長方形陥し穴

41号陥し穴（第24図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞　B区、A９エ～B９カ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの楕円形のプランとして検出された。42号陥し穴と長軸方向がほぼ平行になるように隣接して検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　（N－54°－W）

＜規　模＞　開口部は長径 234cm×短径 144cm、中央部深さ 78cm。底部にはおよそ主軸方向に並んだ逆茂木痕と思われる副穴が３カ所検出された。副穴の規模は、それぞれ長径12cm×短径10cm×深さ2.5cm、長径16cm×短径8cm×深さ1.9cm、長径6cm×短径6cm×深さ3.4cm。

42号陥し穴（第24図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞　B区、B８オ～B９ア、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの楕円形のプランとして検出された。41号陥し穴と長軸方向がほぼ平行になるように隣接して検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　（N－57°－W）

＜規　模＞　開口部は長径226cm×短径100cm、中央部深さ86cm。底部にはおよそ主軸方向に並んだ逆茂木痕と思われる副穴が３カ所検出された。副穴の規模は、それぞれ長径16cm×短径12cm×深さ1.6cm、長径8cm×短径6cm×深さ2.5cm、長径12cm×短径12cm×深さ2.3cm。

43号陥し穴（第24図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞　C区、B23サ、C区西側調査区境のⅢ層上面で明瞭な黒色シルトの楕円形のプランとして検出した。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－31°－W

＜規　模＞　開口部は長径(192)cm×短径 90cm、中央部深さ 106cm、底面では逆茂木痕を検出できなかった。

44号陥し穴（第24図、写真図版14）

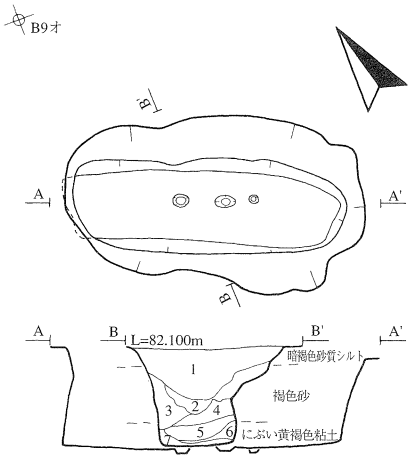
＜位置・検出状況＞　D区、D11ヌ～D11ネ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトの楕円形のプランとして検出した。C区西側調査区境に切られた状態で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－68°－W

＜規　模＞開口部は長径(124)cm×短径 96cm、中央部深さ 104cm。底部にはおよそ主軸方向に並んだ逆茂木痕と思われる副穴が２カ所検出された。副穴の規模は、それぞれ長径8cm×短径6cm×深さ13cm、長径10cm×短径7cm×深さ17cm。

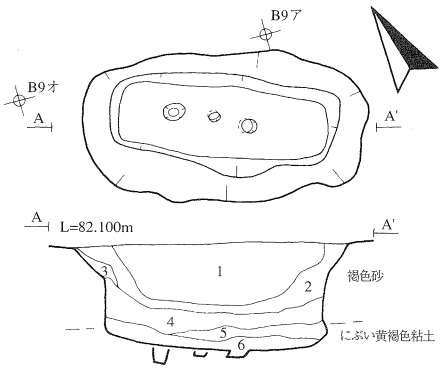
41号陥し穴



41号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト　下部に褐色砂ブロック
2　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　黒色土斑状５～10%
3　10YR4/6　褐色　　砂　均質　しまり弱い　崩落ブロック
4　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　黒色土斑状10%
5　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　締まりやや強
6　10YR4/4　褐色　　砂質シルト
7　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト

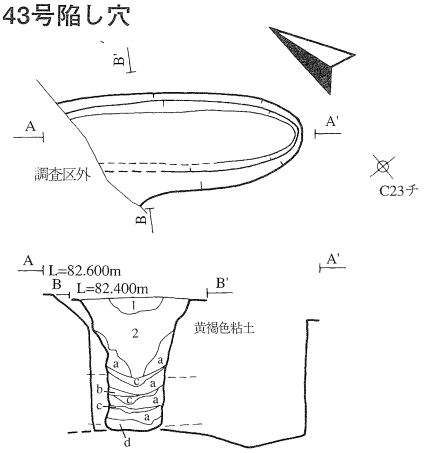
42号陥し穴



42号陥し穴

1　7.5YR2/1　黒色　　シルト　全体均一で夾雑物なし
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト
3　10YR4/6　褐色　　砂　崩落ブロック
4　10YR4/4　褐色　　砂（粗粒）埋め戻しか？崩落したか？
5　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　褐色砂ブロック
6　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　比較的均質

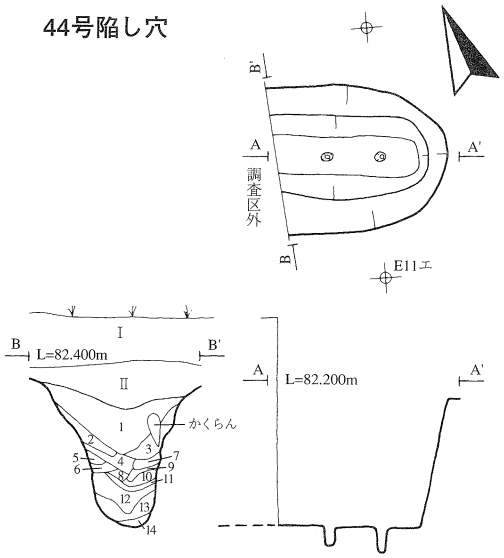
43号陥し穴



43号陥し穴

1　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　凹地にたまった状態
2　7.5YR2/1　黒色　シルト　下部に褐色土粒を含む
a　上半の黄褐色土　崩落ブロック　10YR　5/6
b　aと黒色土が１：１の混合
c　7.5YR2/1　黒色　シルト　崩落土（水成堆積か）
d　10YR4/4　灰黄褐色　砂質シルト　しまり弱　底面上の堆積土

44号陥し穴



44号陥し穴

Ⅰ　10YR2/2　黒色　シルト
Ⅱ　7.5YR2/2　黒色　シルト
1　10YR2/2　黒褐色　しまりやや有り　粘性有り　明黄褐色砂下位に混入
2　2.5YR4/6　オリーブ褐色　しまりなし　粘性無し　砂質シルト
3　2.5YR5/6　黄褐色　しまりなし　粘性無し　砂質シルト
4　10YR3/4　暗褐色　しまりややあり　粘性あり
5　2.5YR6/6　明黄褐色　しまりなし　粘性無し
6　2.5YR4/6　オリーブ褐色　しまりなし　粘性無し
7　2.5YR4/4　オリーブ褐色　しまりなし　粘性有り　砂質シルト
8　10YR3/4　暗褐色　しまりなし　粘性やや有り　砂質シルト混入
9　2.5YR4/6　オリーブ褐色褐色　しまりなし　粘性無し　砂
10　2.5YR5/6　黄褐色　しまりややあり　粘性ややあり　砂質シルト
11　2.5YR6/6　明黄褐色　しまりなし　粘性無し　砂　下位に黒褐色土　縞状に混入
12　10YR7/4　にぶい黄褐色　しまりなし　粘性無し　砂
13　10YR7/4　にぶい黄褐色　粘土　しまり有り　粘性極有り
14　10YR3/3　暗褐色　しまりなし　粘性有り

0　1:60　2m

第24図　陥し穴（10）

4．堀跡

堀跡は１条だけ検出された。横断面が逆さの台形状で、Ⅱ層底面からⅢ層上面にかけて確認されている。

１号堀跡（第25図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞　Ｄ区、Ｂ11ス～Ｂ11ソ、Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

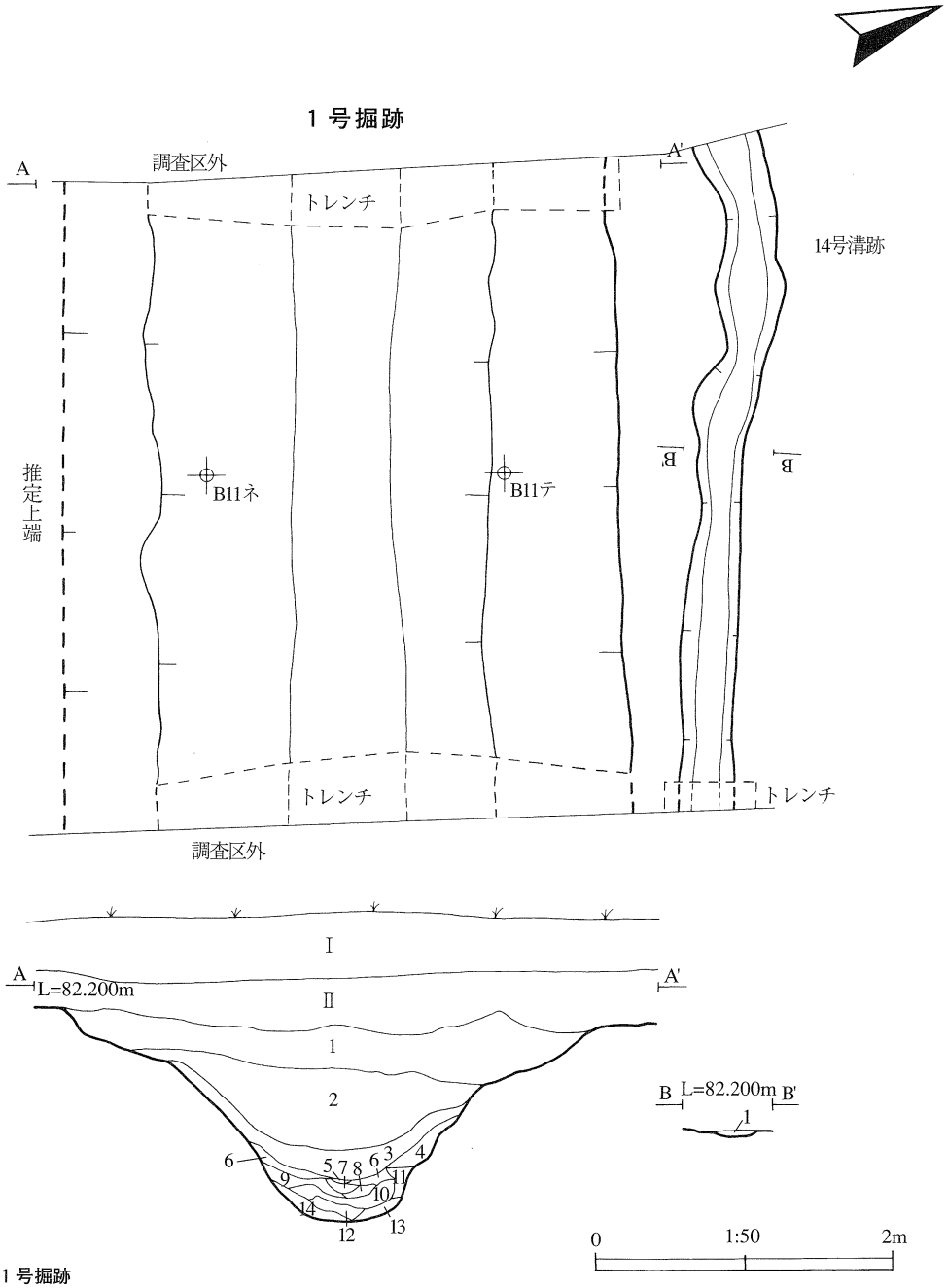
＜主軸方向＞　Ｎ－72°－Ｗ

＜規　模＞　開口部幅は3.16～3.04m、底部幅0.64～0.82m、検出部の長さおよそ4.7m、検出面からの平均の深さ1.17m、現在の地表からの深さはおよそ２ｍである。なお、平成14年度、本調査の開始と前後して、岩手県教育委員会生涯学習文化課による付近一帯の試掘調査が行われており、その調査データや本調査時のボウリング調査によって、遺構配置図（第８・10・11図）に示したような東側の延長部分の存在が確認されている。

＜覆土・堆積状況＞　底部には側面からの崩落土を含む自然堆積と思われる明るい粘土層が見られる。そのすぐ上の３層黒褐色シルトは、この堀が使用されていた当時の表土が流れ込んだ自然堆積層と考えられる。その上の２層暗褐色シルトも自然堆積したものと考えられる。１層黒褐色シルトは、明黄褐色の砂質シルト～砂をブロック状に含んでおり、堀が完全に埋没した後の耕作活動の際に、Ⅱ層下部漸移層の暗褐色シルトに堀の両岸の地山黄褐色砂質シルトが巻き込まれて形成された可能性も考えられる。また、この堀跡の北側間近には、50～80㎝離れてほぼ平行に掘られている14号溝跡があるが、この溝の掘削時に排出された地山ブロックが１層に流入している可能性もある。

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。

＜時　期＞　隣接する八重幡館（八重畑館・宿館）跡の遺構とされる空堀跡（幅・深さとも７ｍ以上）に比べると、現在の地表からの深さが２ｍ余りとかなり浅めである。岩手県教育委員会生涯学習文化課の最新の試掘調査によると、規模や埋土の状況がよく似た堀跡が、空堀跡の僅かに東側を南北に走っている可能性が認められている。１号堀跡はその一部とも考えられ、館に付随する郭を仕切っていた堀の可能性もある。なお、文献によると、この調査区域を含む館跡一帯は、中世末期に旧郡主稗貫氏が豊臣秀吉の奥州仕置きにより滅亡した後、稗貫氏の支族でともに滅びた和賀氏の重臣大竹氏が一族そろって帰農した際に入植地として移り住み、開墾されて現在に至ったとされている。したがって、この堀跡は、近世初頭の開墾の過程で埋め立てられた堀跡である可能性も考えられる。



1号掘跡

1　10YR3/2　黒褐色　しまり有り　粘性有り　明黄褐色砂を粒～ブロック状に中量含む
2　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り
3　10YR2/3　黒褐色　しまり有り　粘性有り
4　10YR3/3　暗褐色　しまり有り　粘性有り　黄橙色砂混入
5　10YR3/4　暗褐色　しまり有り　粘性有り
6　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り
7　10YR3/4　暗褐色　しまり有り　粘性有り
8　10YR2/3　黒褐色　しまり有り　粘性有り
9　10YR4/4　褐色　しまり有り　粘性有り
10　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性有り　砂質土
11　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り　壁崩落か
12　2.5YR4/4　オリーブ褐色　しまりやや有り　粘性有り
13　10YR6/6　明黄褐色　しまり有り　粘性極有り　壁崩落か
14　10YR7/6　明黄褐色　しまり有り　粘性有り　壁崩落か
地山　10YR6/4 にぶい黄橙色　砂質シルト

14号溝跡

1　10YR2/1　黒色シルト
地山　黄褐色粘土

第25図　1号堀跡、溝跡（1）

5．溝跡

溝跡は14条検出されている。A区～B区まではおよそ南北方向の溝が多く検出され、C区では東西方向の溝だけが検出されている。ほとんどの溝跡が調査区外まで続いていると見られるが、調査区に挟まれた農耕地の中でそれらがどのような関係になっているのか、あるいは1号堀跡の東西の延長部分につながるのかなどについては確認ができなかった。

1号溝跡（第26図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞　A区、A10シ～B10ア、Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　4号陥し穴状遺構と一部で重複し、これを切っているので、1号溝跡の方が新しいと考えられる。

＜主軸方向＞　N－30°－W

＜規　模＞　開口部幅22cm～44cm、検出部の長さおよそ7.4m、検出面からの平均の深さ6.4cm。

＜覆土・堆積状況＞　断面からは、1号溝跡の直接の埋土である3層黒色砂質シルトの西隣りの4層黒色砂質シルト部分に別の細い溝跡があった可能性も考えられるが、検出面よりも上のため、粗掘りの際に消失した可能性がある。3層と4層の違いは褐色砂ブロックの含まれる量である。また3層と2号溝跡埋土の5層は土質が似ており、両層の上にまたがるように褐色砂大ブロック入りの2層黒色シルトが堆積している。

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。

＜時　期＞　不明

2号溝跡（第26図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞　A区、A10シ～B10イ、Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　4号陥し穴と一部で重複し、これを切っているので、2号溝跡の方が新しいと考えられる。

＜主軸方向＞　N－32°－W

＜規　模＞　開口部幅44cm～54cm、検出部の長さおよそ8.5m、平均の深さ7.9cm。

＜覆土・堆積状況＞　1号溝跡を参照。

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。

＜時　期＞　不明

3号溝跡（第27図、写真図版16）

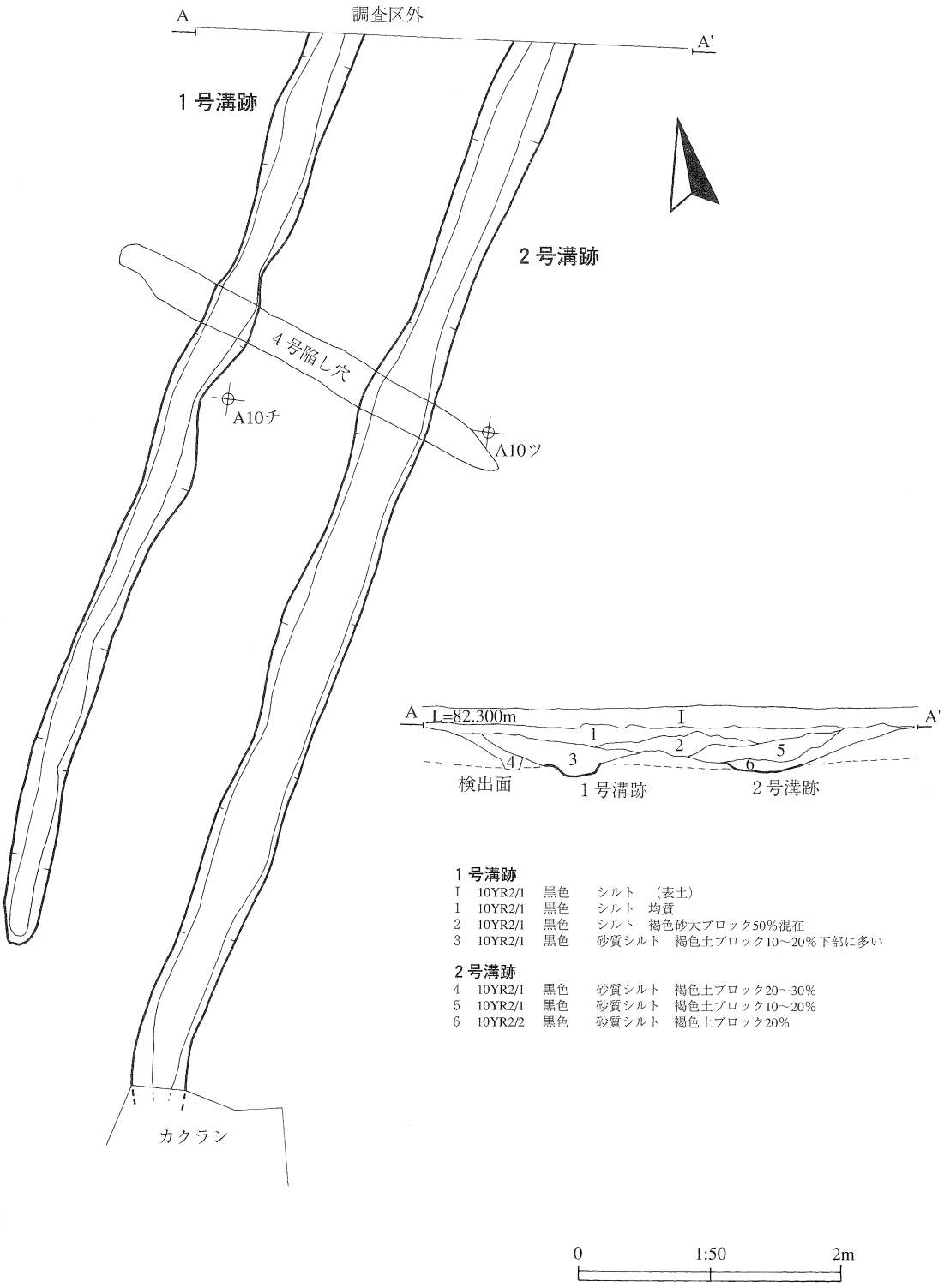
＜位置・検出状況＞　A区、A1ア～C0エ、Ⅲ層上面で検出された。この付近は検出面が粘土層（7.5YR5/4にぶい褐色粘土層）になっており、砂層が広がっているA区の中では異質の検出面である。

＜重複・新旧関係＞　38号陥し穴上半部西側を斜めに切っているので、3号溝跡の方が新しいと考えられる。

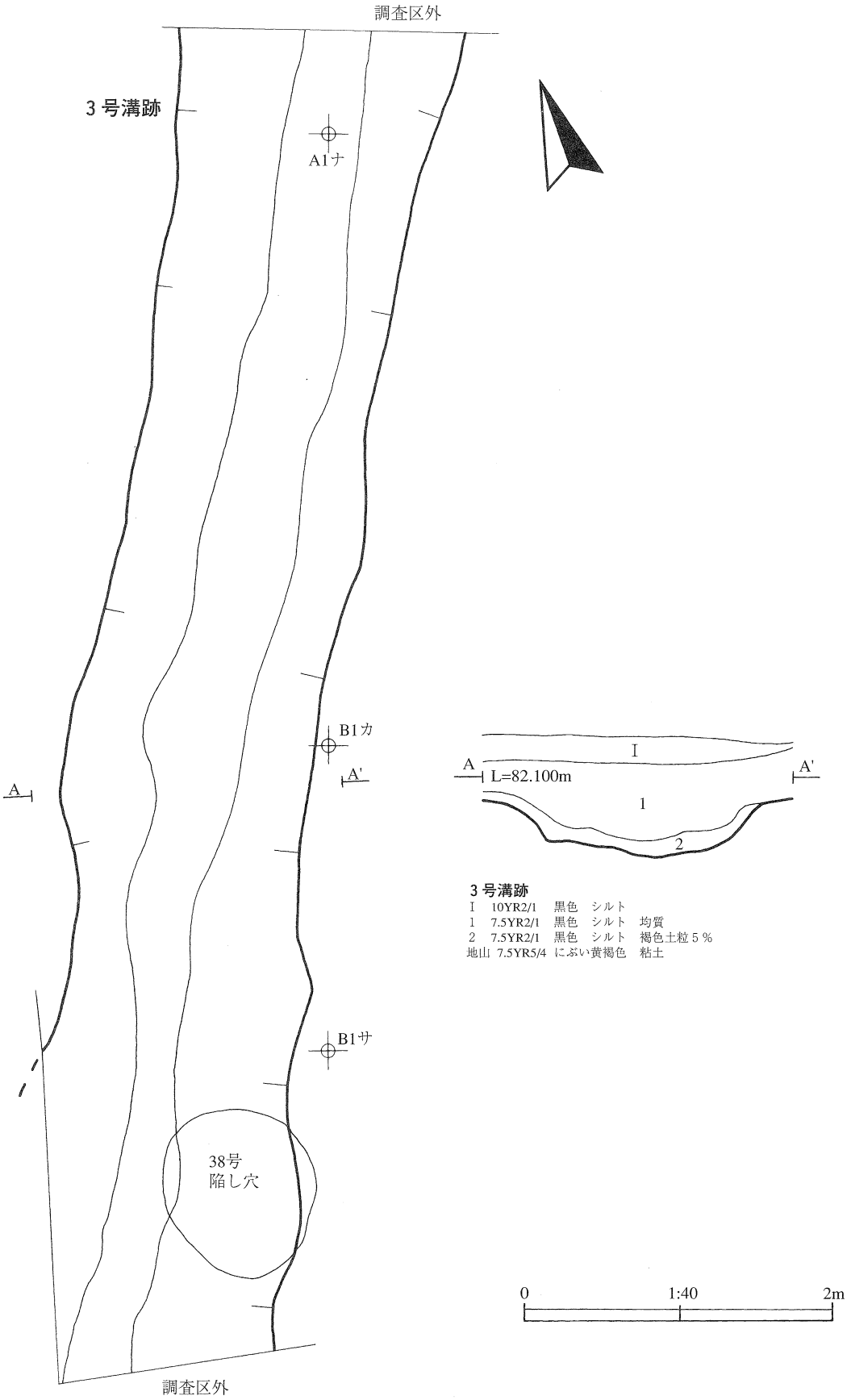
＜主軸方向＞　N－29°－E

＜規　模＞　開口部幅140cm～156cm、検出部の長さおよそ8.7m、平均の深さ39.8m。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅰ層（表土）の下にⅡ層相当の1層黒色シルトが堆積し、その下の溝底部上面には褐色土粒を若干含む2層黒色シルトが堆積している。


A
調査区外
A'
1号溝跡
2号溝跡
4号陥し穴
A10チ
A10ツ
カクラン
A
L=82.300m
A'
I
1
2
3
4
5
6
検出面
1号溝跡
2号溝跡
1号溝跡
I 10YR2/1 黒色 シルト (表土)
1 10YR2/1 黒色 シルト 均質
2 10YR2/1 黒色 シルト 褐色砂大ブロック50%混在
3 10YR2/1 黒色 砂質シルト 褐色土ブロック10～20%下部に多い
2号溝跡
4 10YR2/1 黒色 砂質シルト 褐色土ブロック20～30%
5 10YR2/1 黒色 砂質シルト 褐色土ブロック10～20%
6 10YR2/2 黒色 砂質シルト 褐色土ブロック20%
0
1:50
2m

第26図 溝跡（2）


調査区外
3号溝跡
A1ナ
B1カ
A
A'
B1サ
38号
陥し穴
調査区外
I
A
L=82.100m
A'
1
2
3号溝跡
I 10YR2/1 黒色 シルト
1 7.5YR2/1 黒色 シルト 均質
2 7.5YR2/1 黒色 シルト 褐色土粒5％
地山 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 粘土
0
1:40
2m

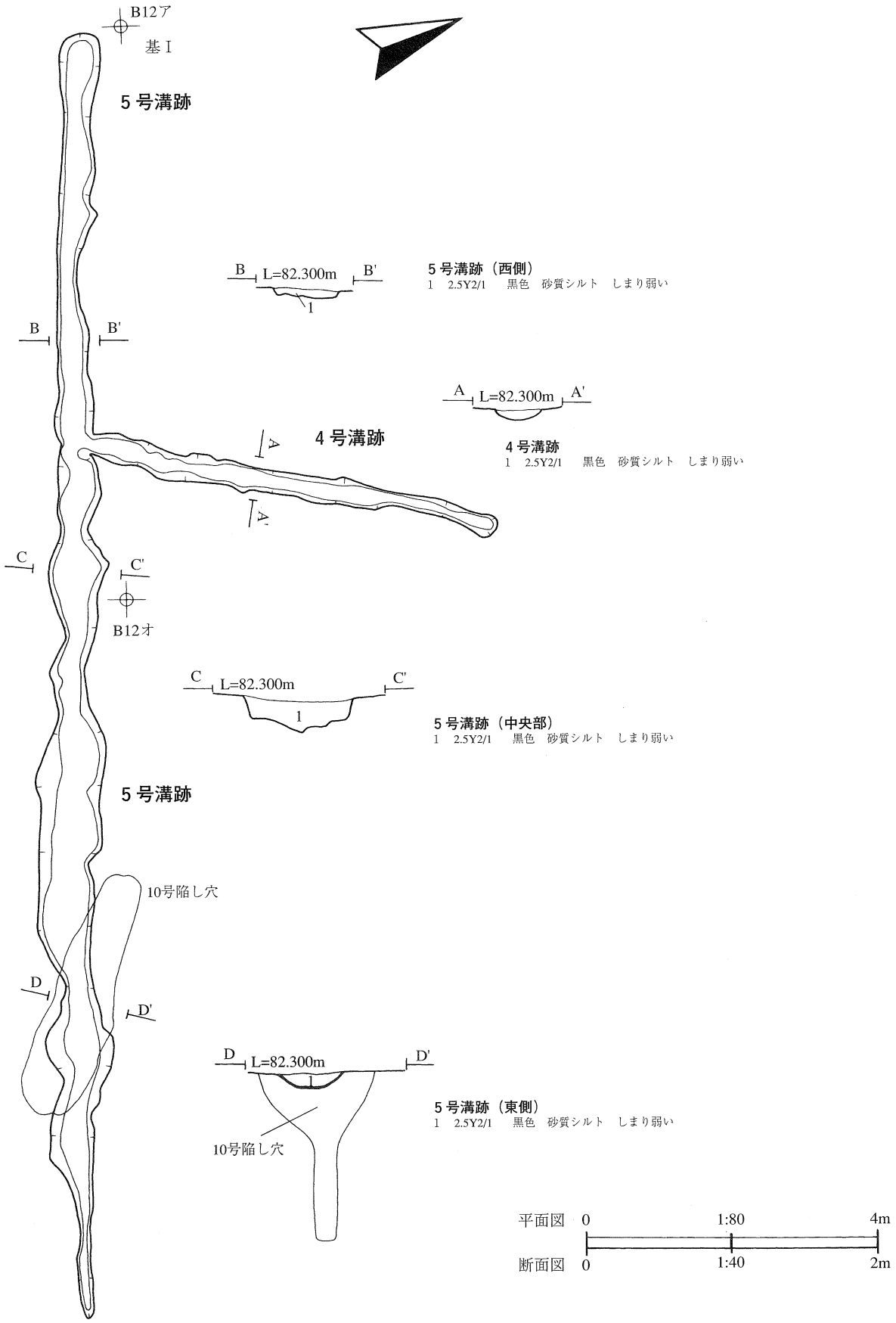
第27図　溝跡（3）

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。
＜時　期＞　１号堀跡の西側延長部分がこの溝の延長位置まで続いてきているとすれば、この２条がどのような関係になるかによってある程度時期を推し量れるが、今回の調査では交錯地点が調査区外になるため確認できなかった。

４号溝跡（第28図、写真図版17）
＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ12セ～Ｂ12ウ。Ⅲ層上面で検出された。５号溝跡とほぼ直角につながっているが、区別するために名前を別々にした。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　Ｎ－30°－Ｅ
＜規　模＞　開口部幅 18cm～40cm、検出部の長さおよそ 5.7m、平均の深さ 11.5cm。
＜覆土・堆積状況＞　検出面から下の埋土は、１層黒色砂質シルトのみである。
＜出土遺物＞　さびた鉄製品の小片が１層上部から１個出土した。詳細不明により不掲載とした。
＜時　期＞　不明

５号溝跡（第28図、写真図版17）
＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ｂ12ア～Ｂ13オ、Ⅲ層上面で検出された。
＜重複・新旧関係＞　10号陥し穴を斜めに切っているので、５号溝の方が新しい遺構である。
＜主軸方向＞　Ｎ－70°－Ｗ
＜規　模＞　開口部幅 14cm～ 90cm、検出部の長さおよそ 18.0m、平均の深さ 9.4cm。
＜覆土・堆積状況＞　検出面から下の埋土は、１層黒色砂質シルトのみである。底面の地山砂質シルトと上位の黒色シルトが雨水などの流れによって均質に混じりながら堆積した層であろう。
＜出土遺物＞　陶磁器時期片が１層上部から１個出土した。詳細不明のため、不掲載とした。
＜時　期＞　不明

６号溝跡（第29図、写真図版17）
＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ｂ18キ～Ｃ18イ、Ⅲ層上面で検出された。
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。
＜主軸方向＞　Ｎ－18°－Ｅ
＜規　模＞　開口部幅 40cm～80cm、検出部の長さおよそ 9.7m、平均の深さ 18.8cm。
＜覆土・堆積状況＞　２層黒褐色砂質シルトが側面から底部に堆積し、中央の窪みを１層黒色シルトが埋めている。２層は底面の地山砂質シルトと上位の黒色シルトが雨水などの流れによって均質に混じりながら堆積した層であろう。
＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。
＜時　期＞　不明


B12ア
基Ⅰ
5号溝跡
B
B'
L=82.300m
1
5号溝跡（西側）
1　2.5Y2/1　黒色　砂質シルト　しまり弱い
A
A'
L=82.300m
4号溝跡
1　2.5Y2/1　黒色　砂質シルト　しまり弱い
4号溝跡
C
C'
B12オ
L=82.300m
1
5号溝跡（中央部）
1　2.5Y2/1　黒色　砂質シルト　しまり弱い
5号溝跡
10号陥し穴
D
D'
L=82.300m
1
10号陥し穴
5号溝跡（東側）
1　2.5Y2/1　黒色　砂質シルト　しまり弱い
平面図　0　1:80　4m
断面図　0　1:40　2m

第28図　溝跡（4）

7号溝跡（第29図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞　B区、A17コ～B18ア。Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－1°－E

＜規　模＞　開口部幅46cm～82cm、検出部の長さおよそ10.1m、平均の深さ10.4cm。

＜覆土・堆積状況＞　1層黒色シルトが均質に堆積している。

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。

＜時　期＞　不明

8号溝跡（第29図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞　B区、A18ア～A18チ。Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－5°－E

＜規　模＞　開口部幅30cm～80cm、検出部の長さおよそ6.6m、平均の深さ11.1cm。

＜覆土・堆積状況＞　1層黒色シルトが均質に堆積している。

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。

＜時　期＞　不明

9号溝跡（第30図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞　B区、A20ク～B20オ。Ⅲ層上面で検出された。平面形や断面の観察からは、南西に延びた複数の溝が重複していることが伺われたが、個々の溝の判別が部分的にしかできない状態であったため、北側で北西にほぼ直角に延びた短い溝も含めて1条と数え登録した。この2方向の溝跡の向きが西に接する1号掘立柱建物跡の2辺とほぼ並行していることや、位置的に見て近いことから、同建物跡の周囲に排水溝として掘られた溝の一部であった可能性も考えられる。

＜重複・新旧関係＞　互いに複雑に重複した溝跡以外には遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－27°－W

＜規模＞　開口部幅24cm～168cm、検出部の最大の長さおよそ9.6m、平均の深さ10.5cm。

＜覆土・堆積状況＞　南面及び1層黒褐色シルトは地山ブロック（黄褐色砂）を多く含む。埋め戻しか。

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。

＜時　期＞　不明

10号溝跡（第31図、写真図版19）

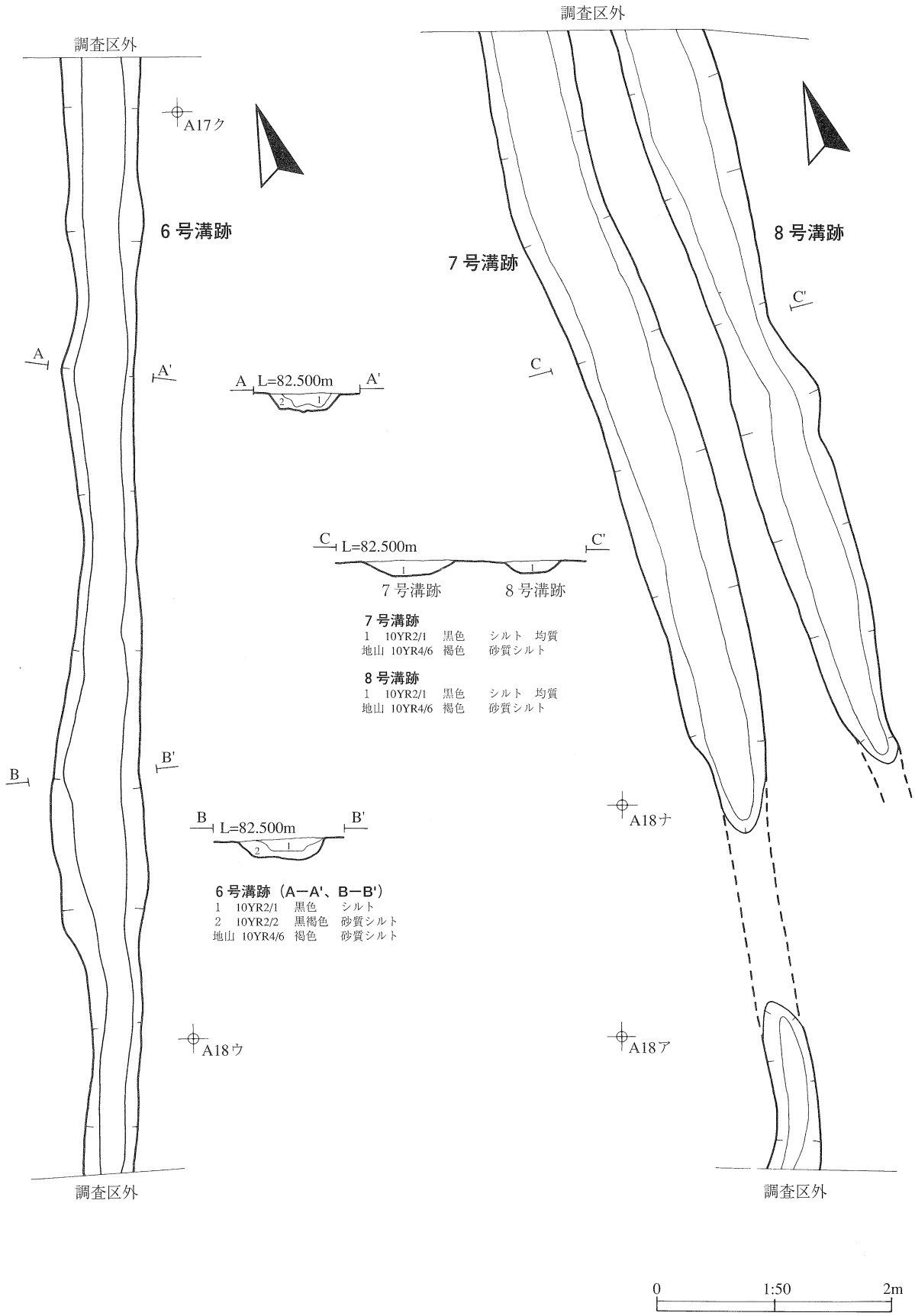
＜位置・検出状況＞　C区、B23ナ～B23ヌ、Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

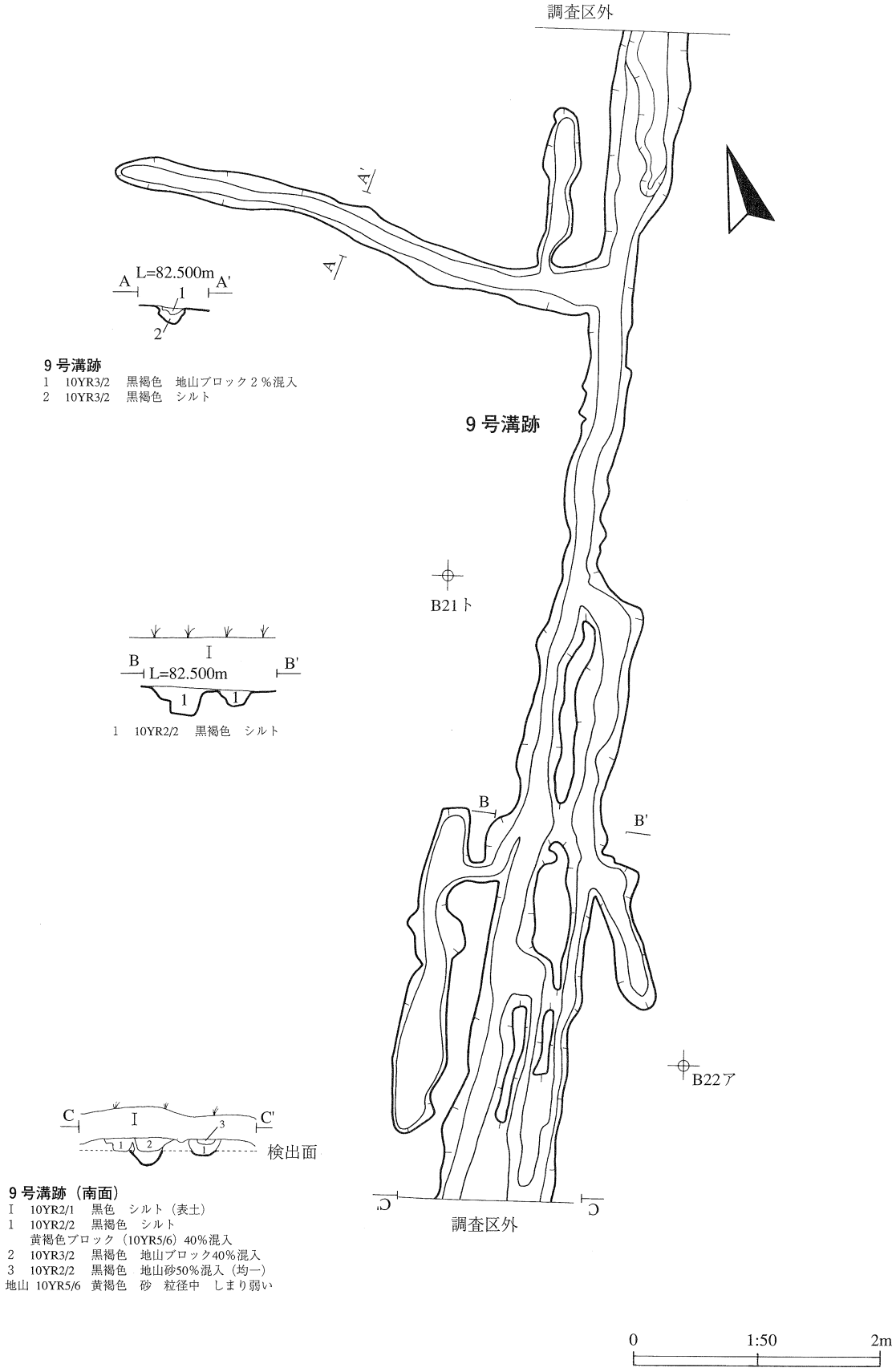
＜主軸方向＞　N－73°－W

＜規　模＞　開口部幅16cm～22cm、検出部の長さおよそ4.3m、平均の深さ16.1cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層起源の黒色シルトである。


調査区外
A17ク
6号溝跡
A
A'
A L=82.500m A'
2
1
B
B'
B L=82.500m B'
2
1
6号溝跡（A−A'、B−B'）
1 10YR2/1 黒色 シルト
2 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト
地山 10YR4/6 褐色 砂質シルト
A18ウ
調査区外
調査区外
7号溝跡
8号溝跡
C
C'
C L=82.500m C'
1
1
7号溝跡 8号溝跡
7号溝跡
1 10YR2/1 黒色 シルト 均質
地山 10YR4/6 褐色 砂質シルト
8号溝跡
1 10YR2/1 黒色 シルト 均質
地山 10YR4/6 褐色 砂質シルト
A18ナ
A18ア
調査区外
0 1:50 2m

第29図　溝跡（5）


調査区外
A
L=82.500m
A'
1
2
9号溝跡
1　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック２％混入
2　10YR3/2　黒褐色　シルト
9号溝跡
B21ト
I
B
L=82.500m
B'
1
1
1　10YR2/2　黒褐色　シルト
B
B'
B22ア
C
I
C'
3
1
2
1
検出面
9号溝跡（南面）
I　10YR2/1　黒色　シルト（表土）
1　10YR2/2　黒褐色　シルト
黄褐色ブロック（10YR5/6）40％混入
2　10YR3/2　黒褐色　地山ブロック40％混入
3　10YR2/2　黒褐色　地山砂50％混入（均一）
地山 10YR5/6　黄褐色　砂　粒径中　しまり弱い
C'
C
調査区外
0
1:50
2m

第30図　溝跡（６）

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。
＜時　期＞　不明

11号溝跡（第31図、写真図版20）
＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｃ23ア～Ｃ23ウ。Ⅲ層上面で検出された。
＜重複・新旧関係＞　13号溝跡とほぼ並行に重複し、その埋土の上半部を切っているので、11号溝跡の方が新しいと考えられる。また、13号溝跡が27号陥し穴より新しいので、11号溝跡も27号陥し穴より新しい。
＜規模＞　開口部幅44cm～68cm、検出部の長さおよそ4.6m、平均の深さ8.5cm。
＜主軸方向＞　Ｎ－70°－Ｗ
＜覆土・堆積状況＞　２層黒色シルトは13号溝跡の埋土で、Ⅱ層起源の黒色シルトが地山黄褐色粘土起源と思われる微小な黄褐色土粒を一様に含んでいる。11号溝跡は、明らかに13号埋没後に掘削されており、13号溝跡の埋土とは明瞭に区別される均質な黒色シルトが堆積している。
＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。
＜時　期＞　不明

12号溝跡（第31図、写真図版19）
＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｂ23ナ～Ｃ23ウ。Ⅲ層上面で検出された。
＜重複・新旧関係＞　28号陥し穴とほぼ完全に重複し、これを切っているので、12号溝跡の方が新しい。
＜主軸方向＞　Ｎ－70°－Ｗ
＜規　模＞　開口部幅18cm～74cm、検出部の長さおよそ4.3m、平均の深さ5.3cm。
＜覆土・堆積状況＞　２層黒色シルトはⅡ層を起源としていると考えられ、地山黄褐色粘土起源と思われる微小な黄褐色土粒を一様に含んでいる。13号溝跡と同様な堆積状況であることから、同時期に使用されていた可能性も考えられる。
＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。
＜時　期＞　不明

13号溝跡（第31図、写真図版20）
＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｃ23ア～Ｃ23ウ。Ⅲ層上面で検出された。
＜重複・新旧関係＞　第11号溝跡と重複し、これに埋土の上半部を切られているので、第13号溝跡の方が旧いと考えられる。また、27号陥し穴とも重複し、これを切っているので13号溝跡の方が新しい。
＜主軸方向＞　Ｎ－70°－Ｗ
＜規　模＞　検出部の長さおよそ.4.6m。断面図のみあり。11号溝跡の直下にあり、やや幅が広い。
＜覆土・堆積状況＞　２層黒色シルトはⅡ層を起源としていると考えられ、地山黄褐色粘土起源と思われる微小な黄褐色土粒を一様に含んでいる。その上を新たに掘削したものが11号溝跡であろう。また、12号溝跡と同様な堆積状況であることから、同時期に使用されていた可能性も考えられる。
＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。
＜時　期＞　不明

14号溝跡（第25図、写真図版15・21）

＜位置・検出状況＞　D区、B11ス～B11ソ。Ⅲ層上面で検出された。検出面から極浅くしか残っていなかった。検出された部分は、１号堀の北側わずか２mをほぼ並行に走っている。東西方向に延長される部分の範囲は今回不明のままである。５号溝跡とほぼ並行と考えられるので、対になって掘られたものである可能性も考えられる。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜主軸方向＞　N－71°－W

＜規　模＞　開口部幅26cm～48cm、検出部の長さおよそ4.3m、平均の深さ2.4cm。

＜覆土・堆積状況＞　１層黒色シルトのみで直上のⅡ層起源と思われる。

＜出土遺物＞ 古代末期のものと考えられる土師器の坏の底部破片が１点だけ出土した。（第36図、写真図版30：26）

＜時　期＞　埋土中に古代末期のものと考えられる土師器片が出土したことから、少なくともこの溝は古代末期以降に埋まった溝跡であると考えられる。

15号溝跡（第31図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞　C区、E23タ～E23ツ。Ⅲ層上面で検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜規　模＞　開口部幅42cm～66cm、検出部の長さおよそ4.5m、平均の深さ29.0cm。

＜主軸方向＞　N－74°－W

＜覆土・堆積状況＞　２層黒褐色シルト層は、地山黄褐色粘土起源と思われる微小な黄褐色土粒を一様に含自然堆積層と考えられる。その上に１層黒褐色シルトが自然堆積している。16号溝跡と同時期の溝であった可能性がある。

＜出土遺物＞　遺物は全く出土しなかった。

＜時　期＞　不明

16号溝跡（第31図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞　C区、F23タ～F23ス、Ⅲ層上面で検出された。

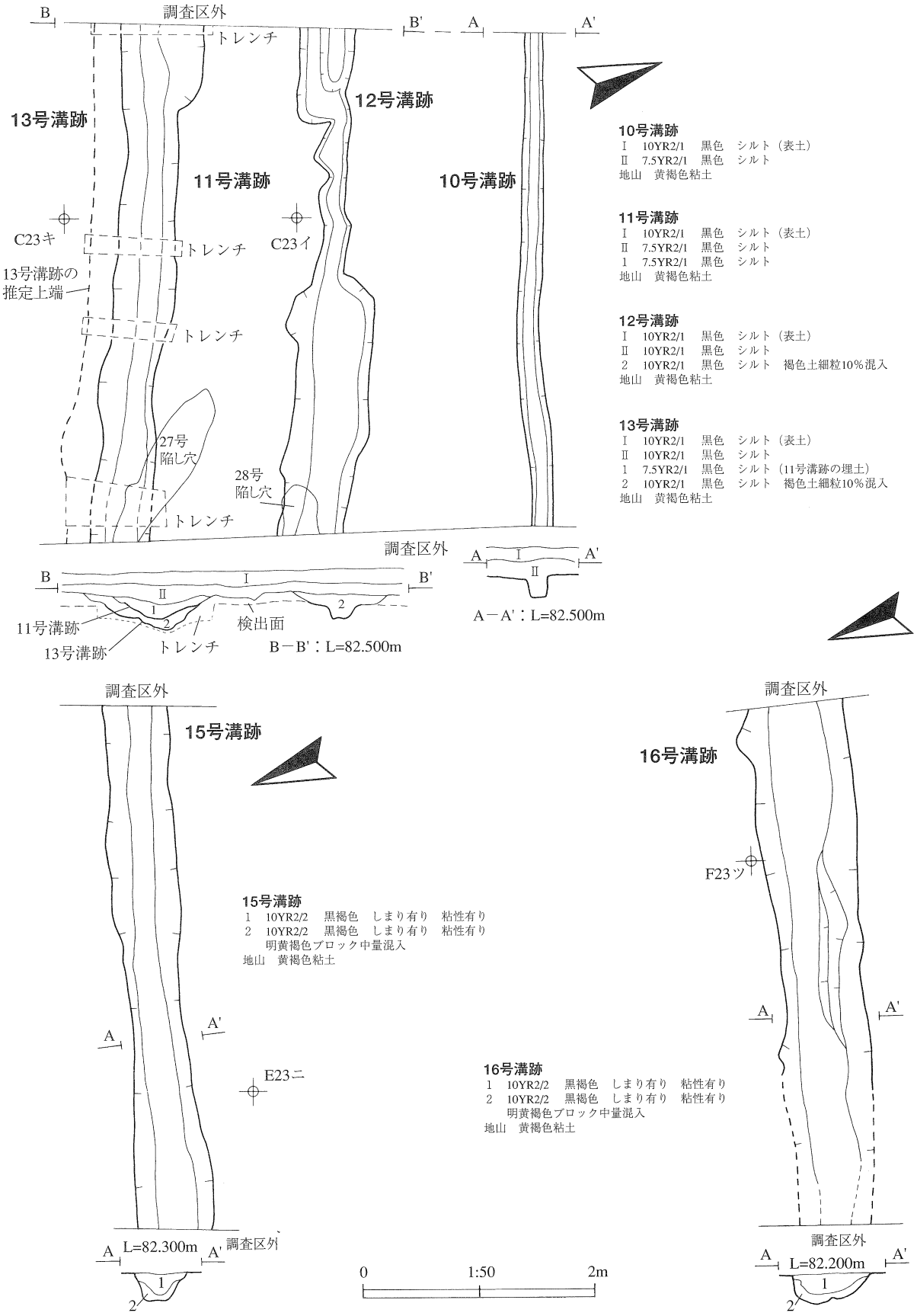
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。ベルト断面の底面および完掘後の底面の形状を見ると２条の溝跡が並行に切り合ったまま並んでいるような形状を示しているが、ベルト断面の土層の観察によれば１条の溝として埋まっていることが分かった。したがって、南北どちらかの側に溝を拡張した跡であると判断した。

＜主軸方向＞　N－75°－W

＜規模＞　開口部幅66cm～94cm、検出部の長さおよそ4.5m、平均の深さ26.0cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層黒褐色シルト層は、地山黄褐色粘土起源と思われる微小な黄褐色土粒を一様に含んでいる。その上に１層黒褐色シルトが自然堆積している。16号溝跡と同時期の溝であった可能性がある。

＜出土遺物＞　土師器片５点（第36図、写真図版30：23・24・27・28・29）が出土した。口縁部が２点、底部が３点で、胎土の状態などから後述の赤焼き土器の坏と同様に古代末期のものと考えられる。


B
調査区外
B'
A
A'
トレンチ
13号溝跡
12号溝跡
11号溝跡
10号溝跡
C23キ
C23イ
トレンチ
13号溝跡の
推定上端
トレンチ
27号
陥し穴
28号
陥し穴
トレンチ
10号溝跡
Ⅰ 10YR2/1 黒色 シルト（表土）
Ⅱ 7.5YR2/1 黒色 シルト
地山 黄褐色粘土
11号溝跡
Ⅰ 10YR2/1 黒色 シルト（表土）
Ⅱ 7.5YR2/1 黒色 シルト
1 7.5YR2/1 黒色 シルト
地山 黄褐色粘土
12号溝跡
Ⅰ 10YR2/1 黒色 シルト（表土）
Ⅱ 10YR2/1 黒色 シルト
2 10YR2/1 黒色 シルト 褐色土細粒10％混入
地山 黄褐色粘土
13号溝跡
Ⅰ 10YR2/1 黒色 シルト（表土）
Ⅱ 10YR2/1 黒色 シルト
1 7.5YR2/1 黒色 シルト（11号溝跡の埋土）
2 10YR2/1 黒色 シルト 褐色土細粒10％混入
地山 黄褐色粘土
調査区外
A
A'
Ⅰ
Ⅱ
A－A'：L=82.500m
B
B'
Ⅰ
Ⅱ
1
2
11号溝跡
13号溝跡
2
検出面
トレンチ
B－B'：L=82.500m
調査区外
15号溝跡
15号溝跡
1 10YR2/2 黒褐色 しまり有り 粘性有り
2 10YR2/2 黒褐色 しまり有り 粘性有り
明黄褐色ブロック中量混入
地山 黄褐色粘土
A
A'
E23ニ
A
L=82.300m
A'
調査区外
1
2
16号溝跡
1 10YR2/2 黒褐色 しまり有り 粘性有り
2 10YR2/2 黒褐色 しまり有り 粘性有り
明黄褐色ブロック中量混入
地山 黄褐色粘土
0
1:50
2m
調査区外
16号溝跡
F23ツ
A
A'
調査区外
A
L=82.200m
A'
1
2

第31図 溝跡（7）

＜時　期＞　土師器片が流入した経緯は不明であるが、埋土中の比較的上部から出土しているので、この溝は古代末期以降に埋まった溝跡であると考えられる。

6．土坑

土坑はＡ区西側およびＢ区に多く検出された。埋土は概ねⅠ層～Ⅱ層起源と考えられる黒色～暗褐色のシルト～砂質シルトを主としており、一部に地山（Ⅲ層）起源と考えられる褐色の砂質シルト～砂の大小ブロックが混入している層も見られる。

＜出土遺物と時期および用途について＞

いずれの土坑からも遺物が全く出土ぜず、大部分は形状や規模からみてもその時期や用途が不明である。しかし、一部には、その形状から見て、縄文時代の陥し穴の一部分が残ったものである可能性が見いだせるものもある。

１号土坑（第32図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ１ウ～Ｂ１エ、Ⅲ層上面で明瞭な暗褐色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、188cm×66cm 、深さ 32cm 。

＜覆土・堆積状況＞　大部分が暗褐色シルトでⅡ層からⅢ層への漸移層の上部からのものと思われる。南西側の端に同じ漸移層下部と思われる褐色砂質シルトが埋まっている。

２号土坑（第32図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ａ１ノ～Ｂ１オ、Ⅲ層上面で明瞭な暗褐色砂質シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　３号土坑と一部で重複しており、これを切っているので、２号土坑の方が新しいと考えられる。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、168cm×88cm、深さ 32cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層褐色砂質シルトは地山と漸移層的につながる様相を見せている。褐色土ブロックを含む１層暗褐色砂質シルトがその中央付近に埋まっている。

３号土坑（第32図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ａ１ノ～Ｂ１オ、Ⅲ層上面で明瞭な暗褐色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　２号土坑と一部で重複しており、これに切られているので、３号土坑の方が旧いと考えられる。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、(100)cm×74cm、深さ 38cm。

＜覆土・堆積状況＞　褐色土ブロックを含む１層暗褐色砂質シルトが埋まっている

4号土坑（第32図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ２ア～Ｂ２カ、Ⅲ層上面で明瞭な暗褐色砂質シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部台形、166cm×96cm、深さ26cm。

＜覆土・堆積状況＞　周辺から底部にかけて３層褐色砂質シルトが広がり、その中央にレンズ状の２層暗褐色砂質シルトが２種類重なっている。ほぼ垂直に杭跡と見られる黒色土の貫入が見られる。

5号土坑（第32図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ２イ、Ⅲ層上面で明瞭な暗褐色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　底部に副穴的な小穴が３カ所見られる。断面観察では副穴に対応する層界が埋土中に立ち上がっており、本土坑を切る新しい時期の別遺構とも考えられる。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、210cm×82cm、深さ40cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層暗褐色砂質シルトは、地山起源の褐色砂ブロックを少量含んでいる。１層暗褐色シルトは、Ⅱ層～Ⅲ層の漸移層上部を起源とするものと考えられる。

6号土坑（第32図）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ２ク、Ⅲ層上面で暗褐色シルトの楕円形のプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　柱穴状小土坑**P1**（AP1）が後から切っていると考えられる。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、162cm×70cm、深さ36cm。

＜覆土・堆積状況＞　１層暗褐色シルトはⅡ層下部の漸移層のものと思われる。１層が堆積しているところに柱穴状小土坑**P1**が掘削されたと考えられる。**P1**の埋土は、柱が抜かれた跡に黒色シルトが地山起源の褐色土をブロックとして含みながら堆積したものと考えられる。なお、断面観察では本土坑と**P1**の底部の深さが一致しているが、関連性は不明である。

7号土坑（第32図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞　Ｂ３イ～Ｂ３ウ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色砂質シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、120cm×80cm、深さ22cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層起源の黒褐色砂質シルトが堆積する際にⅡ層下部の漸移層の暗褐色砂がブロック状になって含まれたと考えられる。

8号土坑（第32図、写真図版24）

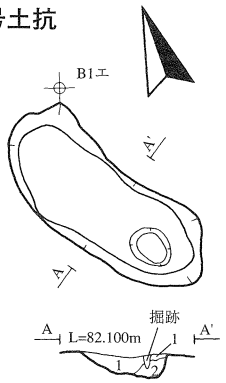
＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ３オ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、104cm×28cm、深さ26cm。

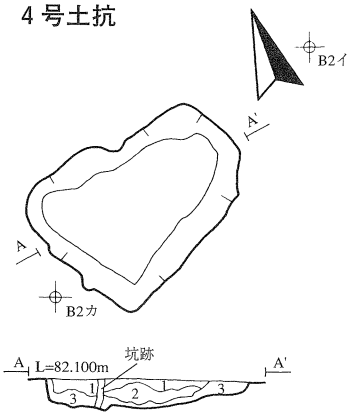
＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層下部の漸移層の砂質シルトが周辺部で崩落した後に、Ⅱ層起源の黒色砂質シルトで埋まったものと考えられる。

1 号土抗



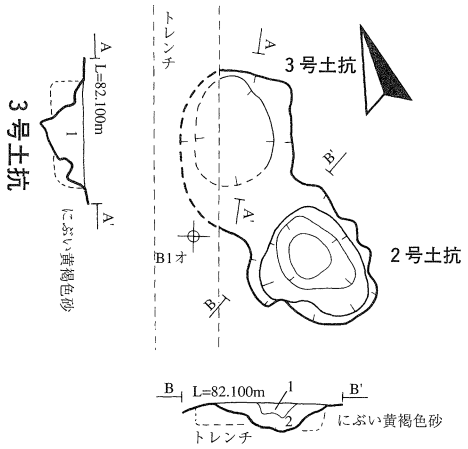
1 号土抗
1　10YR3/3　暗褐色　シルト　しまり有り
2　10YR4/4　褐色　砂質シルト

4 号土抗



4 号土抗
1　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　しまり弱い
2　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
3　10YR4/4　褐色　砂質シルト　黒色土を斑状に含む

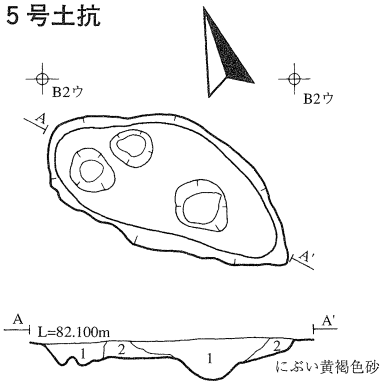
3 号土抗



2 号土抗
1　10YR3/4　暗褐色　シルト　褐色土ブロック含む

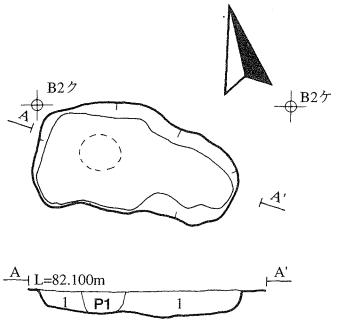
3 号土抗
1　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　褐色砂ブロック含む
2　10YR4/4　褐色　砂質シルト　地山との漸移層的

5 号土抗



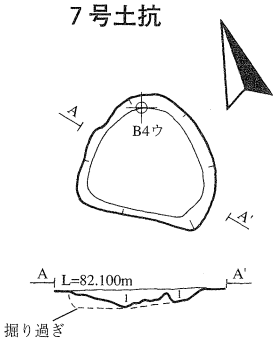
5 号土抗
1　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　しまり弱い
2　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　褐色砂ブロック含む

6 号土抗



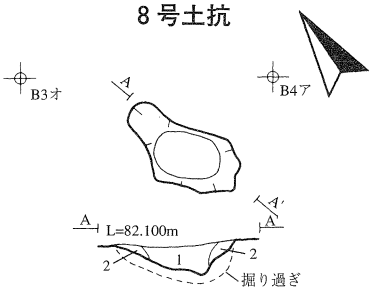
6 号土抗
1　10YR3/4　暗褐色　シルト　黒色土・褐色土ブロック含む
P1　10YR2/1　黒色土（表土）　褐色土ブロック含む

7 号土抗



7 号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　砂質シルト　褐色砂ブロック含む（Ⅱ層相当）

8 号土抗



8 号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　砂質シルト
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト（Ⅱ～Ⅲ層漸移層）

0　1:60　2m

第32図　土抗（1）

9号土坑（第33図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ４ア、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部円形、80cm×72cm、深さ20cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層砂質シルトは地山起源の自然堆積と考えられる。その上の１層黒色シルトはⅡ層下部の漸移層起源の自然堆積層と考えられる。

10号土坑（第33図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ５ア、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、140cm×76cm、深さ38cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層黄褐色砂質シルトは地山の砂質シルトがⅡ層黒色土をブロックとして含みながら埋まったものと考えられる。その上の１層黒色シルトはⅡ層起源の黒色シルトが同じくⅡ層下部漸移層起源の暗褐色シルトをブロックとして含みながら堆積したものと考えられる。

11号土坑（第33図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞　Ａ区、Ｂ４オ～Ｂ５ア、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、82cm×64cm、深さ18cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層黒色シルトがⅡ層下部の漸移層暗褐色シルトをブロックとして含みながら堆積していると考えられる。

12号土坑（第33図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞　Ａ８サ～Ａ８シ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、(152)cm×90cm、深さ30cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層は地山の砂質シルトがⅡ層黒色土をブロックとして含みながら埋まったもので、その上の１層はⅡ層黒色シルトがⅡ層下部の漸移層暗褐色シルトをブロックとして含みながら埋まっていると考えられる。

13号土坑（第33図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞　Ｂ８ウ～Ｂ８エ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、122cm×42cm、深さ20cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層は地山起源の砂質シルトがⅡ層黒色土をブロックとして含みながら埋まったものと考えられ、１層黒褐色砂質シルトはⅡ層下部の漸移層起源の埋土と考えられる。

14号土坑（第33図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ14ク～Ａ14ケ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、140cm×74cm、深さ30cm。

＜覆土・堆積状況＞　地山起源の砂に黒色シルトのブロックを含んだ４層に、地山起源の３層褐色砂質シルトと、地山起源の砂質シルトブロックを含んだⅡ層下部漸移層起源の２層黒色シルトが順次堆積しており、上部にⅡ層起源の黒色シルトが堆積している。

15号土坑（第33図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ14エ～Ａ14コ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、140cm×68cm、深さ42cm。

＜覆土・堆積状況＞　２層は地山起源の砂質シルトがⅡ層起源の黒色土をブロックとして含みながら堆積したものと考えられる。１層はⅡ層起源の黒色シルトがⅡ層下部漸移層起源の暗褐色シルトをブロックとして含みながら堆積したものと考えられる。

16号土坑（第33図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ｂ17ア～Ｂ17カ、Ⅲ層上面で明瞭な黒褐色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、146cm×104cm、深さ40cm。

＜覆土・堆積状況＞　地山起源の３層にぶい褐色砂の上にⅡ層下部漸移層起源の１層黒褐色シルトおよび２層黒褐色シルト（細砂混入）が堆積したものと考えられる。

17号土坑（第33図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ15シ～Ａ15チ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　11号陥し穴と重複するが、新旧関係は不明。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、176cm×96cm、深さ46cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層下部漸移層起源の２層暗褐色砂質シルトが底面に沿って広く堆積した上にⅠ層起源の１層黒褐色シルトが均質に堆積したものと考えられる。

18号土坑（第34図、写真図版27）

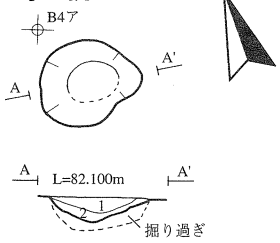
＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ12タ～Ａ12ナ、Ⅲ層上面で明瞭な円形の黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部円形、116cm×114cm、深さ56cm。

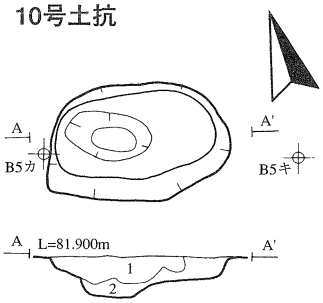
＜覆土・堆積状況＞　褐色砂に黒色シルトが均一に混ざった３層の上に褐色砂ブロックの入った褐色砂質シルトが重なり、さらに中央に黒色シルトが堆積したものと考えられる。

9号土抗



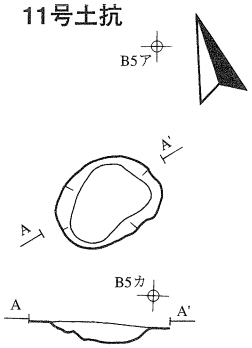
9号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト（Ⅱ層相当）
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト（Ⅱ～Ⅲ層漸移層）

10号土抗



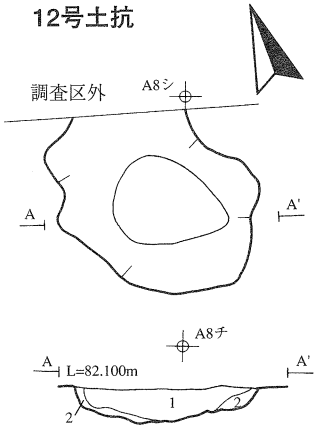
10号土抗
1　10YR1.7/1 黒色　シルト　しまり弱い　暗褐色～褐色の砂質シルトのブロック30%含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト～砂　黒色土ブロック含む

11号土抗



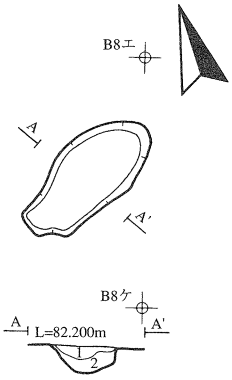
11号土抗
1　10YR1.7/1 黒色　シルト　暗褐色砂質シルトのブロック20～30%含む

12号土抗



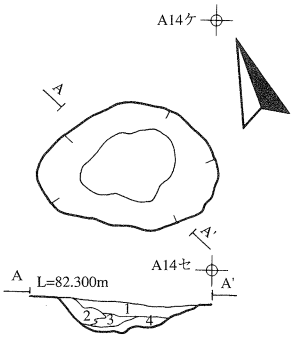
12号土抗
1　10YR1.7/1 黒色　シルト　均質　夾雑物少ない　しまり弱い　壁際に暗褐色土ブロック混入
2　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　砂質シルトのブロック集中

13号土抗



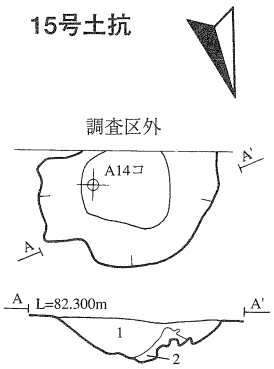
13号土抗
1　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　漸移層的
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　しまり弱い　黒色土ブロック含む

14号土抗



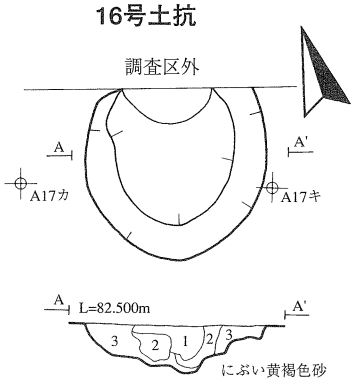
14号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト　均質
2　7.5YR2/1　黒色　砂質シルトブロック混入
3　10YR3/2　褐色　砂質シルト
4　10YR4/4　褐色　他山の砂に黒色シルトのブロック混入

15号土抗



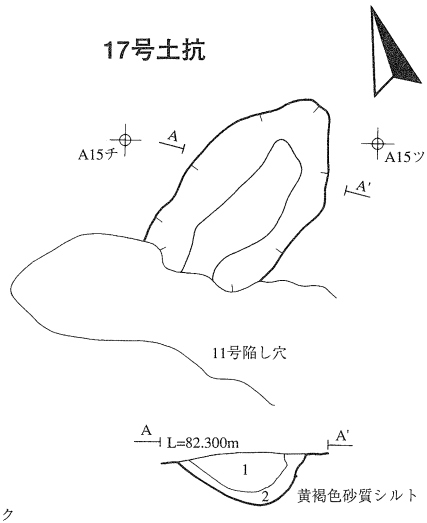
15号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR5/2　にぶい褐色　砂　黒色シルトブロック混入

16号土抗



16号土抗
1　7.5YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱い
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　細かい砂が微妙混入　地山ブロック混入
3　10YR5/4　にぶい褐色　砂　1または2のブロック混入多い　粘性無し

17号土抗



17号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト　均質
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト

0　1:60　2m

第33図　土抗（2）

19号土坑（第34図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ13ナ～Ａ13ニ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、104cm×64cm、深さ16cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層下部漸移層起源の２層暗褐色シルトが地山起源の褐色砂ブロックを含みながら底面に広がり、その上にⅡ層起源の１層黒色シルトが堆積したものと考えられる。

20号土坑（第34図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ13テ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、92cm×50cm、深さ 22cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層起源の１層黒色シルトが均質に堆積したものと考えられる。

21号土坑（第34図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ15ツ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、146cm×106cm、深さ 38cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層下部漸移層起源の３層暗褐色砂質シルト（Ⅲ層起源の褐色砂ブロックを含む）の上にⅠ層起源の２層黒褐色シルト（Ⅱ層起源の黒色シルトブロック含む）が重なり、さらに上にⅠ層起源の１層黒色シルトが堆積したものと考えられる。

22号土坑（第34図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ15ス、Ⅲ層上面で明瞭な円形の黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部円形、120cm×100cm、深さ 28cm。

＜覆土・堆積状況＞　Ⅱ層下部漸移層起源の２層黒褐色砂質シルト（Ⅲ層起源の褐色砂ブロック含む）の上にⅡ層由来の１層黒色シルトが堆積したものと考えられる。

23号土坑（第34図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ19ケ～Ａ19ソ、Ⅲ層上面で明瞭な円形の黒褐色シルトのプランとして検出された。

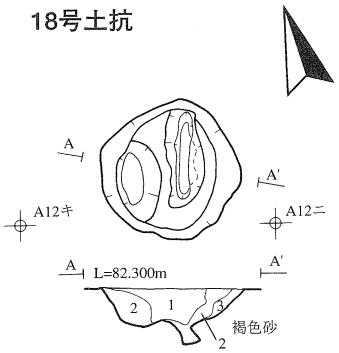
＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部楕円形、196cm×176cm、深さ 90cm。

＜覆土・堆積状況＞　周囲が埋土と同じような砂であるため、周囲の砂層中にかすかに識別できるラミナの有無で底面と壁面を識別している。副穴状の６層下部には黒色シルトが確認できた。５層までⅢ層由来の黄褐色細砂（周囲より細かい）で、その上にⅠ～Ⅱ層由来と思われるシルト層３層～１層（Ⅲ層由来の砂ブロックの含有量が異なる）までが堆積している。４層暗褐色シルトは、杭の跡に表土が入ったものであろう。

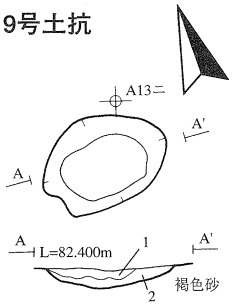
＜用　途＞　一見して不明である。しかし、検出面より上が耕地化にともない掘削されている可能性がある

18号土抗



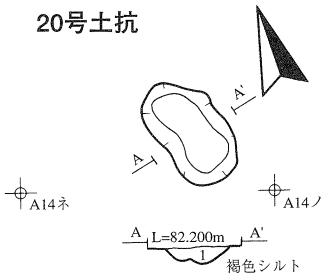
18号土抗
1　10YR2/1　黒色　シルト
2　10YR3/3　褐色　砂質シルト　褐色砂ブロックを斑状に含む
3　10YR4/4　黒色　黒色土が砂に均一に混入

19号土抗



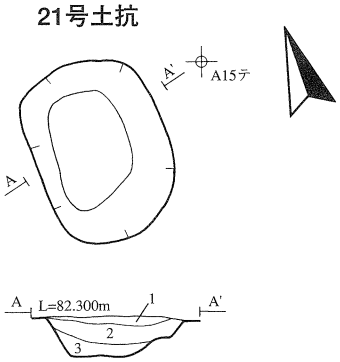
19号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　褐色土ブロック10%含む

20号土抗



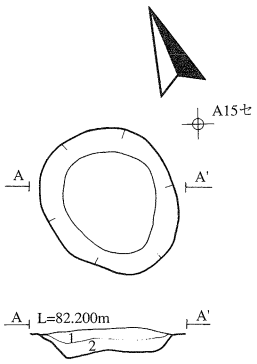
20号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト

21号土抗



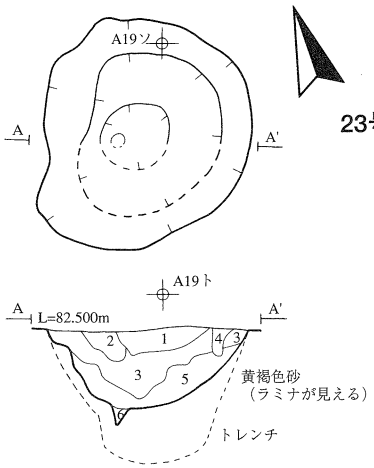
21号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　黒色土ブロック20%含む
3　10YR3/3　褐色　砂質シルト　褐色砂ブロックを斑状に含む

22号土抗



22号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト
2　10YR2/2　黒褐色　砂質シルト　褐色砂ブロック20%含む

23号土抗



23号土抗
1　10YR2/1　黒褐色　シルト　しまり弱い　地山砂ブロック20%
2　10YR3/4　暗褐色　シルト　しまり弱い　地山ブロック50%
3　10YR2/1～3/4　黒色～暗褐色　シルト　地山ブロック20%
4　10YR3/4　暗褐色　シルト　しまり弱い　黒褐色ブロックの混入あり
5　10YR5/6　黄褐色　細砂　しまり弱い　均質　周囲の壁より粒が細かくてラミナが見えない
6　10YR5/6　黄褐色　細砂　底面に黒色土有り

0　2m

第34図　土抗（3）

ことを考慮に入れると、底部の６層部分を逆茂木痕の副穴とする円筒形陥し穴の下半部が、砂層の壁の崩落を伴う形で残ったものであるという可能性も考えられる。

24号土坑（第35図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｃ23チ～Ｃ23ニ、Ⅲ層上面で明瞭な円形の黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　25号陥し穴と重複し、これを切っていることから、24号土抗の方が新しい。

＜平面形・規模＞　開口部円形、126cm×118cm、深さ 26cm。

＜覆土・堆積状況＞　１層黒色シルトはⅡ層起源と考えられ、下部にはⅢ層起源の粘土ブロックを含む。

25号土坑（第35図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞　Ｂ区、Ａ19ネ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部円形、(90)cm×54cm、深さ 32cm。

＜覆土・堆積状況＞　地山起源の褐色砂ブロックを含むⅠ層起源の２層黒褐色シルトの上にⅡ層起源の黒色シルトが堆積したものと考えられる。

26号土坑（第35図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞　Ｄ区、Ｇ15セ、Ⅲ層上面で明瞭な円形の黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　開口部円形、108cm×96cm、深さ 34cm。

＜覆土・堆積状況＞　地山起源の２層黄橙色粘土（黒色土がひび割れ状に貫入）の上に１層黒褐色土が堆積したものと考えられる。また、底面中央部に長径36cm×短径36cm×深さ18cmの副穴がある。

＜用　途＞　不明である。底部が円形かつ平坦で中央にある副穴（埋土は地山起源の黄橙色粘土塊）の形状がＣ区東端の 40号陥し穴（円筒形）の底部の逆茂木痕と思われる副穴に似ていることから、この土坑が元は円筒形陥し穴であった可能性もある。しかし、４ｍほど東側の 40号陥し穴と比べ底部の標高が約 70cm浅くなっており、それぞれの掘削された時期や地形の起伏の関係なども不明なため断定は出来ない。

27号土坑（第35図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞　Ｄ区、Ｇ14テ～Ｇ14ト、調査区境に接するのⅢ層上面で明瞭な半楕円形の黒色シルトのプランとして検出された。

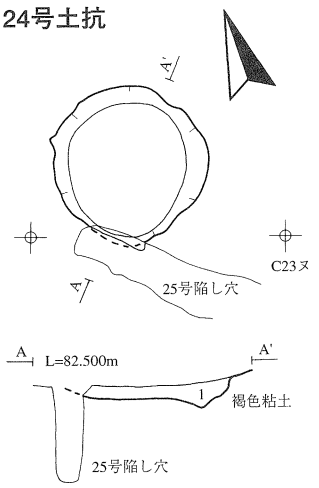
＜重複・新旧関係＞　断面からは溝跡との重複の可能性が窺われるが、調査区外のため詳細は不明である。

＜平面形・規模＞　開口部半楕円形、(78)cm×88cm×深さ 24cm。

＜覆土・堆積状況＞　地山起源の２層黄橙色粘土の堆積の上に１層黒褐色土が堆積したものと考えられる。

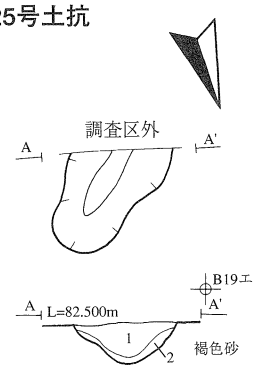
＜用　途＞　不明である。調査区境の壁に見られる断面からは、南に延びる溝の開始地点であるかのようにも見える。また、形状的には26号土坑と同様な特徴があるため円筒形陥し穴であった可能性も考えられるが、いずれについても断定は出来ない。

24号土抗



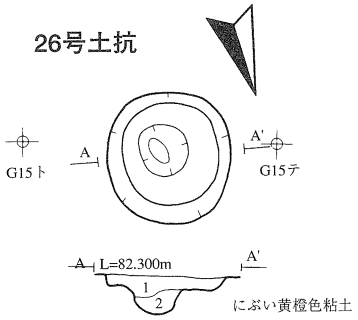
24号土抗
1　7.5YR2/1　黒色　シルト　均質　下部褐色粘土ブロック５％

25号土抗



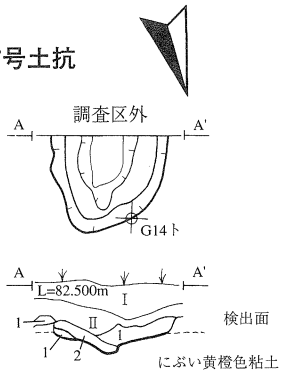
25号土抗
1　10YR2/1　黒色　シルト
2　10YR2/2　黒褐色土　しまり弱い　地山砂ブロック10%

26号土抗



26号土抗
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　均質　地山粘土ブロック混入
2　10YR6/4　にぶい黄橙色　粘土　１層の黒褐色シルトが割れ目状に侵入

27号土抗



27号土抗
Ⅰ　10YR2/1　黒色　シルト　粘性ややあり　しまりなし
Ⅱ　7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性弱い　しまり弱い
1　10YR2/1　黒褐色　シルト
2　10YR6/4　にぶい黄橙色　粘土　黒褐色シルトが副穴部の割れ目に入り込む

0　1:60　2m

第35図　土抗（４）

7．その他の柱穴状小土坑

調査区内には、前述した遺構以外にもＡ区東側およびＢ区東側、さらにＤ区西側などに多数の柱穴状小土坑が検出されたが、埋土の状況や規模などから用途不明のものが多く、ほとんどが近代以降の耕作作業による撹乱である可能性が強いと判断した。したがって、遺構は位置図には検出した全ての柱穴状小土坑の配置も示したが、各々の詳細は第３表に示し、ここでは唯一遺物が出土した85号柱穴状小土坑についてだけ特に詳しく述べることにする。

85号柱穴状小土坑（第３表、写真図版28）

＜位置・検出状況＞　Ｃ区、Ｇ23サ、Ⅲ層上面で明瞭な黒色シルトのプランとして検出された。

＜重複・新旧関係＞　重複する遺構は検出されなかった。

＜平面形・規模＞　円形、22cm×20cm、深さ 18.5cm。

＜覆土・堆積状況＞　黒褐色シルト（Ⅱ層相当）のみの均質な埋土で、検出面からすぐ下の上半部に土師器の破片が４個埋まり、埋土を挟んで一段下にさらに５個埋まっていた。完形１個体分に近いが、わずかに口縁部の破片が１～２個相当見つからなかった。検出面より上はすぐにＩ層（耕作土）になるため、後世の耕作によるＩ層形成時点で失われたてしまった可能性も考えられる。また、遺物の覆土状況は、破片を数個ずつ小分けにし、ひとまとまりの破片を穴に入れてそれらが隠れる程度に土を被せ、次にまたひとまとまりの破片を入れ土を被せるという手順で埋めたものと推定され、下段の破片を取り上げた後にはすぐに土坑底面が現れた。

＜出土遺物＞　ほぼ完形１個体分になる土師器坏の破片（第36図・写真図版30：21）が出土した。胎土や形状の特徴から、北上川沿いに分布する限られた遺跡から出土した土器群と同様の特殊なタイプの赤焼き土器に属するものであると考えられる。時期は11世紀中期～末期と考えられる。

＜時　期＞　出土した土師器の特徴から、11世紀中期～末期の遺構と考えられる。

＜用　途＞　形状規模から見て小規模な柱穴の一種と考えられる。また、遺物が埋まっていた状態から見て、穴を掘った直後に完形土器１個分の破片をある種の形式に則りながら入れて埋め戻したものと考えられる。出土した遺物そのものが特殊なタイプの坏であり、また、出土状態も特殊であることから、単に柱穴に土器片を廃棄しただけとは考えられない。本遺構が検出された付近にかつて存在した何らかの遺構の廃絶などに際して儀礼的な行為が執り行われた可能性が考えられる。

第３表　柱穴状小土抗一覧表（1）

掲載番号	仮番号	検出位置のグリッド名	開口部径（cm）		検出面からの最大の深さ（cm）	平面形	出土遺物							その他・備考
			長径	短径			土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	
1	AP-01	Ｂ１カ	26	34	13.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
2	AP-02	Ｂ１ク～Ｂ１ケ	40	38	18.5	方形								現代の農業施設支柱跡か
3	AP-03	Ｂ１ケ～Ｂ１コ	78	42	18.0	楕円形								
4	AP-04	Ｂ１コ～Ｂ１ソ	64	44	16.0	方形								
5	AP-05	Ａ１ヌ	40	38	14.5	方形								
6	AP-06	Ｂ１コ～Ｂ２カ	46	44	29.5	方形								現代の農業施設支柱跡か
7	AP-07	Ｂ１オ～Ｂ２ア	58	44	12.5	円形								
8	AP-08	Ｂ２ク	－	－	－	楕円形								６号土抗の埋土として掘削
9	AP-09	Ｂ２ウ～Ｂ２エ	42	28	22.5	楕円形								
10	AP-10	Ａ１ノ	42	34	9.5	方形								
11	AP-11	Ｂ３カ	42	42	12.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
12	AP-12	Ｂ３カ	36	36	12.5	円形								
13	AP-13	Ｂ３イ～Ｂ３カ	52	46	29.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
14	AP-14	Ｂ３ヌ	70	54	24.5	楕円形								
15	AP-15	Ｂ３エ～Ｂ３ケ	42	42	20.5	方形								現代の農業施設支柱跡か
16	AP-16	Ｂ４ア～Ｂ４カ	48	42	12.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
17	AP-17	Ｂ４イ～Ｂ４キ	28	22	20.5	楕円形								
18	AP-18	Ａ３ノ	44	44	17.0	円形								
19	AP-19	Ａ３ト～Ａ４タ	54	36	22.5	楕円形								
20	AP-20	Ａ３ノ～Ａ４ナ	54	36	28.0	楕円形								
21	AP-21	Ａ４タ	38	36	17.5	円形								
22	AP-22	Ａ４ナ	56	20	20.5	楕円形								
23	AP-23	Ａ４ナ	38	18	22.5	楕円形								
24	AP-24	Ａ４ナ	26	22	12.0	楕円形								
25	AP-25	Ｂ４ア～Ｂ４イ	58	54	37.0	楕円形								
26	AP-26	Ａ４チ	22	18	12.0	楕円形								
27	AP-27	Ａ４ニ	24	16	18.0	楕円形								
28	AP-28	Ａ４ニ	16	16	12.0	円形								
29	AP-29	Ｂ４ウ	38	38	2.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
30	AP-30	Ａ５タ～Ｂ５ア	72	60	10.5	楕円形								
31	AP-31	Ａ５タ～Ａ５ナ	60	56	14.0	方形								
32	AP-32	Ａ５ニ	46	40	17.5	不定型								
33	AP-33	Ａ５ニ	52	38	10.0	楕円形								
34	AP-34	Ａ５ニ	40	40	23.0	円形								
35	AP-35	Ａ５ニ～Ａ５ヌ	58	56	14.5	円形								
36	AP-37	Ｂ５イ	56	48	15.0	不定形								
37	AP-38	Ｂ５エ	36	28	12.5	楕円形								
38	AP-39	Ａ５ヌ～Ｂ５ウ	36	28	14.0	楕円形								
39	AP-40	Ａ５ヌ～Ａ５ネ	52	38	24.0	楕円形								
40	AP-41	Ａ５ツ	26	24	13.5	円形								

※　（数値）は、調査区境に接するなどしていて完全には測定できなかったもの。
※　出土遺物欄の○印は、掲載遺物が出土している場合。
※　平面形は、長径と短径の差が２センチ以内の場合を円形として処理した。

第４表　柱穴状小土抗一覧表（2）

掲載番号	仮番号	検出位置のグリッド名	開口部径（cm）		検出面からの最大の深さ（cm）	平面形	出土遺物							その他・備考
			長径	短径			土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	
41	AP-42	Ａ５ツ	32	26	17.5	楕円形								
42	AP-43	Ａ５ツ～Ａ５テ	42	34	18.0	楕円形								
43	AP-44	Ａ５ツ～Ａ５テ	44	44	20.0	円形								
44	AP-45	Ａ５テ	32	28	13.0	楕円形								
45	AP-46	Ｂ５エ	72	68	33.5	楕円形								
46	AP-47	Ａ５ノ	26	26	6.0	円形								
47	AP-48	Ｂ５ナ	26	22	18.5	楕円形								
48	AP-49	Ｂ６エ	52	46	20.0	楕円形								
49	AP-50	Ｂ６コ	50	42	13.0	楕円形								
50	AP-51	Ａ６ト～Ｂ６ノ	40	38	12.5	円形								
51	AP-52	Ｂ７ア	38	30	15.5	楕円形								
52	AP-53	Ａ７ヌ	34	32	9.5	円形								
53	AP-56	Ａ５ヌ～Ｂ５ウ	68	30	16.5	不定形								
54	BP-01	Ｂ21ツ～Ｂ21ヌ	48	40	41.0	楕円形								１号掘立柱建物跡Ｐ６
55	BP-02	Ａ19テ～Ａ20タ	46	36	25.0	楕円形								１号掘立柱建物跡Ｐ５
56	BP-03	Ａ19コ～Ａ20カ	56	52	14.5	長方形								１号掘立柱建物跡Ｐ２
57	BP-04	Ａ21ク	46	42	29.3	方形								１号掘立柱建物跡Ｐ３
58	BP-05	Ｂ21ウ	46	42	17.3	方形								１号掘立柱建物跡Ｐ９
59	BP-06	Ｂ19オ～Ｂ20ア	66	50	22.0	楕円形								１号掘立柱建物跡Ｐ８
60	BP-07	Ａ19ス～Ａ19ツ	54	26	61.0	楕円形								１号掘立柱建物跡Ｐ４
61	BP-08	Ａ19ク～Ａ19ケ	62	(22)	49.0	楕円形								１号掘立柱建物跡Ｐ１
62	BP-09	Ａ19イ～Ｂ19ウ	40	34	21.0	方形								１号掘立柱建物跡Ｐ７
63	BP-10	Ａ19サ～Ａ19チ	44	36	49.0	方形								１号掘立柱建物跡Ｐ10
64	BP-11	Ａ12ノ	36	30	10.5	方形								現代の農業施設支柱跡か
65	BP-12	Ａ12ナ～Ｂ13ア	40	36	15.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
66	BP-13	Ａ12ニ～Ｂ12ヌ	32	30	12.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
67	BP-14	Ａ12ネ～Ｂ13エ	40	34	14.0	方形								現代の農業施設支柱跡か
68	CP-01	Ｃ23イ	20	22	9.0	円形								１号柱穴列Ｐ１
69	CP-03	Ｃ23キ	28	28	15.0	円形								１号柱穴列Ｐ２
70	CP-04	Ｃ23カ	28	26	8.5	円形								２号柱穴列Ｐ１
71	CP-05	Ｃ23シ	(24)	24	10.5	(円形)								１号柱穴列Ｐ３
72	CP-06	Ｃ23サ	30	28	16.0	円形								２号柱穴列Ｐ２
73	CP-07	Ｃ23チ	26	22	13.0	楕円形								１号柱穴列Ｐ４
74	CP-08	Ｃ23チ～Ｃ23タ	30	26	9.5	楕円形								２号柱穴列Ｐ３
75	CP-09	Ｃ23チ	28	26	10.0	円形								１号柱穴列Ｐ５
76	CP-10	Ｃ23タ	28	(18)	9.5	(円形)								２号柱穴列Ｐ４
77	CP-11	Ｃ23ニ	26	20	7.5	楕円形								１号柱穴列Ｐ６
78	CP-12	Ｃ23ナ	22	20	20.0	円形								２号柱穴列Ｐ５
79	CP-13	Ｄ23イ	22	22	8.5	円形								１号柱穴列Ｐ７
80	CP-14	Ｄ23ア	(18)	28	10.0	(円形)								２号柱穴列Ｐ６

※　（数値）は、調査区境に接するなどしていて完全には測定できなかったもの。
※　出土遺物欄の○印は、掲載遺物が出土している場合。
※　平面形は、長径と短径の差が２センチ以内の場合を円形として処理した。

第５表　柱穴状小土抗一覧表（3）

掲載番号	仮番号	検出位置のグリッド名	開口部径（cm）		検出面からの最大の深さ（cm）	平面形	出土遺物							その他・備考
			長径	短径			土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	
81	CP-15	Ｄ23キ	30	22	9.5	楕円形								１号柱穴列Ｐ８
82	CP-16	Ｅ23キ～Ｅ23ク	30	24	12.5	楕円形								
83	CP-17	Ｆ23ア～Ｆ23ア	22	18	16.5	楕円形								
84	CP-18	Ｇ23シ	20	18	18.5	円形								１号柱穴列のほぼ延長線上
85	CP-19	Ｇ23サ	22	20	18.5	円形	○							
86	DP-02	Ｇ17ス	16	14	9.5	円形								
87	DP-03	Ｇ17イ～ウ	32	22	15.5	楕円形								
88	DP-04	Ｇ17イ	32	24	22.0	楕円形								
89	DP-05	Ｇ16オ	14	12	16.5	円形								
90	DP-06	Ｇ16ソ	10	10	12.0	円形								
91	DP-08	Ｇ16ソ	20	20	19.5	円形								
92	DP-10	Ｇ16サ～Ｇ16セ	18	14	36.0	楕円形								
93	DP-11	Ｇ16エ	18	14	20.5	楕円形								
94	DP-12	Ｇ16エ	16	14	21.0	円形								
95	DP-13	Ｇ16エ	18	16	22.0	円形								
96	DP-14	Ｇ16エ	16	14	26.5	円形								
97	DP-15	Ｇ16ウ	20	18	20.0	円形								
98	DP-18	Ｇ16ス	26	22	18.5	楕円形								
99	DP-19	Ｇ16セ	18	21	26.0	楕円形								
100	DP-21	Ｇ16エ～Ｇ16セ	16	10	21.0	楕円形								
101	DP-22	Ｇ16ス	14	14	19.0	円形								
102	DP-23	Ｇ16ク～Ｇ16ス	18	16	19.5	円形								
103	DP-26	Ｇ15ソ	16	16	18.5	円形								
104	DP-27	Ｇ15ソ	22	20	47.0	円形								
105	DP-28	Ｇ16タ	34	16	25.5	楕円形								３号柱穴列Ｐ１
106	DP-29	Ｇ15コ	34	36	31.5	円形								３号柱穴列Ｐ２
107	DP-30	Ｇ15コ～Ｇ15ケ	38	36	57.0	円形								３号柱穴列Ｐ３
108	DP-40	Ｇ15キ	30	30	30.5	円形								３号柱穴列Ｐ４
109	DP-41	Ｇ15カ	28	26	16.5	円形								３号柱穴列Ｐ５
110	DP-42	Ｇ14ケ	26	26	20.0	円形								３号柱穴列Ｐ６
111	DP-43	Ｇ14ク	32	28	29.5	楕円形								３号柱穴列Ｐ７
112	DP-44	Ｇ14キ	26	24	18.0	円形								
113	DP-45	Ｇ14カ～Ｇ14キ	26	22	16.5	円形								
114	DP-46	Ｇ15サ	22	18	21.5	楕円形								
115	DP-47	Ｇ15サ	24	24	23.5	円形								
116	DP-48	Ｇ15サ	26	24	14.0	円形								
117	DP-53	Ｇ14サ～Ｇ14シ	26	24	20.0	円形								
118	DP-54	Ｇ14タ～Ｇ14チ	28	22	15.0	楕円形								
119	DP-55	Ｇ14タ	16	16	11.0	円形								
120	DP-56	Ｇ14サ	18	14	12.5	楕円形								

※　（数値）は、調査区境に接するなどしていて完全には測定できなかったもの。
※　出土遺物欄の○印は、掲載遺物が出土している場合。
※　平面形は、長径と短径の差が２センチ以内の場合を円形として処理した。

第６表　柱穴状小土抗一覧表（4）

掲載番号	仮番号	検出位置のグリッド名	開口部径（cm）		検出面からの最大の深さ（cm）	平面形	出土遺物							その他・備考
			長径	短径			土師器	須恵器	縄文・弥生土器	陶磁器	石器・石製品	鉄製品	土製品	
121	DP-58	Ｇ13ソ	28	22	13.5	楕円形								
122	DP-60	Ｇ13ケ～Ｇ13セ	28	26	11.5	円形								
123	DP-61	Ｇ13ト	42	(18)	20.0	(円形)								
124	DP-62	Ｆ12ナ	50	48	24.0	円形								２号掘立柱建物跡Ｐ１
125	DP-63	Ｇ11オ	44	44	40.0	円形								２号掘立柱建物跡Ｐ２
126	DP-64	Ｇ11エ～Ｇ11オ	58	(28)	44.0	(円形)								２号掘立柱建物跡Ｐ３
127	DP-65	Ｆ12タ	60	46	38.0	楕円形								２号掘立柱建物跡Ｐ４
128	DP-66	Ｆ11ノ	46	46	42.0	円形								２号掘立柱建物跡Ｐ５
129	DP-67	Ｆ11ネ～Ｆ11セ	46	(18)	46.0	(円形)								２号掘立柱建物跡Ｐ６
130	DP-68	Ｆ11ソ～Ｆ12サ	56	46	38.0	楕円形								２号掘立柱建物跡Ｐ７
131	DP-69	Ｆ11テ～Ｆ11ト	40	40	52.0	円形								２号掘立柱建物跡Ｐ８
132	DP-71	Ｇ12ア	48	46	30.0	円形								２号掘立柱建物跡Ｐ９
133	DP-72	Ｇ11オ	44	38	16.0	楕円形								２号掘立柱建物跡Ｐ10
134	DP-73	Ｇ11エ～Ｇ11ケ	54	(28)	34.0	(円形)			○					２号掘立柱建物跡Ｐ11
135	DP-75	Ｆ11ノ	34	24	12.5	楕円形								
136	DP-76	Ｆ11コ～Ｆ12カ	38	38	44.0	円形								２号掘立柱建物跡Ｐ12
137	DP-77	Ｆ11ケ～Ｆ11セ	56	42	28.0	楕円形								２号掘立柱建物跡Ｐ13
138	DP-79	Ｆ11ソ	34	28	11.5	楕円形								
139	DP-80	Ｆ11ケ～Ｆ11ソ	32	－	28.0	(円形)								同Ｐ８の柱を抜く時の掘削跡か
140	DP-81	Ｆ11セ～Ｆ11ソ	40	－	52.0	(円形)								同Ｐ13の柱を抜く時の掘削跡か
141	DP-82	Ｆ11コ	40	30	12.0	楕円形								
142	DP-83	Ｆ11コ	30	26	15.0	楕円形								

※　（数値）は、調査区境に接するなどしていて完全には測定できなかったもの。
※　出土遺物欄の○印は、掲載遺物が出土している場合。
※　平面形は、長径と短径の差が２センチ以内の場合を円形として処理した。

8．出土遺物

今回の調査では140点の遺物が出土している。ほとんどが単独の細片で、器形は僅かな特徴から推定するのみである。遺構内からの出土は極めて少ない。C区の陥し穴１基、溝１条、及びD区の掘立柱建物跡の柱穴１基からそれぞれ縄文土器破片が１点ずつ出土したほか、C区の陥し穴１基、溝跡２条の埋土から数点の土師器片が出土し、同じくC区の柱穴状小土坑１基からほぼ完形になる土師器坏が１個出土したのみである。また、そのほかの縄文土器片や土師器片の多くは、B区西側の旧河道の埋土（黒色シルト）検出面上で出土し、遺構外遺物として取り上げたものである。

本報告では、遺構外から出土した遺物も含め図化可能な40点を選んだ。縄文土器片は深鉢の体部がと考えられるもの多く、他の部位のものも含めていずれも焼成は良好である。土師器は、坏の底部または口縁部が多く、胎土は緻密であるがやや軟質であり、全体的に１㎜以下の砂粒の混入が目立つのが特徴である。

(1) 遺構内出土遺物

＜縄文土器＞（第36図、第７表、写真図版30）

16：　C23グリッドで25号陥し穴の埋土上部黒色土から出土した。深鉢の体部破片。ＬＲ単節斜め回転で条が縦走する。胎土はやや軟質で後晩期のものとは異なる。縄文中期あたりではないかと考えられる。

17：　F23グリッドで16号溝跡の埋土上部黒色土から出土した。浅鉢の口縁部。表面の摩耗が激しく、文様の判別は難しいが、平行沈線が認められる。縄文中期～後期のものと考えられる。

18：　G11グリッドで132号柱穴状小土坑（２号掘立柱建物跡 **P11**）の埋土上部黒色土から出土した。鉢または深鉢の体部。ＬＲ単節横回転。内面が平滑に調整されているので、手が入る程度の広い口縁部をもつ器形であることが分かる。外面には入組帯状文が施文されている。帯状文の表面は縄文の磨り消しが不十分なので、あまり丁寧な造りとは言えない。縄文後期後葉あたりと考えられる。

＜土師器＞（第36図、第９表、写真図版30）

21：　C区南端の85号柱穴状小土坑から出土している。今回の調査で、唯一意図的に埋められたと特定できる遺物である。ほぼ１個体分に復元された。ロクロ成形。ロクロナデ。底部はロクロ回転糸切り。体部及び口縁部は６～８㎜とやや厚い。胎土は緻密ながらやや軟質で、色調は浅黄橙色～橙色である。底部からの立ち上がり部分には、ロクロ成形後に回転糸切りを実施した際の名残りと思われる低い台状の部分が見られる。体部は内反しながら立ち上がり、口縁部でやや外反気味になる。器面は内外面ともナデ痕がはっきりと残るが比較的滑らかである。この坏の出土遺構から約150m南東に離れた蛇蜒蛆（じゃのめり）遺跡内では岩手県教育委員会が試掘（岩手県教育委員会2003）をしており、直径120㎝の円形の土坑内から同様の特徴をもつ坏を数個体分採取している。さらに、同様な特徴をもつとされる滝沢村大釜館遺跡（北方約33㎞、吉田・井上1994）及び金ヶ崎町西根遺跡（南方約28㎞、岩手県教育委員会1981）出土の坏と比較すると、形状・寸法ともに明確な類似性が認められるが、大釜館遺跡の坏は砂粒の混入が余り目立たず表面がより滑らかでやや黄色味が強いのに対し、本遺跡の坏は直径１㎜以下の細砂を中心として最大３㎜程度の粗い砂の混入が目立ち、やや赤みがある。さらに、西根遺跡の坏では、砂粒がかなり多いため器面もやや粗く、底部の切り離しがロクロ回転糸切りかどうか不鮮明である。赤みもやや強い。

11世代紀中期～末期の遺跡に見られる特殊な土器で、石鳥谷町周辺では初見の貴重な遺物と言える。

23：　16号溝跡で出土した。口径が大きめの甕の口縁部の細片と思われる。ロクロ成形でロクロナデ痕が認められる。弱く外反しながら仕上げられている。

24：　16号溝跡で出土した坏の口縁部である。ロクロ成形で胎土は緻密であるが、細かい砂の混入も目立つ。弱く外反するように仕上げられている。

26：　14号溝跡で出土した坏の底部破片である。ロクロ成形。底部の切り離しは回転糸切りである。底部の径は21とほぼ同じである。糸切り痕はより細かいがやや摩耗している。おそらく法量は21と同程度のものであったと思われる。しかし21に比べ胎土に含まれる砂の量が明らかに少なく、また、体部の厚みも21ほどはない。

27：　16号溝跡で出土した坏の底部である。ロクロ成形。ロクロナデ。底部は回転糸切りと思われるが、摩耗しており判別は難しい。底部外側の立ち上がり部分にはU字型にナデ返したような痕が見られる。

28：　16号溝跡で出土した坏の底部である。ロクロ成形。ロクロナデ。底部は回転糸切り。底部の径は21とほぼ同じで、糸切り痕の状態も似ており、同程度に摩耗している。底部から推定される法量や胎土に含まれる砂の程度も21と似ている。さらに、体部の厚みや立ち上がり部分の断面から見て、やはり21と同じように厚めであると考えられる。おそらく、21と同様の赤焼き土器であろう。

29：　16号溝跡で出土した高台付坏の底部。高台は接合部から剥落している。ロクロ成形。ロクロナデ。底面に高台接合後のロクロナデ痕が残る。

(2) 遺構外出土遺物

＜縄文土器＞（第36図、第７表、写真図版30）

1：　Ａ４グリッドで出土した砲弾型深鉢の口縁部破片。ＲＬ単節横回転。縄文晩期前半。

2：　Ａ４グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＲＬ単節横回転。胎土に砂粒がやや多いが焼成は良好。縄文後期～晩期前半。

3：　Ａ４グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＲＬ単節横回転。縄文後期～晩期前半。

4：　Ａ４グリッドで出土した深鉢の体部破片。無文だが焼成や胎土の状況から縄文土器と考えられる。時期不明。

5：　Ａ10グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＬＲ・ＲＬ非結束羽状縄文。後期後半～晩期前半。

6：　Ａ14グリッドで出土した深鉢の体部破片。大洞Ｃ２式前後のものと見られ、複数の平行沈線が施文されている。口縁部は内外面を両側から指でつまんで成形した小波状を呈する。内面の一部にわずかながら指紋が残っている。

7：　Ａ15グリッドで出土した深鉢の口縁部破片であるが、口唇部が欠損している。また、６と同様の平行沈線が施文されている。縄文晩期後半。

8：　Ａ15グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＬＲ単節横回転。器面の荒れが進んでいる。時代は不明。

9：　Ａ区排土置き場で採取した深鉢口縁部の突起頂部破片。幅２㎝程度で外面側に折り返し、肥厚させている。折り返しの状態から見て縄文中期中葉の可能性がある。

10：　Ａ22グリッドで出土した深鉢または鉢の口縁部破片。２段以上に並ぶ三角形の刺突列が施文されている。薄く、胎土が粗い。文様から縄文中期後葉の可能性あり。

11：　Ｂ11グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＬＲ単節横回転。縄文後晩期と考えられる。次の12と同じ

グリッドで出土し文様や胎土の状態が似ているので、同一個体の破片かもしれない。

12：　B20グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＬＲ単節横回転。縄文後晩期と考えられる。前述の11と同じグリッドで出土し文様や胎土の状態が似ているので、同一個体かもしれない。

13：　B20グリッドで出土した鉢型土器の口縁部破片。端部に沈線がわずかに残る。ＬＲ単節横回転。薄手で胎土が緻密である。内面に磨き痕が認められることから、口縁部は手が入る程度の口径であろう。

14：　B21グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＲＬ単節横回転。縄文後晩期。次の15と同じグリッドで出土し、文様や胎土の状態が似ているので同一個体の可能性がある。

15：　B21グリッドで出土した深鉢の体部破片。ＲＬ単節横回転。縄文後晩期。前述の14と同じグリッドで出土し、文様や胎土の状態が似ているので同一個体の可能性がある。

19：　G12グリッドで出土した深鉢の体部。ＬＲ横回転。縄文後晩期。

20：　G17グリッドで出土した深鉢の体部破片と思われる。細片のため判断がつきにくい。半円形の断面をもつ平行沈線が施されている。縄文中期～後期と考えられる。

＜土師器＞（第36図、第９表、写真図版30）

22：　G13グリッドで出土した坏の体部～口縁部の破片。ロクロ成形。21とは異なり口縁部が薄い。

25：　A22グリッドで出土した坏の体部～口縁部の破片。内黒土師器。11世紀後半以前のものであろう。

30：　B20グリッドから出土した高台付坏の底部。高台は接合部から剥落。ロクロ成形。ロクロナデ。

31：　A22グリッドで出土した台付土師器のハの字状の台部。機種は不明だが、余り大きくない。胎土は緻密であるが、やや軟質である。

32：　G12グリッドから出土した。形態から見て「ロクロかわらけ」と呼ばれるものである。土師器とは別の器種とする考え方もある。本遺跡で出土した他の土師器より濃い橙色を呈し、胎土はより緻密で硬質である。底部はロクロ回転糸切りであるが、糸切りを一度中断して切る位置を下にずらした痕跡が残っており、切断後は無調整である。体部外側は、一段のロクロナデによって斜めに直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に達するが、一部でナデ痕より上にはみ出た部分は、やや内反気味に口縁部に達している。内側は、全面ロクロナデで処理され、内反ぎみに立ち上がるが、口縁部においてはやや外反気味になっており、全体的には体部が外反しているように見える。

＜陶磁器＞（第36図、第８表、写真図版30）

33：　A20グリッドⅡ層底部で出土した小碗の口縁部破片。福島県大堀相馬産の陶器。18世紀代である。

34：　A20グリッドⅡ層底部で出土した在地産の陶器。鉢の底部破片（台付）。19世紀代である。

35：　B区Ⅰ層（表土）で出土した肥前産磁器。染め付け碗の体部破片。19世紀前半のものである。

＜剥　片＞（第36図、第10表、写真図版30）

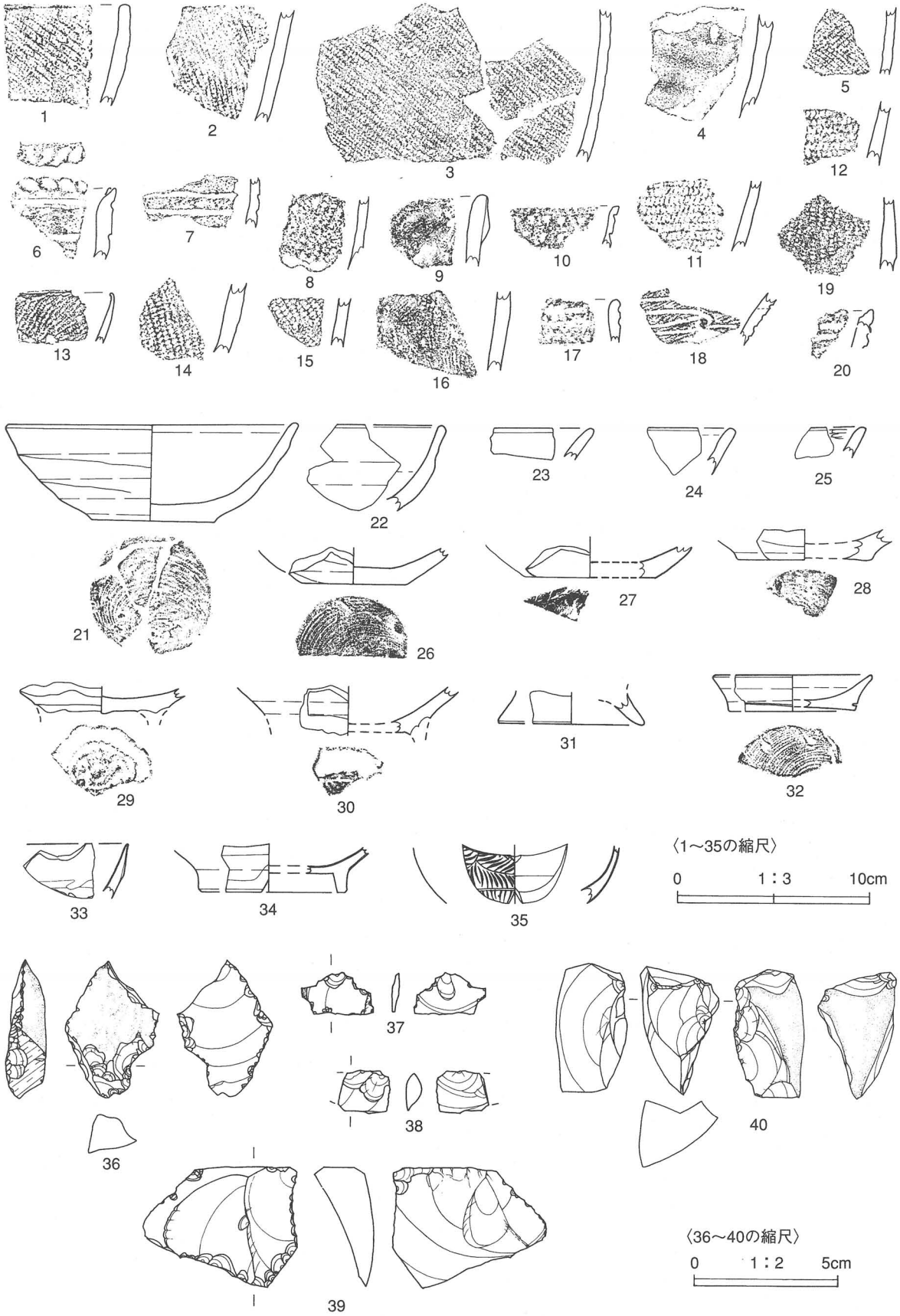
36：　A15グリッドで出土した頁岩、北上山地産。縁辺と折断面に微細な剥離痕がある。

37：　B23グリッドで出土した頁岩、北上山地産。縁辺と折断面に微細な剥離痕がある。

38：　Ａ４グリッドで出土した頁岩、奥羽山脈産。未使用の剥片か。

39：　G17グリッドで出土した頁岩、北上山地産。不定型石器。末端側縁辺に再調整を施してある。

40：　D23グリッドで出土した頁岩、奥羽山脈産。不定型石器。打面側縁辺に再調整が施してある。



第36図　出土遺物

第７表　出土遺物観察表（1）［縄文土器］

掲載番号	仮番号	出土位置（遺構名）	層位	器種	部位	文様・特徴	地紋	内面調整	胎土	備考
1	2	A4	Ⅱ層	深鉢	口縁部		RL単節横回転			晩期前半。
2	1	A4	Ⅰ層下部	深鉢	体部		RL単節横回転		やや砂粒多いが焼成良好。	後期後半～晩期前半。
3	4	A4	Ⅱ層上部	深鉢	体部		RL単節横回転			後期後半～晩期前半。
4	3	A4	Ⅱ層	深鉢	体部		無文			焼成と胎土の状況から、縄文土器片と判断した。詳細な時期は不明。
5	6	A10	Ⅰ層下部	深鉢	体部	非結束羽状縄文	LR･RL単節横回転			後期後半～晩期前半。
6	8	A14	Ⅲ層上面	深鉢	口縁部	大洞C2式前後。複数の平行沈線。	不明			晩期後半。小波状部分の裏に指紋が残る。内外面を指でつまんで成形したと考える。
7	9	A15	Ⅱ層	深鉢	口縁部		LR単節横回転			晩期後半。 口唇部が欠損。
8	10	A15	Ⅱ層	深鉢	体部		LR単節横回転			器面の荒れが進んでいる。 時期は不明。
9	14	A区	不明	深鉢	口縁部		不明			中期中葉。口縁部の突起頂部破片。外側へ折り返し肥厚させている。
10	17	A22	Ⅱ層	深鉢	口縁部	三角形の刺突列が二段以上並ぶ。	不明		薄く粗い。	中期後葉。
11	20	B11	Ⅱ層	深鉢	体部		LR単節横回転			後晩期。 12と同一個体の可能性。
12	21	B20	Ⅱ層	深鉢	体部		LR単節横回転			後晩期。 11と同一個体の可能性。
13	23	B21	Ⅱ層	深鉢	体部		LR単節横回転	磨き痕	薄く緻密。	時代不明。
14	24	B21	Ⅱ層	深鉢	体部		RL横回転			後晩期。 25と同一個体の可能性。
15	25	B21	Ⅱ層	深鉢	体部		RL横回転			後晩期。 24と同一個体の可能性。
16	27	C23 (25号陥し穴)	Ⅱ層埋土	深鉢	体部	条が縦走する。	LR単節斜め回転		やや軟質。	後晩期のものとは異質である。 縄文中期。
17	34	F23 (16号溝跡)	Ⅱ層埋土	浅鉢	口縁部	平行沈線が認められるが文様は不明。	LR単節横回転		粗砂多い。 やや軟質。	縄文中期～後期。
18	40	G11 (P134)	Ⅱ層埋土	深鉢	体部	入組帯状文	LR単節横回転			帯状文の縄文の磨り消しが不十分なので丁寧な作りではない。縄文後期後葉。
19	42	G12	Ⅱ層	深鉢	体部		LR単節横回転			後晩期。
20	44	G17	Ⅰ層	深鉢	体部	断面が半円形の平行沈線を認める。	LR単節横回転			中期～後期のものと思われるが、細片のため判断が難しい。

第８表　出土遺物観察表（2）［陶磁器］

掲載番号	仮番号	出土位置（遺構名）	層位	器種	器種	部位	法量（cm）			制作地	時代	備考
							口径	底径	器高			
33	12	A20	Ⅱ層	陶器	小皿	口縁部	－	－	－	福島県大堀相馬	18世紀	
34	11	A20	Ⅱ層	陶器	鉢	底部	－	－	－	在地産	19世紀	
35	26	B区	Ⅰ層	磁器	碗	胴部	－	－	－	肥前	19世紀前半	

第９表　出土遺物観察表（3）［土師器］

掲載番号	仮番号	出土位置（遺構名）	層位	器種	部位	法量（cm）			調整技法	焼成	胎土	色調	備考
						口径	底径	器高					
21	45	G23 (P85)	Ⅱ層	坏	底部～口縁部	15.3	6.2	5.2	ロクロナデ 回転糸切り	良好	ややしまりあり。1mm以下を中心に最大3mmの砂粒混入	浅黄橙色～橙色	体部がやや厚い。赤焼き。
22	43	G13	Ⅱ層	坏	口縁部				ロクロナデ	良好	ややしまりあり。1mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色～赤橙色	赤焼き。
23	31	F23 (16号溝跡)	Ⅱ層	甕	口縁部				ロクロナデ	良好	ややしまりあり。1mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色	赤焼き。
24	30	F23 (16号溝跡)	Ⅱ層	坏	口縁部				ロクロナデ	良好	ややしまりあり。2mm以下の砂粒の混入が多く見られる。	橙色	赤焼き。
25	16	A22	Ⅱ層	坏	口縁部				ロクロナデ	良好	ややしまりあり。0.5mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色	赤焼き。 内黒処理。
26	19	B11 (14号溝跡)	Ⅱ層	坏	底部		5.6		ロクロナデ	良好	ややしまりあり。1mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色	赤焼き。
27	39	F23 (16号溝跡)	Ⅱ層	坏	底部		8.4		回転糸切り	良好	ややしまりあり。1mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色	体部の立ち上がりがかなり緩やか。
28	37	F23 (16号溝跡)	Ⅱ層	坏	底部		7.0		ロクロナデ 回転糸切り	良好	ややしまりあり。5mm以下の砂粒の混入が多く見られる。	橙色	赤焼き。
29	47	B20	Ⅱ層	台付坏	底部		6.6		底・体部にロクロナデ	良好	ややしまりあり。1mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色	高台剥落。 赤焼き。
30	38	F23 (16号溝跡)	Ⅱ層	台付坏	底部		5.6		底・体部にロクロナデ	良好	2mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色	高台剥落。 赤焼き。
31	15	A22	Ⅱ層	台付坏	台部		7.6		ロクロナデ	良好	ややしまりあり。1mm以下の砂粒の混入が見られる。	橙色	赤焼き。
32	41	G12	Ⅱ層	かわらけ	底部～口縁部	8.4	6.8	1.9	ロクロナデ 回転糸切り	良好	ややしまりあり。1mm以下の砂粒の混入が見られる。	にぶい赤橙色	回転糸切りを中断した跡が残る。

第10表　出土遺物観察表（4）［石器・石製品］

掲載番号	仮番号	出土位置（遺構名）	層位	器種	石材	産出地	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
36	50	A15	Ⅱ層	剥片石器	頁岩	北上山系	4.7	3.2	1.3		縁辺と折断面に微細な剥離痕がある。
37	51	B23	Ⅰ層	剥片石器	頁岩	北上山系	2.5	1.6	0.2		縁辺と折断面に微細な剥離痕がある。
38	49	A4	Ⅱ層	剥片	頁岩	奥羽山系	1.6	1.4	0.4		
39	53	G17	Ⅰ層	剥片石器	頁岩	北上山系	5.5	4.5	2.0		末端側片縁に再調整が施されている。
40	52	D23	Ⅰ層	剥片石器	頁岩	奥羽山系	4.8	3.0	1.8		打面側片縁に再調整が施されている。

Ⅴ．まとめ

１．遺構について

今回の調査区域は、幅が狭いながらも広範囲に延びていたため、宿遺跡一帯を広く大まかに探ることができたと考えられる。試掘調査の結果から、当初は陥し穴と溝がいくらか出るだけであろうと予測されていたが、結果として陥し穴44基をはじめとして、掘立柱建物跡２棟、溝跡16条、堀跡１条、柱穴列３条、さらに多数の柱穴状小土坑と多彩な遺構が検出された。

陥し穴　溝状・円筒形・長方形の３タイプのものが検出された。いずれも詳しく時代を特定することは出来なかったが、縄文時代のものと考えられる。また、これらの分布状況を見ると、Ａ区西端に２基、Ａ区中央に１基、Ｄ区北西側に２基、同南東側に１基が点在する他は、Ａ区東端からＢ区を通ってＣ区南端へ連なるライン上に密集して存在していることが分かる。さらに、溝状・長方形陥し穴の長軸方向が概ね北西を向いていることも特徴である。こうした状況からは、Ａ区東端からＢ区東端までの調査区を挟む南北両側の未調査区域及びその東側の未調査区域に、同様に北西方向の長軸をもつ溝状・長方形陥し穴が多数存在している可能性が強い。おそらく、この地域は縄文時代の猟場であったものと考えられる。

掘立柱建物跡　２棟とも調査区境に接する位置で検出され、さらに調査区外に広がる可能性もあるため、正確な規模を知ることは出来なかった。また、出土遺物も無く、２棟が建てられていた時期を知るための手がかりが得られなかったため、それぞれの時代や２棟の関連性を見いだすことも出来なかった。

溝跡　概ね、北～北北東の向きの主軸をもつものと東南東の向きの主軸をもつものに２分される。これらの溝の切り合い等の関係は本調査では調査区の形状の関係でほとんど確認できなかった。また、旧河道や堀跡との関係も同様に確認できなかった。土師器片が出土した14号・16号溝跡については、古代末期には存在していたと考えられるが、その他の溝跡は埋土や規模の類似から数本について推察出来る程度である。

堀跡　調査区の形状から検出された範囲は狭いものであったが、岩手県教育委員会による試掘調査の結果や本調査中のボーリング調査によって、東側調査区外に約80m延びた後に南進していくことが確認された。やはり遺物が全く出土しなかったことから、単独で時代を判断することは出来ない。

柱穴列　いずれも検出場所が調査区境であったため、さらに調査区外に延びていたり、あるいは掘立柱建物跡として広がっている可能性も無いわけではない。したがって、掘立柱建物跡と同様に正確な規模を知ることが出来なかった。

柱穴状小土坑　多くはＡ区中央付近、Ｃ区、Ｄ区南から南東側に分布している。しかし、掘立柱建物跡や柱穴列を構成しているものを除くと、それらの時代も性格も全く不明である。唯一ほぼ完形の特殊な坏が出土した85号柱穴状小土坑のみが11世紀代のものと特定できそうな遺構であり、さらに、付近に同時代の遺構が存在する可能性を示しているとも言える。

以上、本調査区で検出された遺構から出土した遺物が少ないために、現段階では詳細な時代の特定が困難なものがほとんどである。しかし、本調査区の西側には八重幡館跡が隣接しており、そことの関連を考慮することは重要である。八重幡館跡には遺構の一つと見られる大規模な空堀跡が現存しており、本遺跡の調査と前後する時期にその北端付近を岩手県教育委員会が試掘調査している。その結果、本遺跡の堀跡と同規模の堀跡が空堀跡の東側を南北に並行して存在することが判明した。今後、さらに調査が進めば、１号堀跡と八重幡館跡の堀跡との関係も明確になるものと考えられる。また、１号堀跡とこれを挟むように検出されて

いる２棟の掘立柱建物跡との関係や、それら２棟の掘立柱跡と八重幡館との関係についても、現段階では裏付けとなるような史料は見つかっていないが、今後の八重幡館跡一帯の調査によって貴重な史料となるような新たな遺物・遺構が発掘されることも期待される。

２．出土遺物について

出土した土器破片の多くが遺構外で採取されたことから、他の場所から土と一緒に運ばれてきた遺物である可能性が強い。しかし、当初の予想に反して、少数ながらも貴重な遺物の出土を見ることができた。

赤焼き土器　Ｃ区南東側の85号柱穴状小土坑から発掘された赤焼土器の坏は、本遺跡でだだ一つ、明らかに人為的に埋められた遺物であると考えられる。器壁が６～８㎜と分厚く、色相は浅黄橙色～橙色を呈し、胎土は緻密であるがやや軟質であり、さらに近くの溝からも、同様の特徴をもつ坏の口縁部・底部、高台付坏の底部・台部が出土している。これらと同様の特徴をもつ土器群は、北上川あるいはその支流に面した場所に立地する滝沢村大釜館遺跡（吉田・井上1994）、岩手町沼崎遺跡（高橋・八木1994）、金ヶ崎町西根遺跡・鳥海Ａ遺跡（岩手県教育委員会1981）においても出土している。そして、各報告においては、いずれも11世紀代中期～末期のものと位置づけられ、ロクロかわらけの初期のものとされている（及川・杉沢 2003）。本遺跡出土の坏は、形状・寸法の面でもそれらの坏と非常によく似ていることから、やはり11世紀代中期～末期のものであると考えられる。本遺跡は、西根遺跡・鳥海Ａ遺跡までおよそ30㎞と近く、また、厨川柵がある盛岡地区と鳥海柵がある胆沢地区の中間付近でもある。さらに、古くから沿岸部へ抜ける起点でもあり、交通の要衝として位置づけられていたのではないかと推定される。したがって、この坏が本遺跡南東側調査区内で出土し、さらに南東に隣接する蛇蜒蛆遺跡でも同様の杯類が出土したことは、この付近一帯に11世紀代の安倍氏と関わりのある遺構・遺物が広く埋蔵されている可能性を強く示唆しているものと考えられる。

ロクロかわらけ　Ｃ区で遺構外として出土したロクロかわらけは、紫波町比爪館遺跡（紫波町教育委員会1983・1986）、北上市国見山廃寺遺跡（本堂1980、北上市教育委員会1981）、白山廃寺跡（本堂 1999）、水沢市玉貫遺跡（岩手県埋蔵文化財センター1981）、平泉町遺跡群（平泉町教育委員会 1992、 羽柴 2001）他において同様のものが出土している。これらの遺跡はいずれも北上川沿いに分布し、当時一帯を支配していた平泉藤原氏の影響下にあったものと考えられている。したがって、これらの遺跡と同時期のものとすれば、本遺跡の近辺に平泉藤原氏とつながりのある遺跡が存在する可能性も考えられる。ちなみに、本遺跡に最も近い遺跡としては、北方およそ12㎞に比爪館遺跡があり、「皿型土器」という器種名で多くのロクロかわらけが発掘されている。それらと実際に見比べる機会は得られなかったので、胎土については不明であるが、その報告書を見る限り、器形、法量、調整及び色調などにかなりの共通点が認められる。したがって、本遺跡近辺には比爪館遺跡と何らかの関わりをもつ施設が存在していた可能性も出てくる。いずれにせよ、かわらけは儀礼や儀式などのための特別な土器（佐々木 1991、松本 1994ほか）とされ、本遺跡の付近でも何らかの儀礼や儀式が行われたことを示しているものと考えられる。

今回の調査では、遺物を伴う遺構こそ少なかったが、11世紀代～13世紀代の古代東北地方の文化と関わりのある特殊な坏やロクロかわらけが出土したことから、今後、周辺地域の新たな調査によって、何らかの新しい展開が見られるものと期待される。

＜参考・引用文献＞

岩手県教育委員会

21．1981　「西根遺跡」、「鳥海Ａ遺跡」、参考資料１「岩手県南部における古代の土器群編年試案」
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ｘ』（岩手県文化財調査報告書　第59集）

22．2003　「宿遺跡・宿館遺跡」「蛇蜒蛆遺跡」ほか
『岩手県内遺跡調査報告書（平成14年度）』（岩手県文化財調査報告書　第116集）

石鳥谷町教育委員会

23．1995　「白幡林遺跡発掘調査報告書」（財）岩手県埋蔵文化財センター

24．瀬川司男　1981　「陥し穴状遺構について」『紀要Ｉ』

25．松本建速　1992　「柳之御所跡におけるかわらけ存在の意味」『紀要XII』

26．松本建速　1993　「柳之御所跡出土のかわらけ編年試案」『紀要XIII』

27．松本建速　1995　「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要XV』

28．杉沢昭太郎　1998　「岩手県における中世後半のかわらけの様相」『紀要XVIII』

岩手考古学会

29．松本建速　1994　「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」『岩手考古学』第６号

30．高橋昭治・八木光則　1994　「岩手町出土の古代末期の土器」『岩手考古学』第６号

31．吉田努・井上雅孝　1994　「滝沢村大釜館遺跡出土の古代末期の土器について」『岩手考古学』第６号

32．羽柴直人　2001　「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第13号

考古学研究会

33．小川貴司　1979　「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻　第１号

雄山閣出版

34．八木光則ほか　1998　「岩手県の９世紀／10世紀／12世紀の土器」『日本土器大辞典』

中央公論美術出版

35．宮本長二郎　1996　『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術出版

東北中世考古学会

36．及川司・杉沢昭太郎　2003　「陸奥のかわらけ－岩手県－」『中世奥羽の土器陶・磁器』

平泉町教育委員会

37．1992　「平泉遺跡群発掘調査報告書」　平泉町文化財調査報告書第29集

北上市立博物館

38．本堂寿一　1999　「北上市内古代寺院跡出土の土器片と鋳物の鉄片について」『北上市立博物館研究報告』第12号

岩手出版

39．佐々木博康　1991　「中尊寺伝三重池後出土の土器」『平泉と東北古代史－第三編 平泉とその文化』

山川出版社

40．細井　計ほか　1999　『岩手県の歴史』

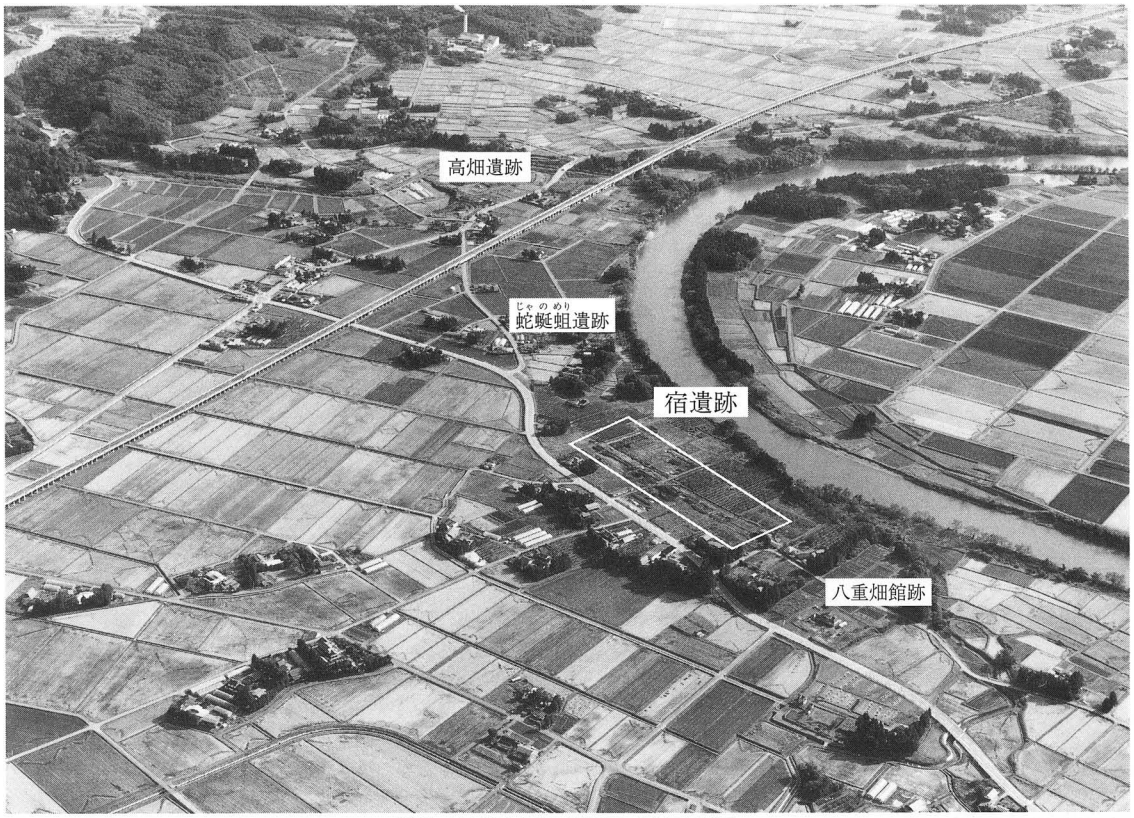
報告書抄録

ふりがな	しゅくいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	宿遺跡発掘調査報告書
副書名	八重畑地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第440集
編著者名	早坂　淳
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　TEL 019（638）－9001・9002
発行年月	西暦2004年1月30日

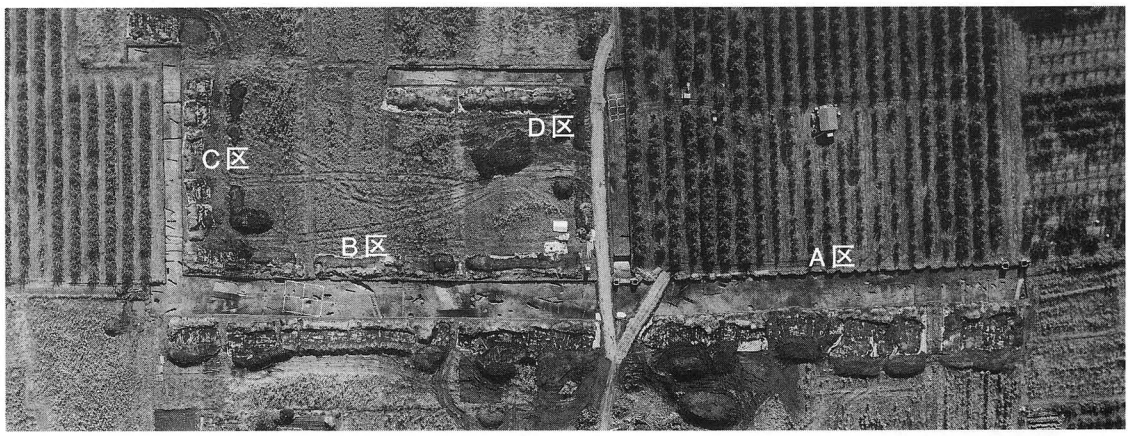
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
しゅくいせき 宿遺跡	いわてけんひえぬき 岩手県稗貫 ぐんいしどりやちょう 郡石鳥谷町 やえはただい 八重畑第26 ちわり 地割ほか	03342	ME17 －0110	39度 25分 59秒	141度 10分 13秒	2002. 8. 9. ～2002. 11.7	3,020m²	八重畑地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿遺跡	猟場跡	縄文時代	陥し穴　44基	縄文後期・晩期土器	
	集落、館	古代以降	掘立柱建物跡2棟 柱穴状小土抗1基	土師器	赤焼土器（坏） （11世紀中期～末期） ロクロかわらけ （12世紀～13世紀）
			溝跡　1条		
		中世以降	堀跡　1条	陶磁器	
		不明	溝跡　15条 土抗　27基		

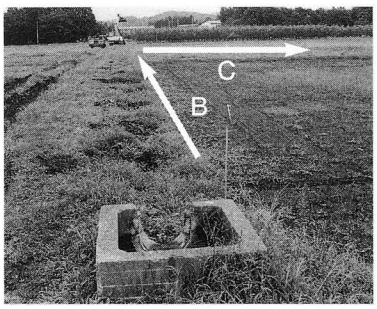
写　真　図　版



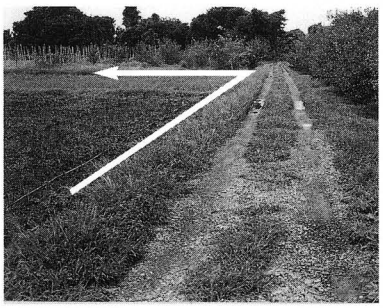
遺跡の位置と周辺地形図（北西から）

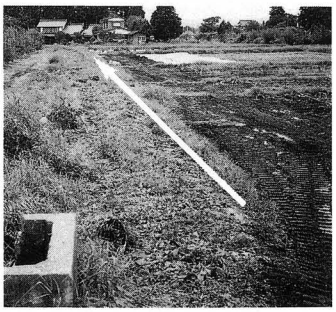


調査区域全景



東側（B区、C区 西から）


南側（D区 北から）

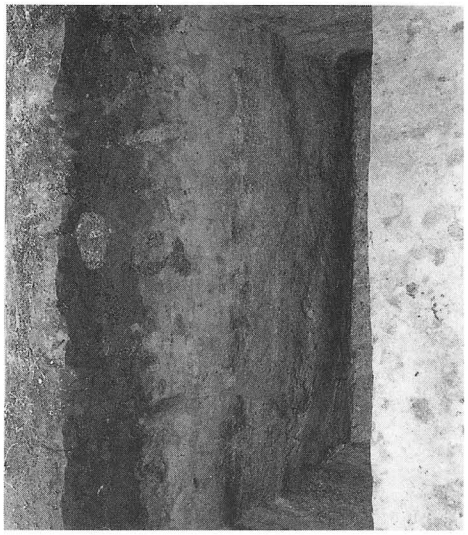

西側（A区 東から）

写真図版１　調査区航空写真等

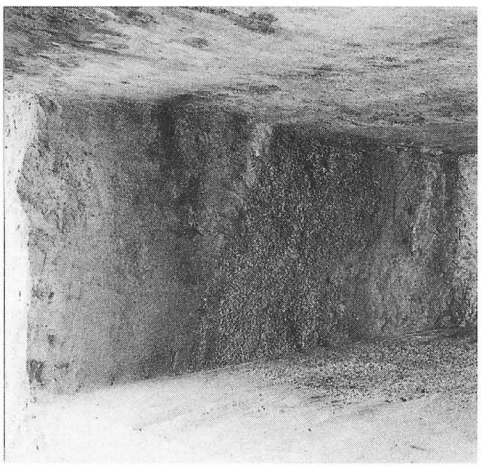
1号深掘りトレンチ（南面）

2号深掘りトレンチ（南面）

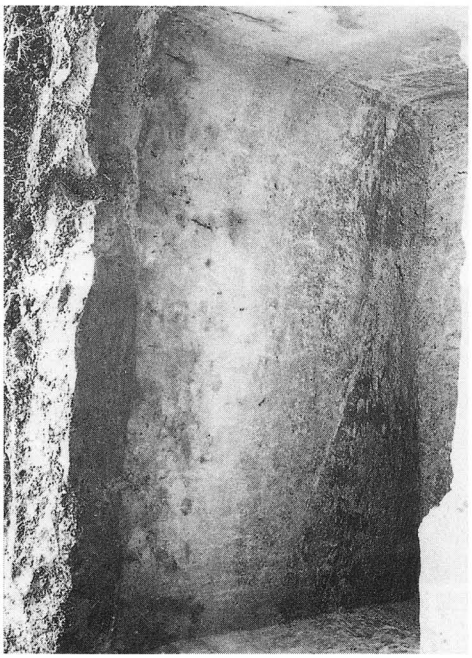
3号深掘りトレンチ（南面）



4号深掘りトレンチ（南面）



4号深掘りトレンチ（東面）



5号深掘りトレンチ（南面）

写真図版２　基本土層（深堀りトレンチ）

作業風景（A区東側）

作業風景（A区西側）

作業風景（C区北側）

作業風景

発掘状況（B区西側）

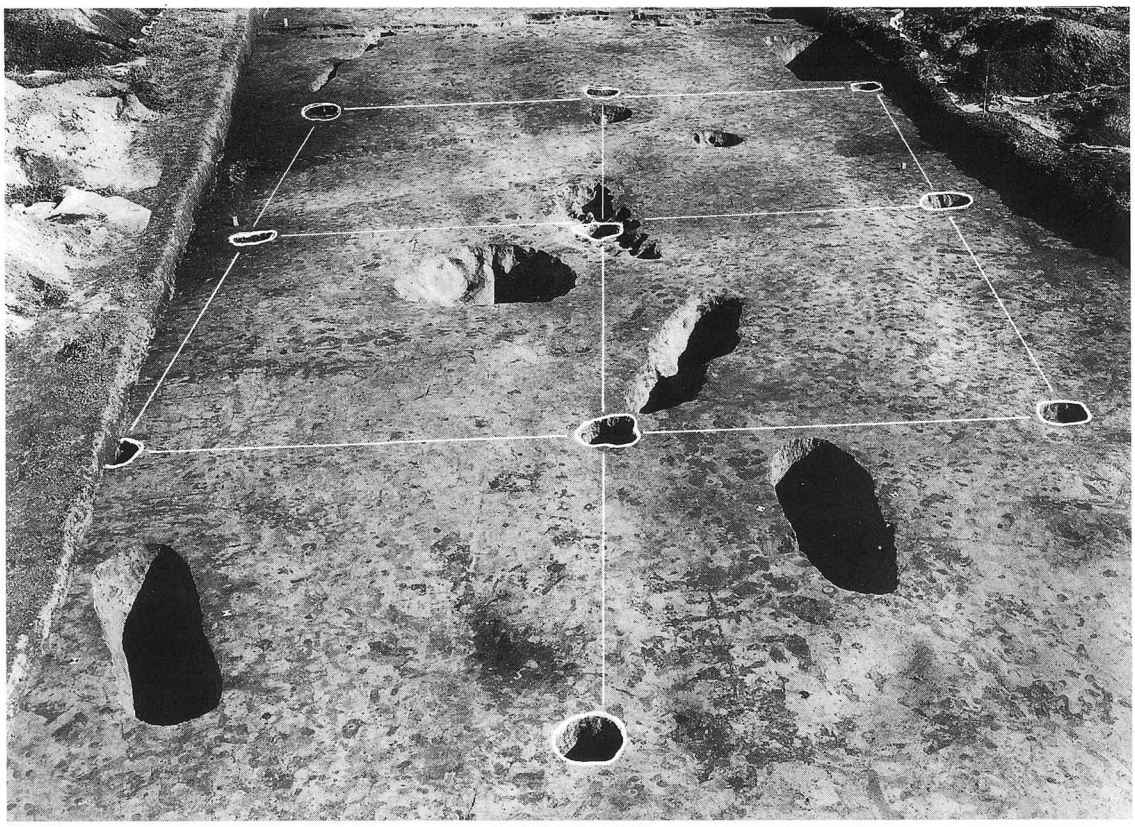
発掘状況（B区西側～A区）

発掘状況（A区東側～西側）

発掘状況（B区東側～C区）

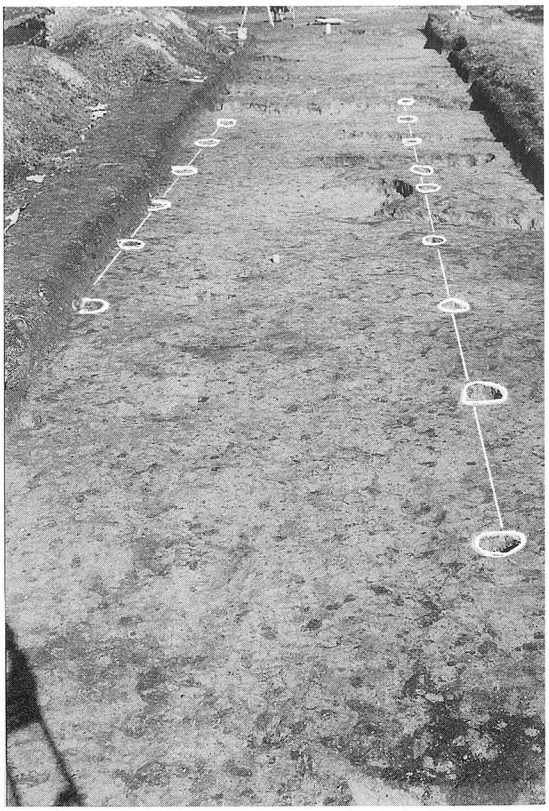
発掘状況（D区南側）

写真図版 3　作業風景、発掘状況



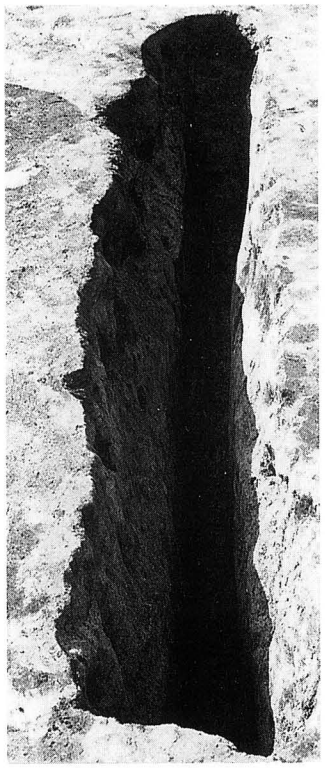
1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡

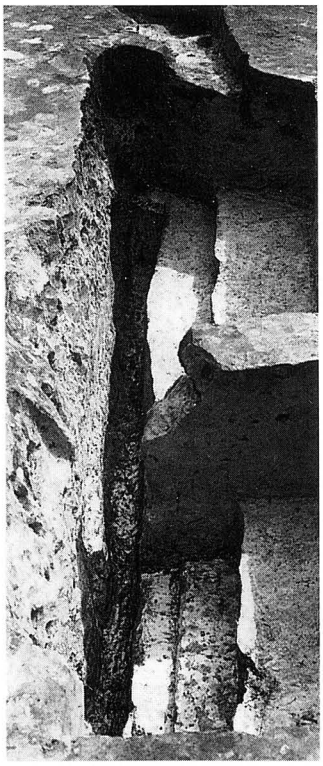


1号（右）、2号（左）柱穴列

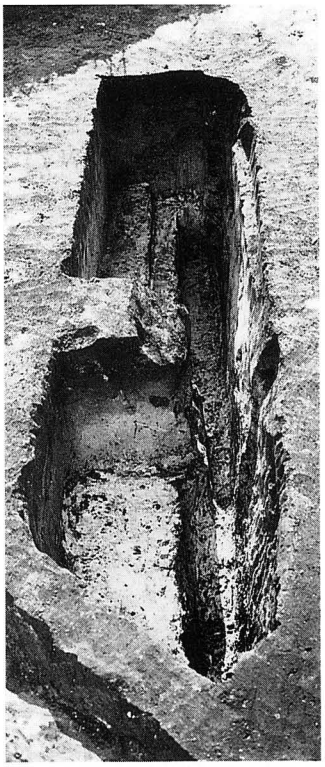
写真図版4　掘立柱建物跡、柱穴列



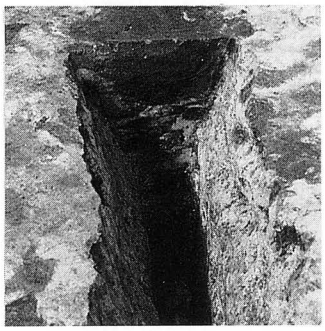
1号　全景



2号　全景

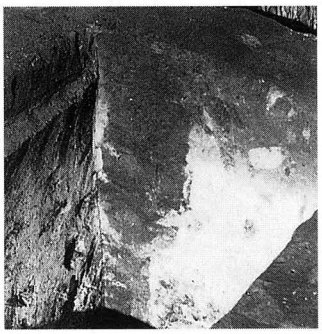


3号　全景

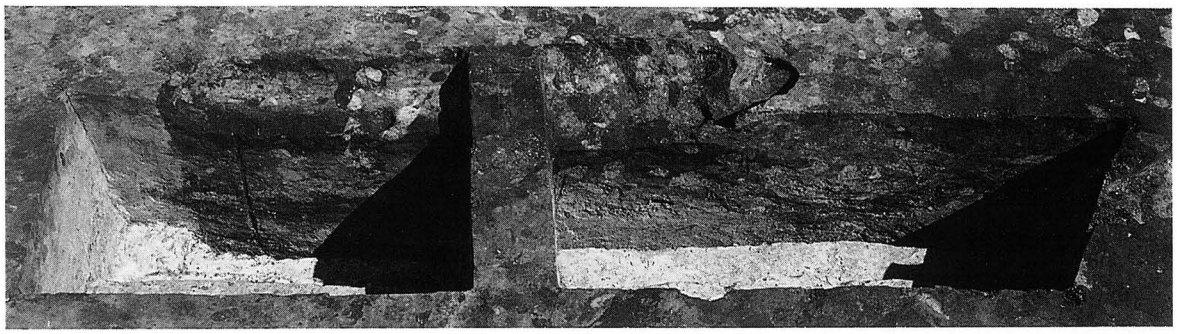


1号　断面

2号　断面



3号　断面

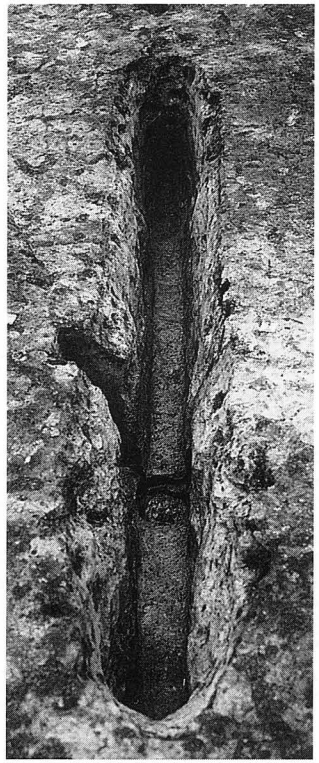


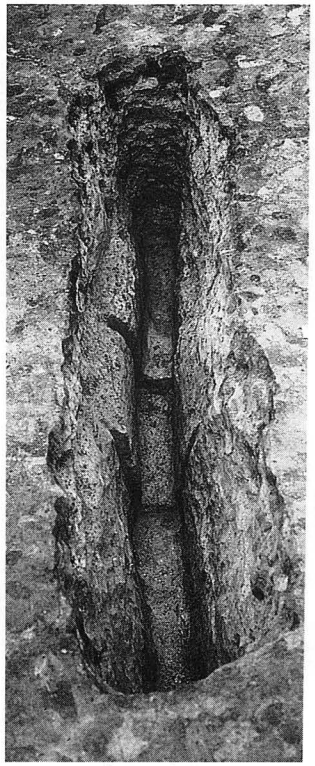
2号　縦断面

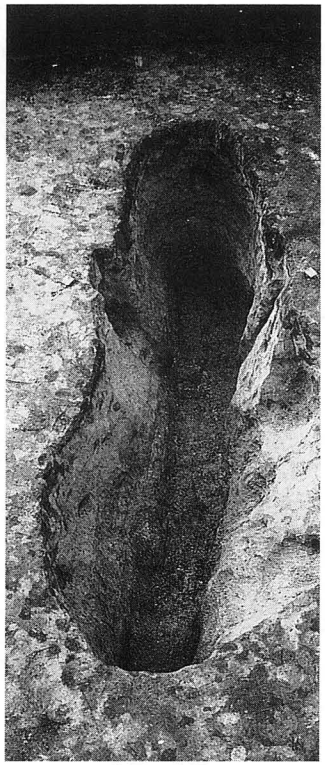
写真図版5　陥し穴（1）

写真図版6　陥し穴（2）

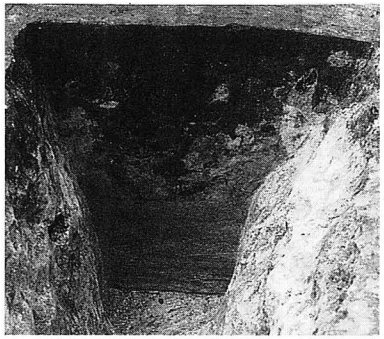
8号　全景

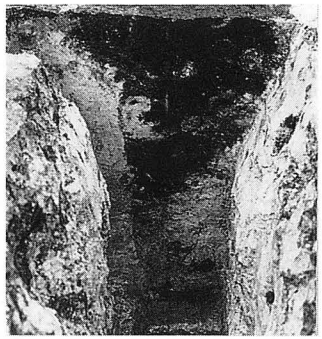

7号　全景

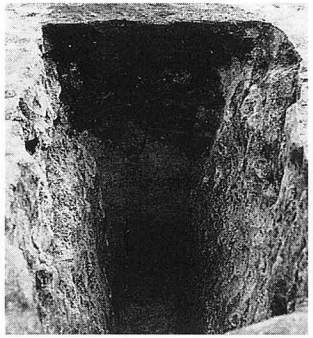

6号　全景

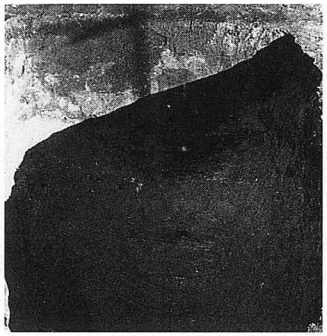

5号　全景

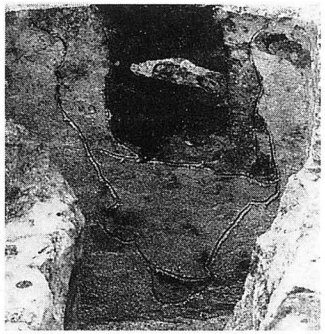
4号　全景

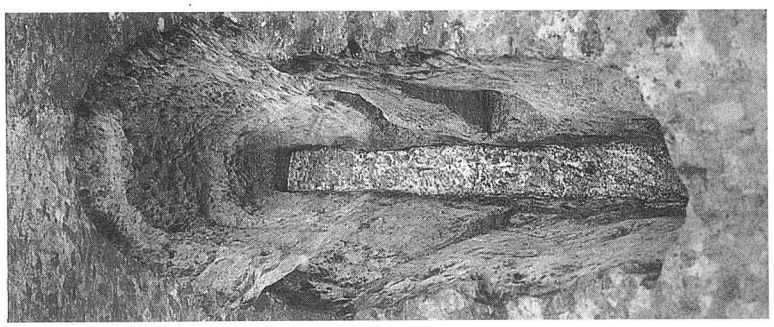

8号　断面


7号　断面

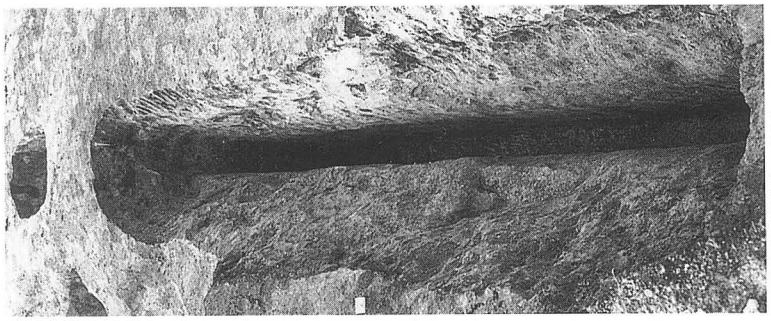

6号　断面


5号　断面


4号　断面

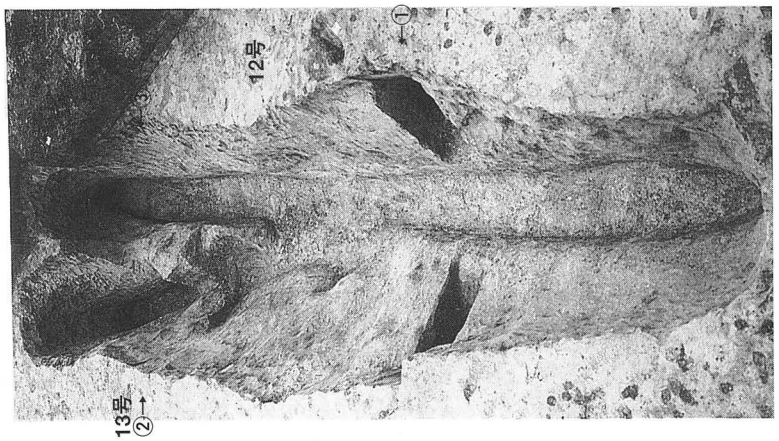


9号　全景



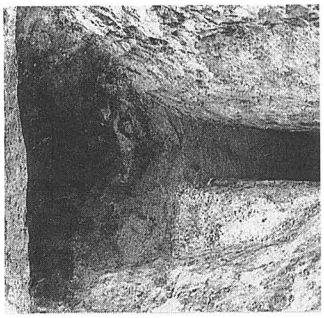
10号　全景

11号　全景

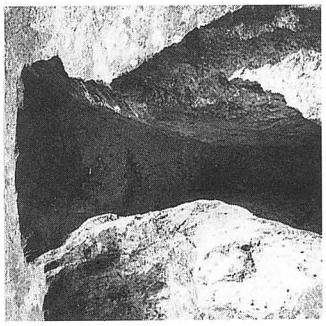


12、13号　全景

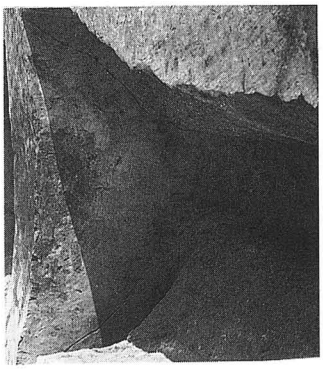
9号　断面



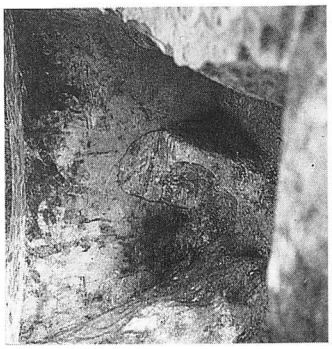
10号　断面



11号　断面

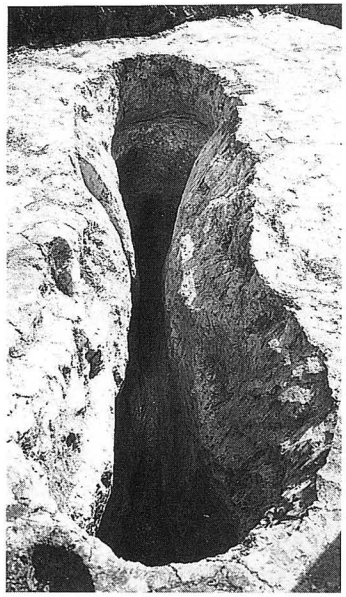


①12号　断面

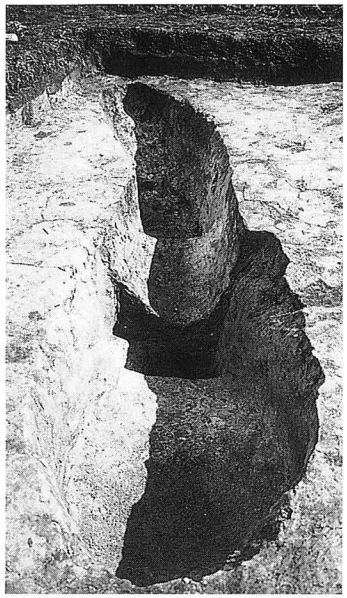


②13号(左)、③12号(右)　断面

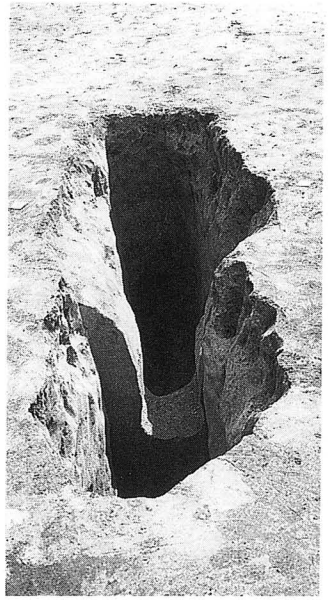
写真図版７　陥し穴（3）



20号　全景

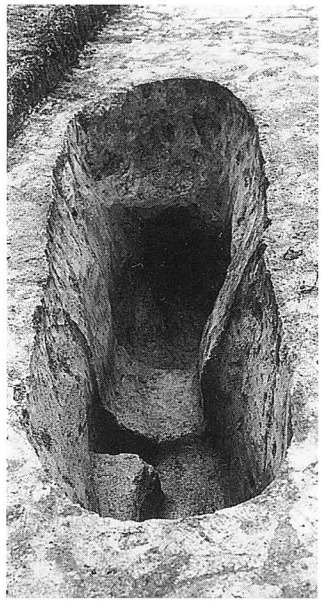


19号　全景

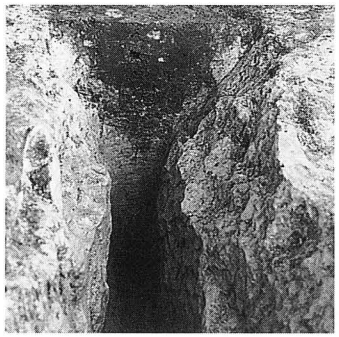


18号　全景

16号　全景

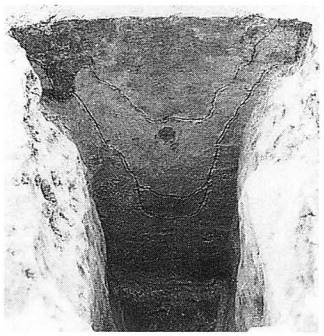


15号　全景

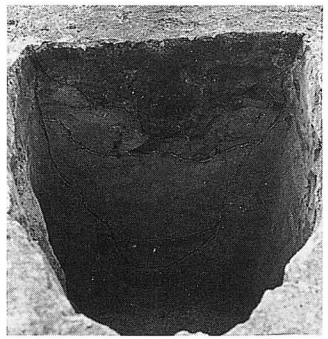


20号　断面

19号　断面



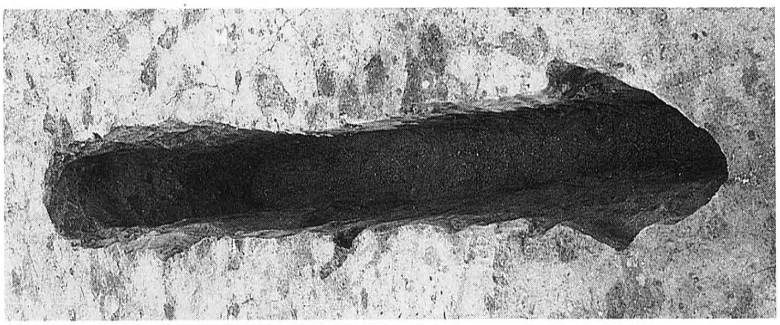
18号　断面



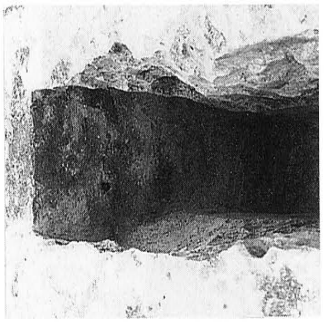
16号　断面

15号　断面

写真図版８　陥し穴（4）



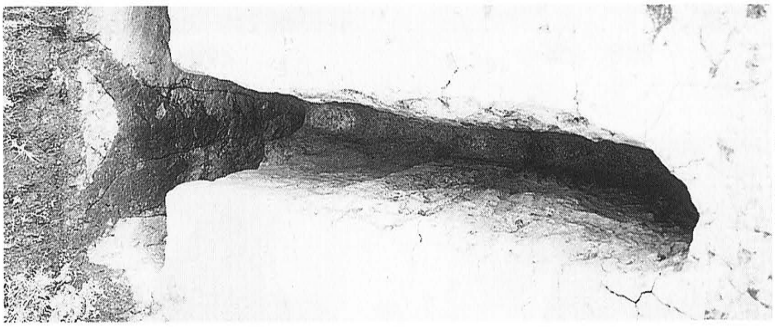
14号　全景



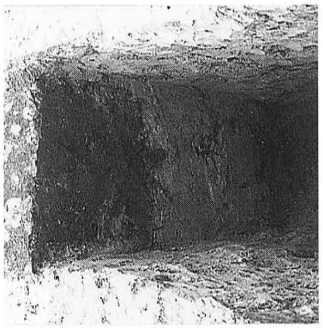
14号　断面

17号　全景

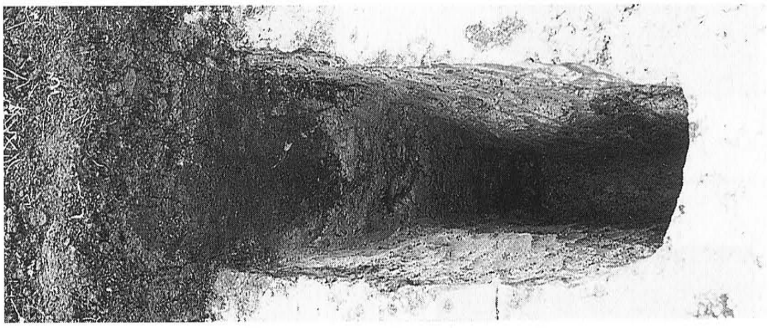
17号　断面



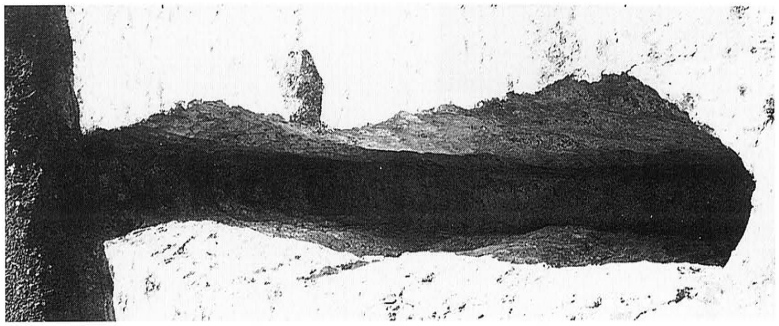
21号　全景



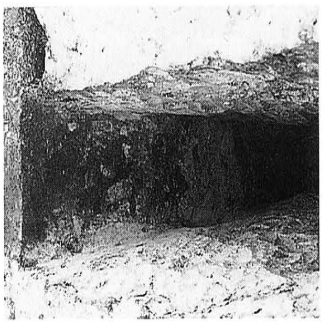
21号　断面



22号　全景

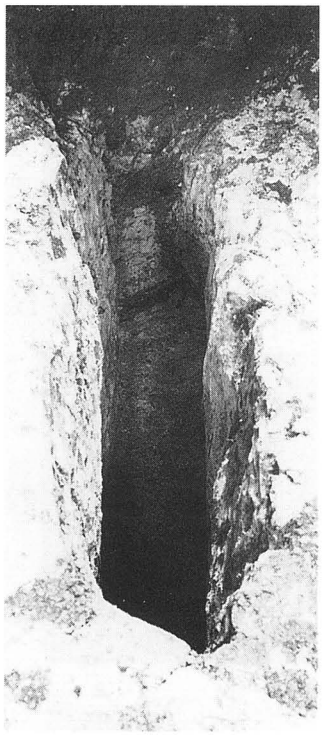


23号　全景

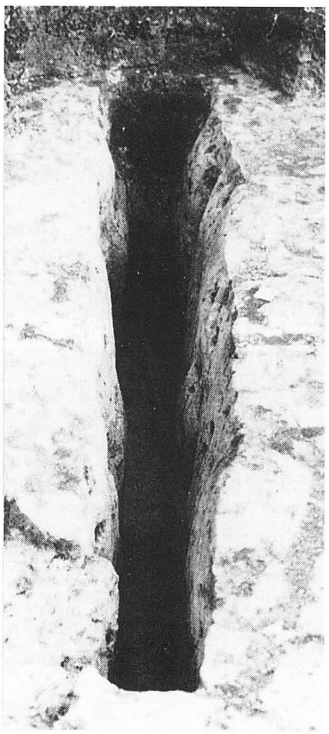


23号　断面

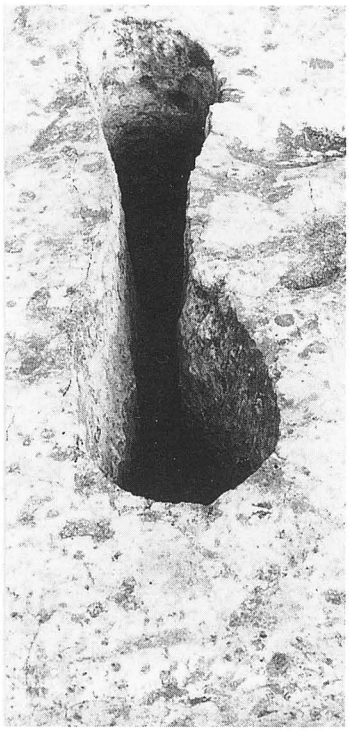
写真図版 9　陥し穴（5）



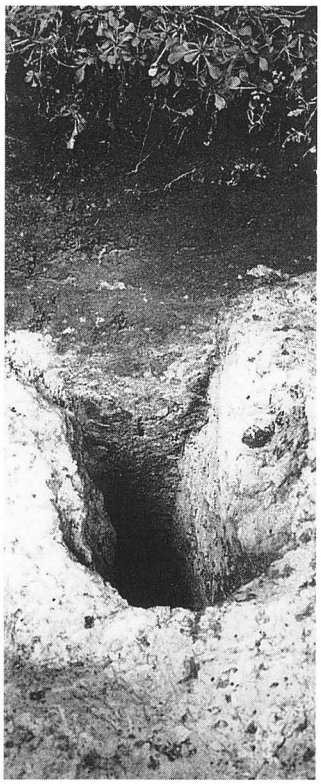
27号　全景



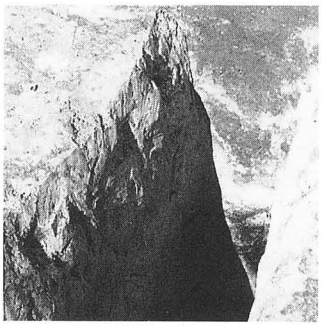
25号　全景



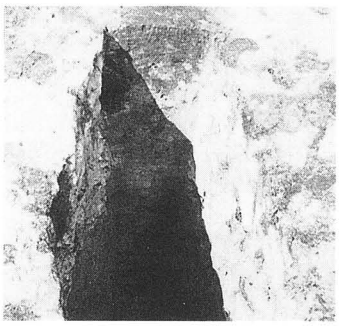
24号　全景



28号　断面



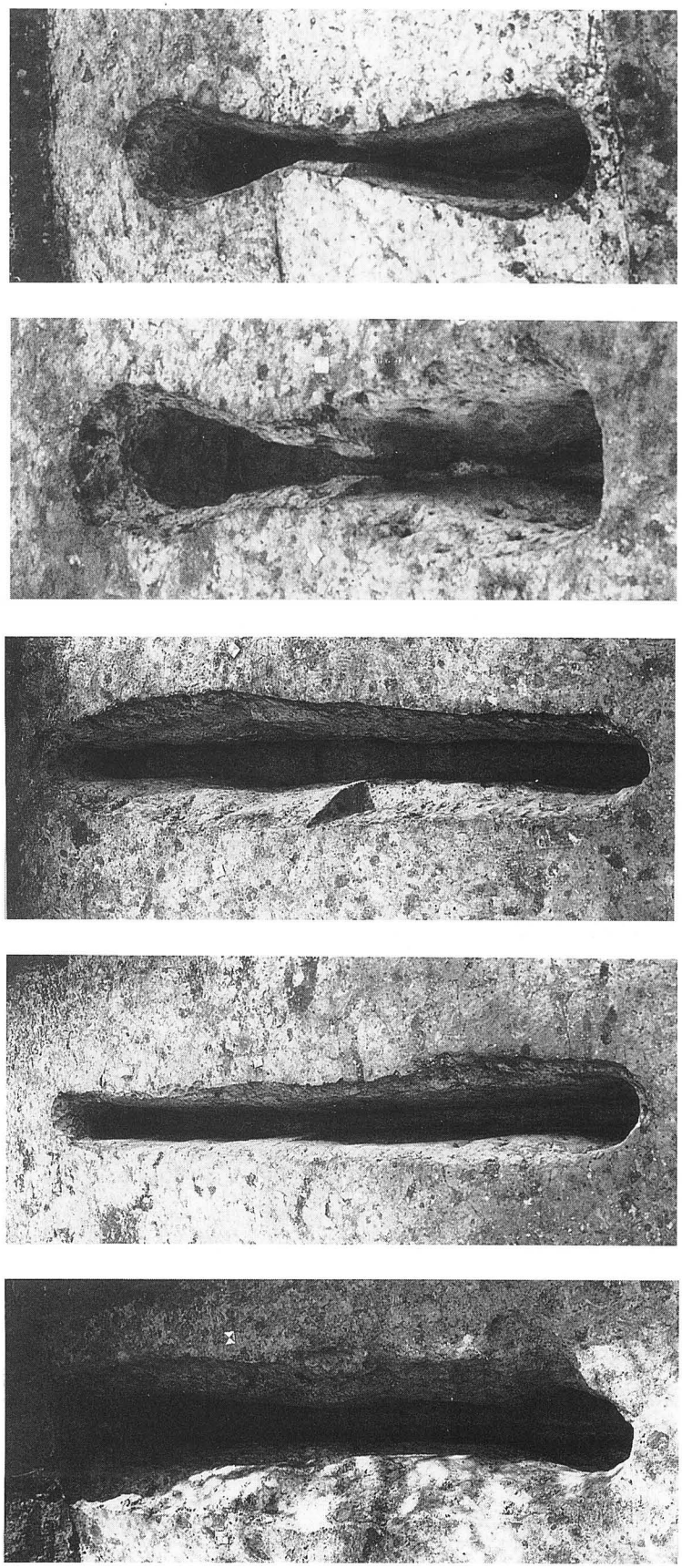
25号　断面



24号　断面

26号　断面（左側）

写真図版10　陥し穴（6）



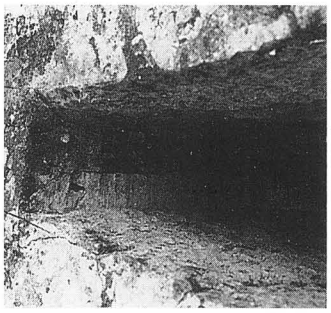
29号　全景

30号　全景

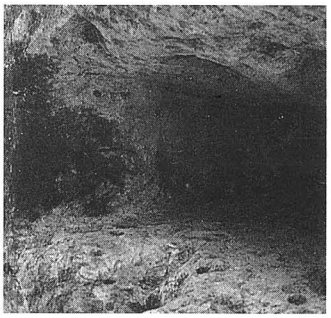
31号　全景

32号　全景

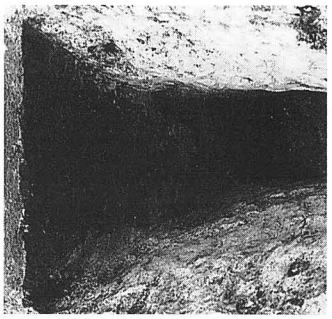
33号　全景



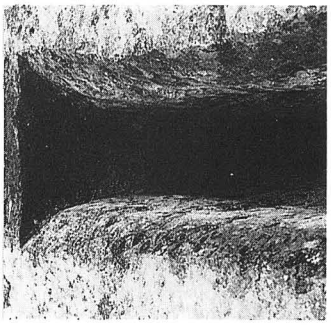
29号　断面



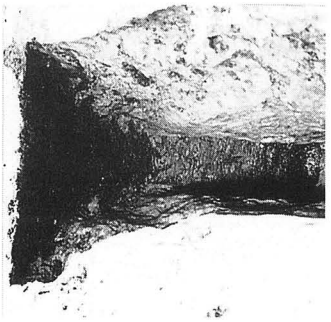
30号　断面



31号　断面

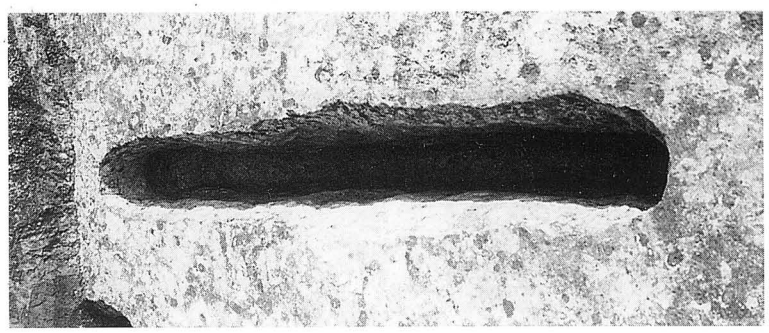


32号　断面

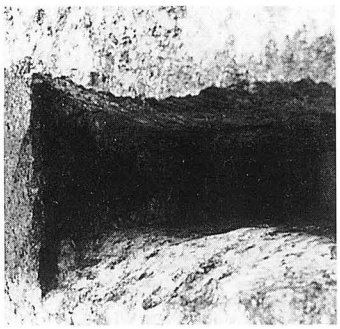


33号　断面

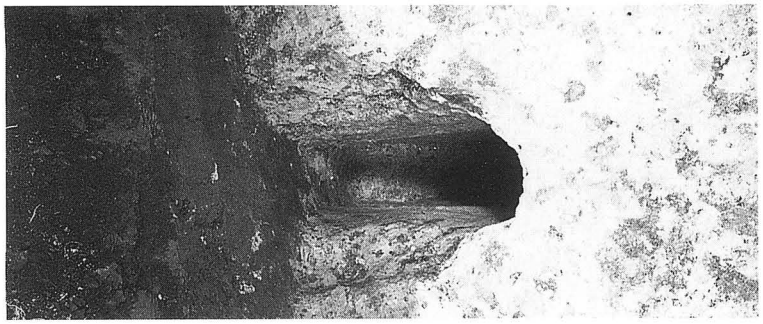
写真図版11　陥し穴（7）



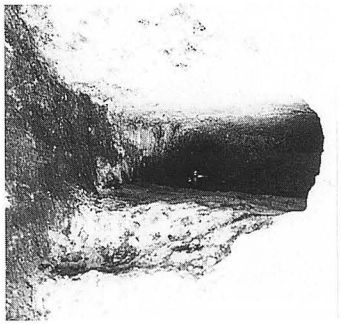
34号　全景



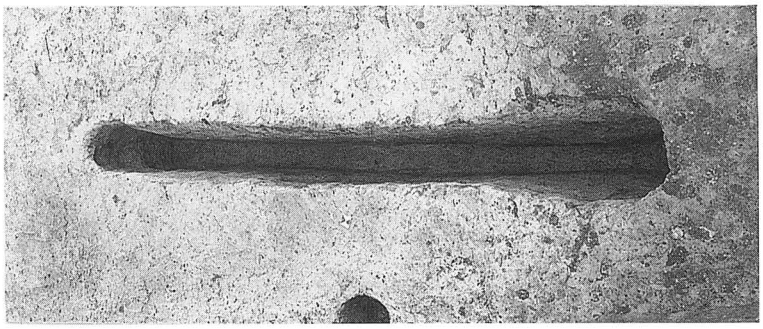
34号　断面



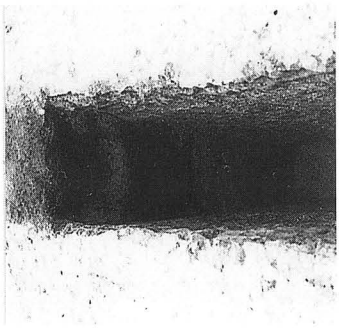
35号　全景



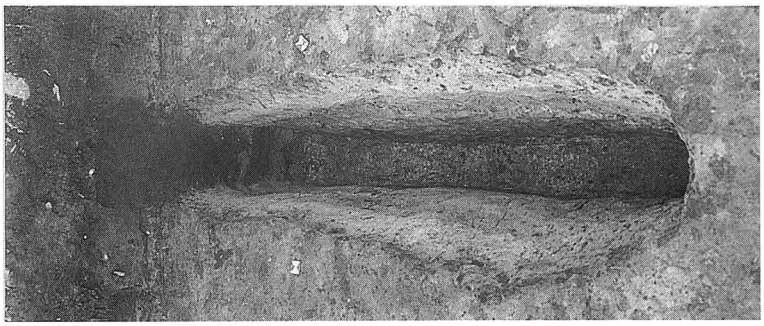
35号　断面



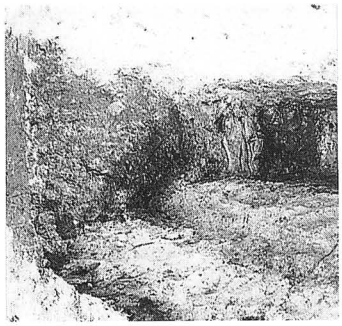
36号　全景



36号　断面



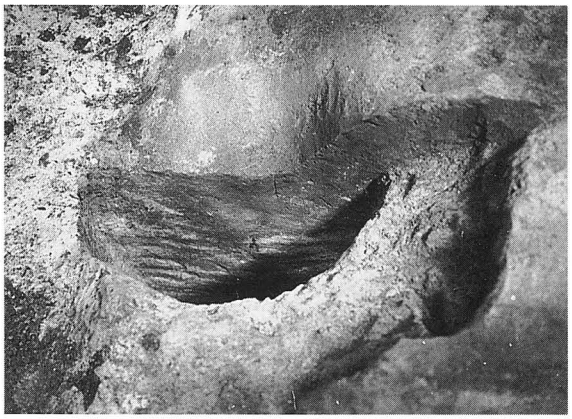
37号　全景



37号　断面

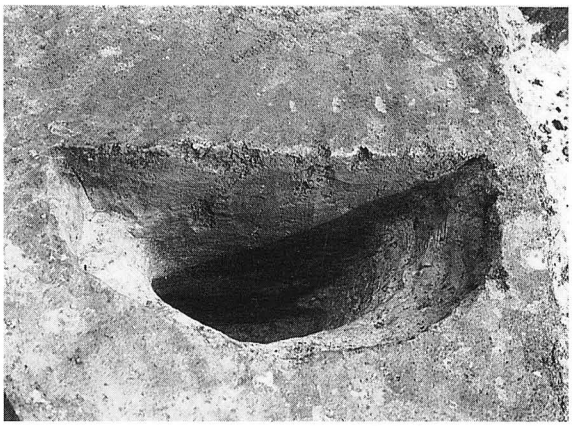
写真図版12　陥し穴（8）

38号　全景



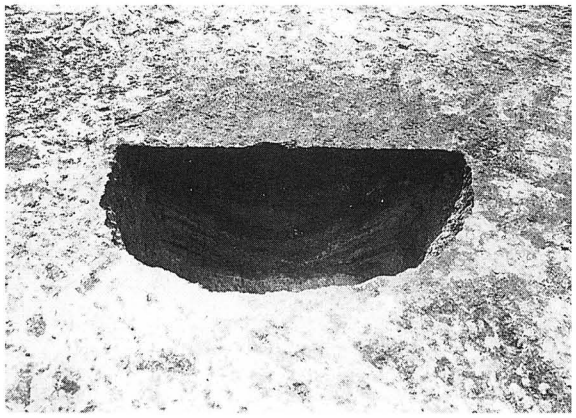
38号　断面

39号　全景



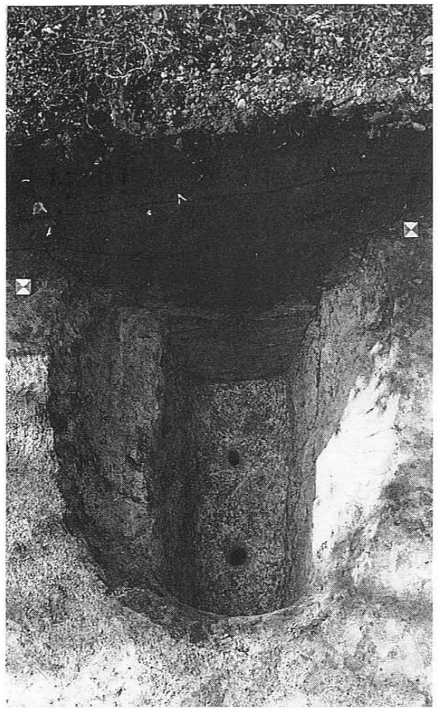
39号　断面

40号　全景

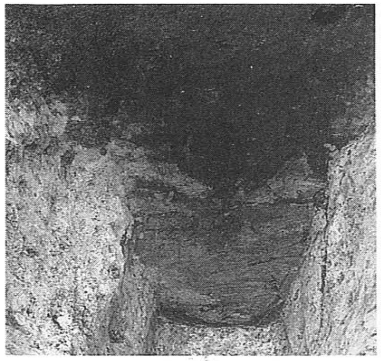


40号　断面

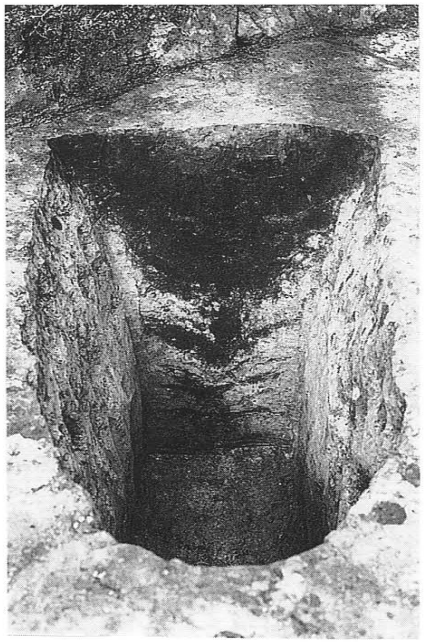
写真図版13　陥し穴（9）



44号　全景

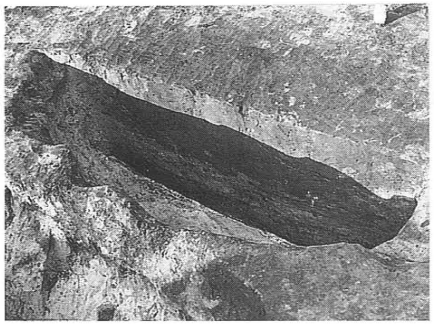


44号　断面

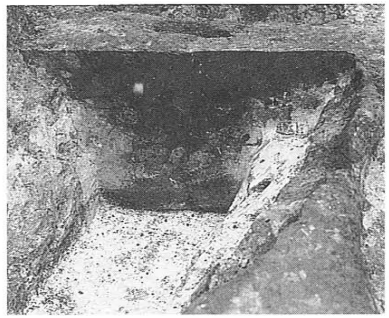


43号　全景

41号（右）、42号（左）全景



42号　断面（縦）



41号　断面（横）

写真図版14　陥し穴（10）

1号　全景

1号　断面

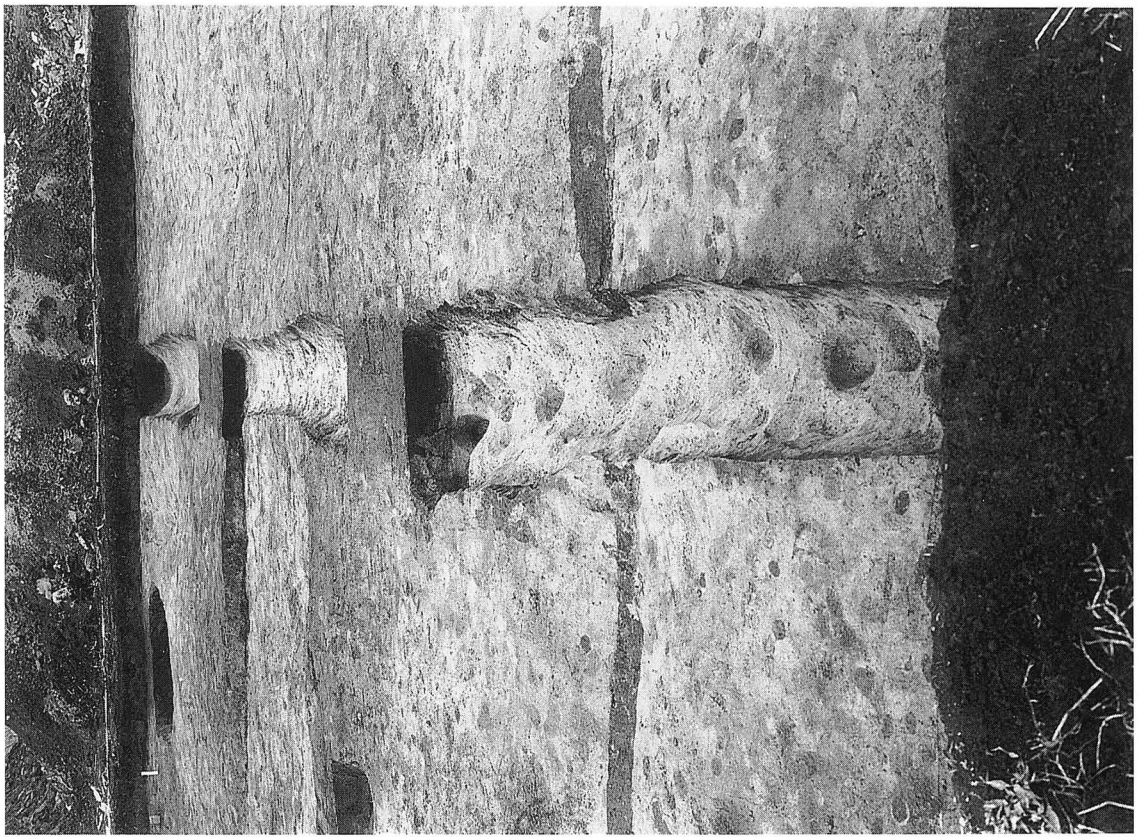
写真図版15　掘跡

1号、2号 全景

3号 全景

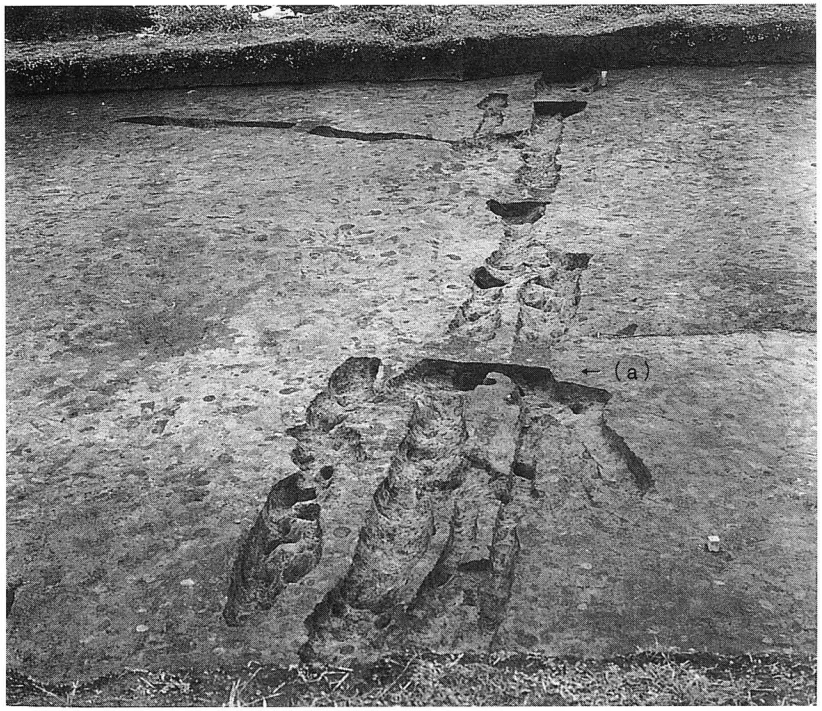
写真図版16　溝跡（1）

4号、5号 全景

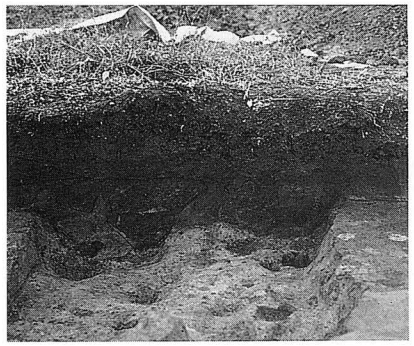


6号 全景

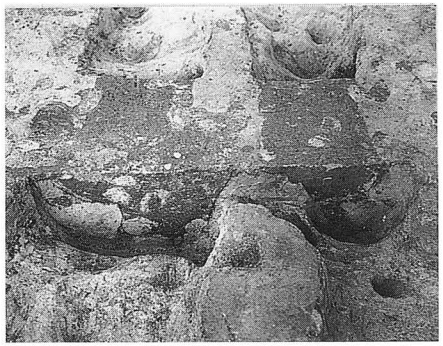
写真図版17　溝跡（2）



9号　全景



9号　全面（南端）



9号　全面（a）

7号（左）、8号（右）全景と断面

写真図版18　溝跡（3）

10号　全景

12号　全景

写真図版19　溝跡（4）

11号　全景

13号　全景

写真図版20　溝跡（5）

14号　全景

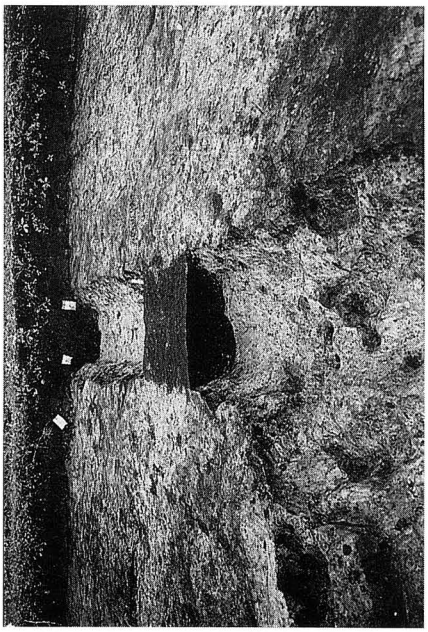
15号　遺物出土状況

15号　断面

15号　全景

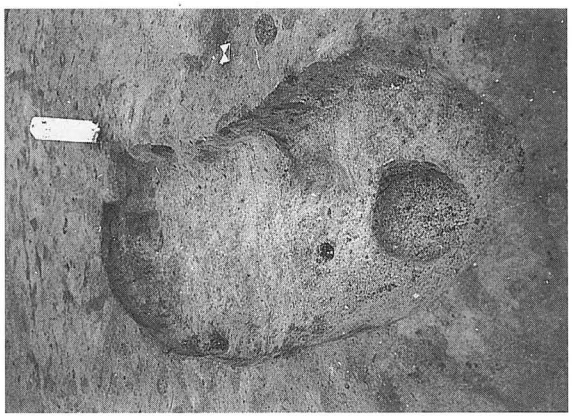
写真図版21　溝跡（6）、遺物出土状況（1）

16号　全景

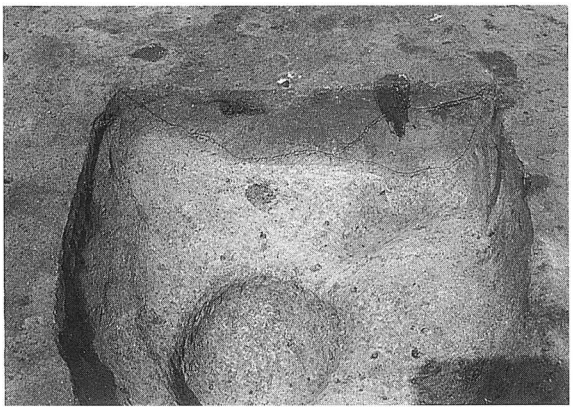


16号　断面

写真図版22　溝跡（7）

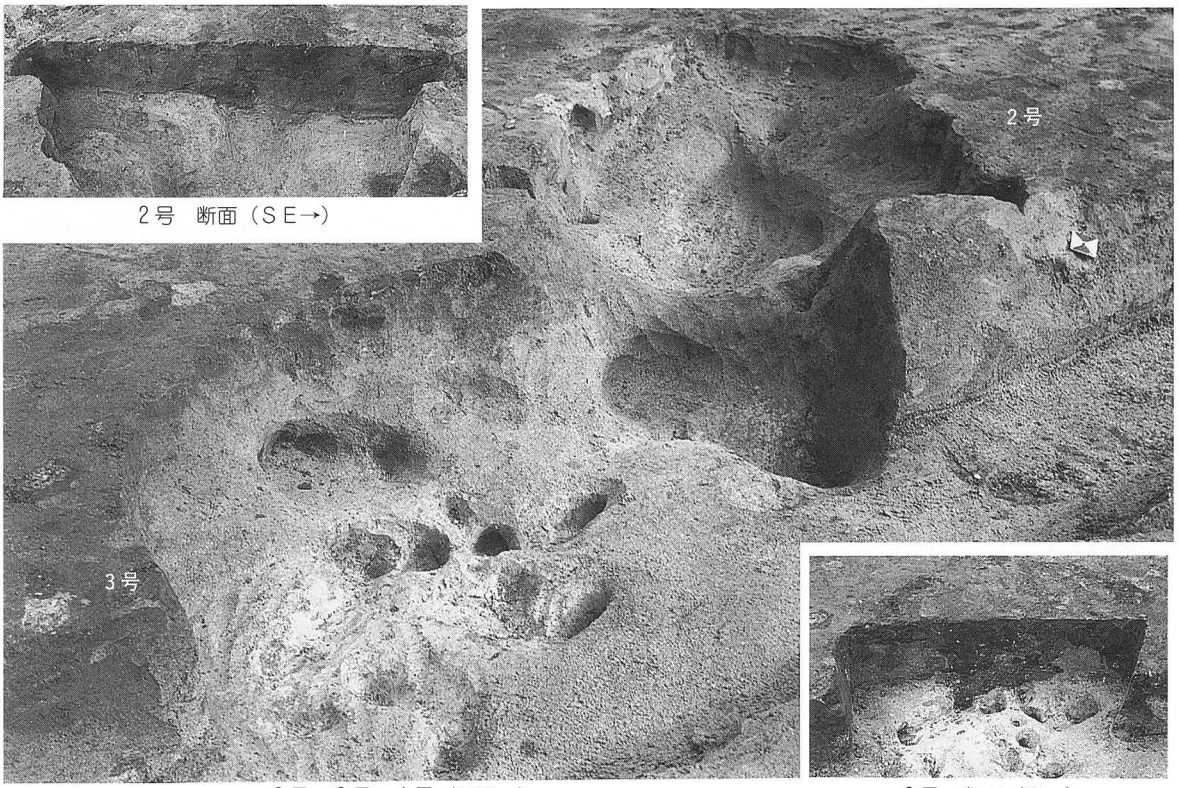


1号　全景



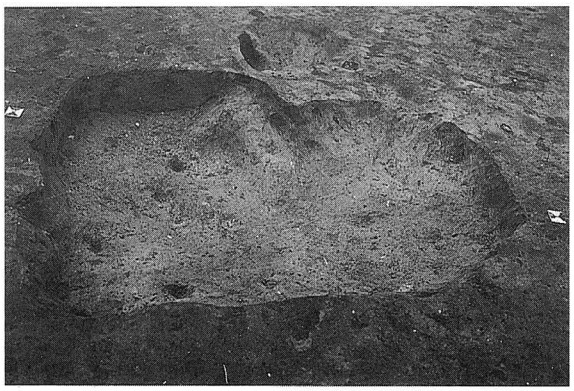
1号　断面

2号　断面（SE→）

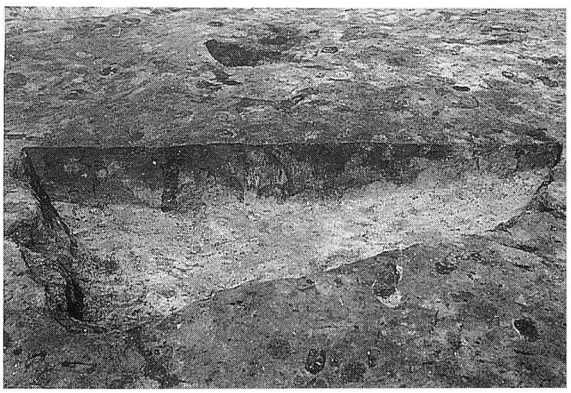


2号、3号　全景（NW→）

3号　断面（W→）

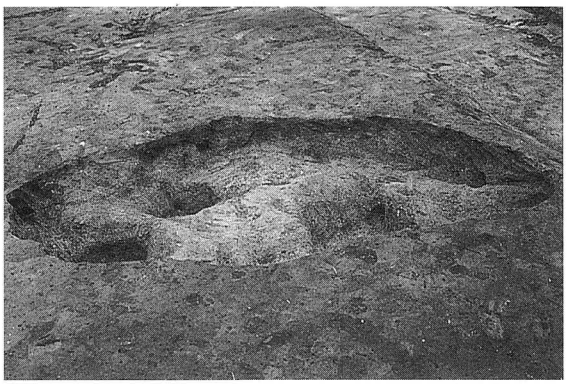


4号　全景

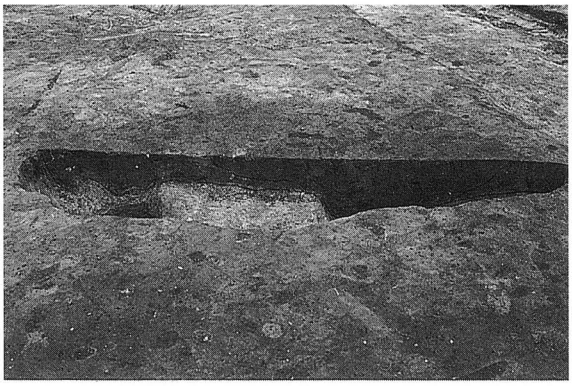


4号　断面

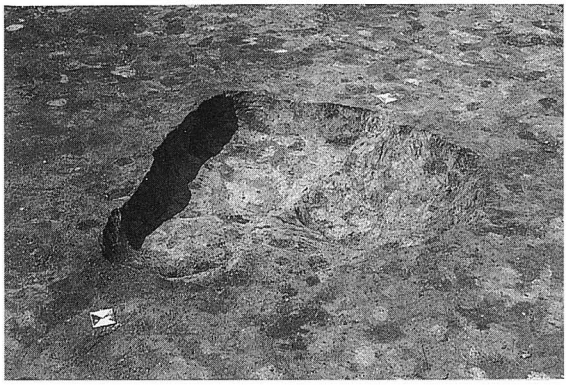
写真図版23　土抗（1）



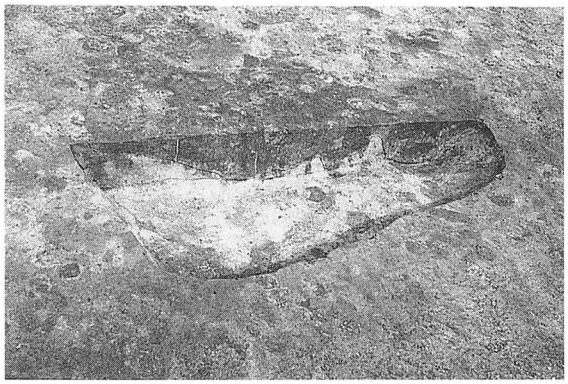
5号　全景



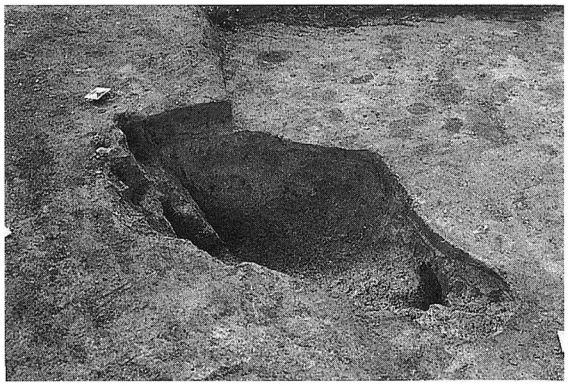
5号　断面



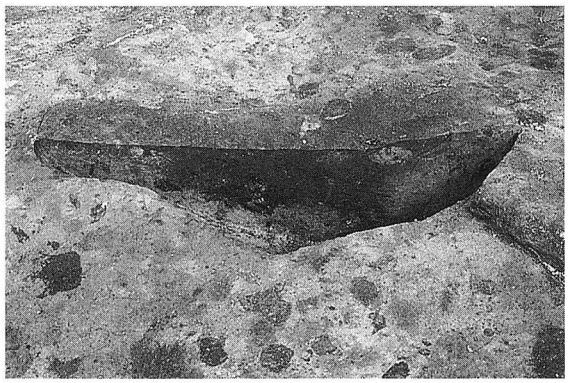
7号　全景



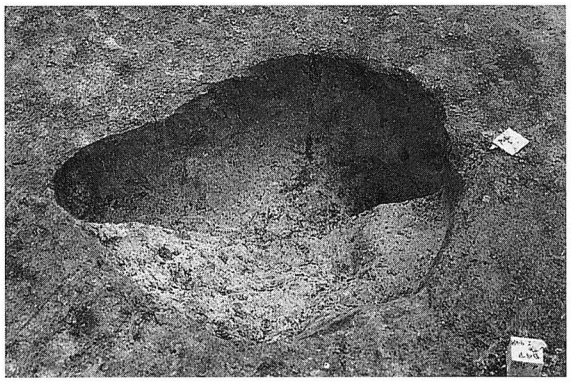
7号　断面



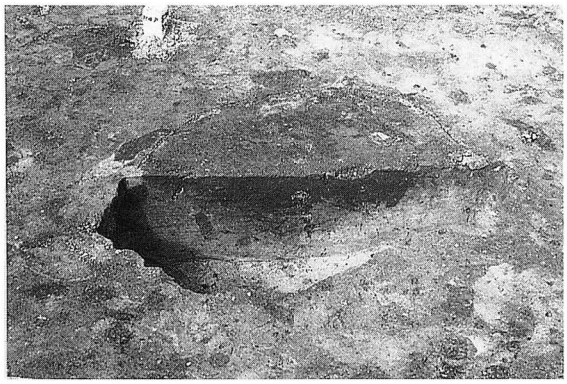
8号　全景



8号　断面

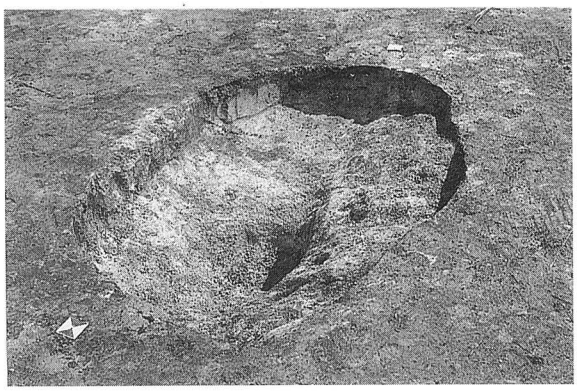


9号　全景

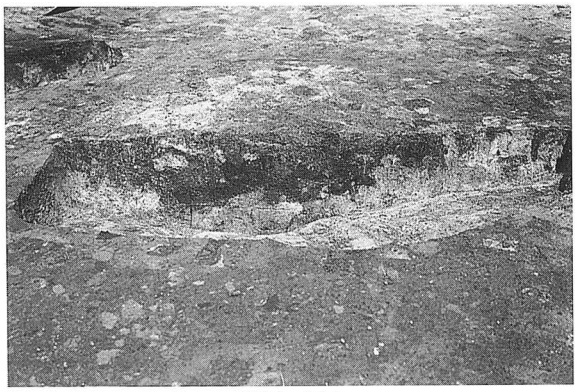


9号　断面

写真図版24　土抗（2）



10号　全景

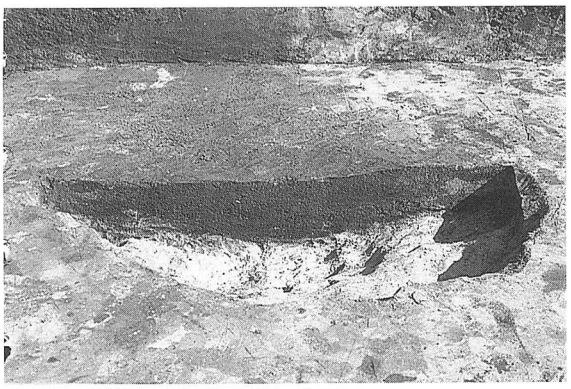


10号　断面

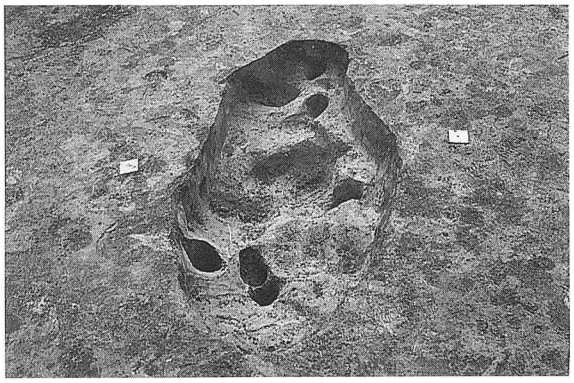
11号　全景

11号　断面

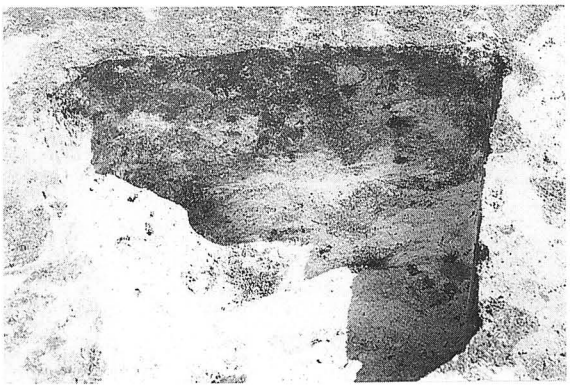
12号　全景



12号　断面



13号　全景

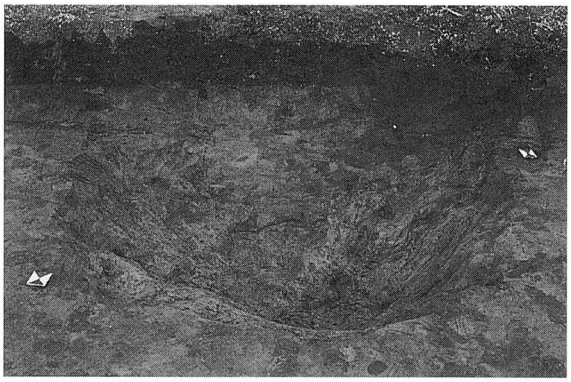


13号　断面

写真図版25　土抗（3）

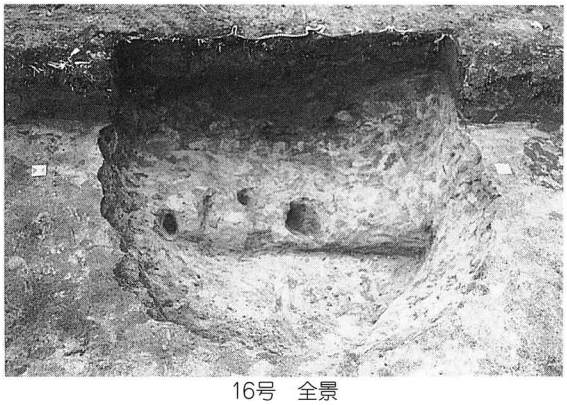
14号　全景

14号　断面

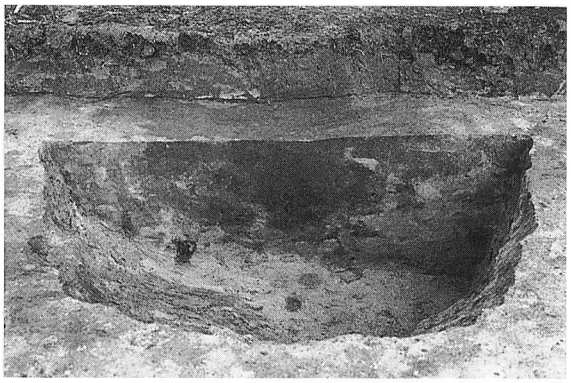


15号　全景

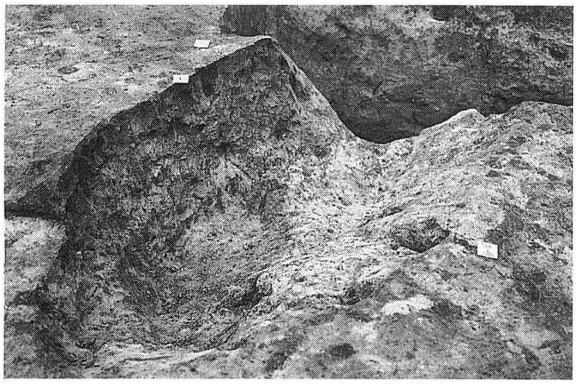
15号　断面



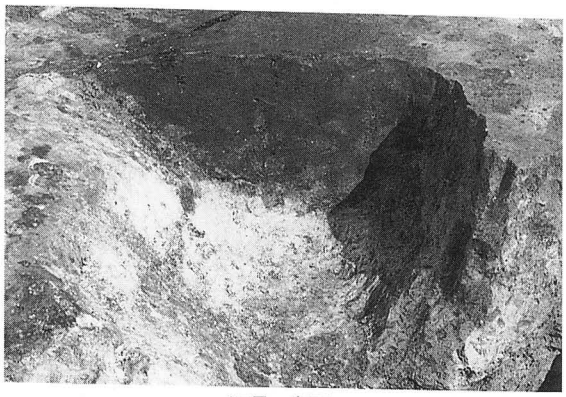
16号　全景



16号　断面

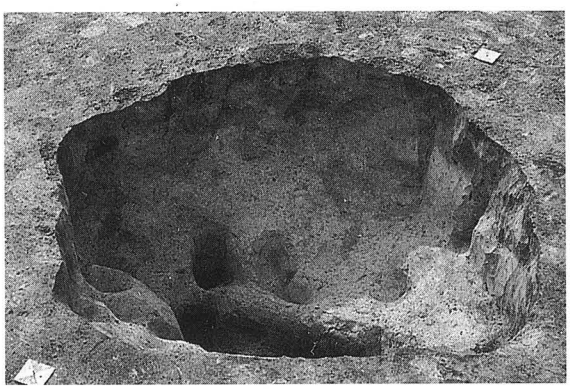


17号　全景

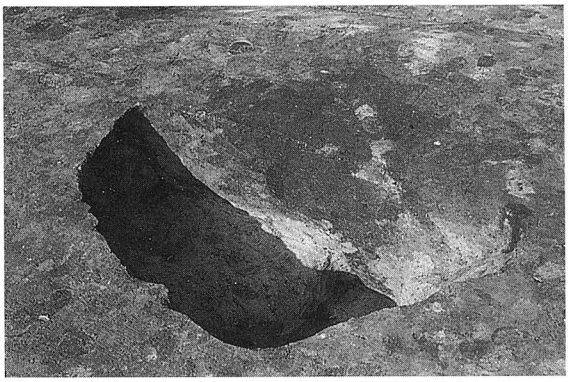


17号　断面

写真図版26　土抗（4）

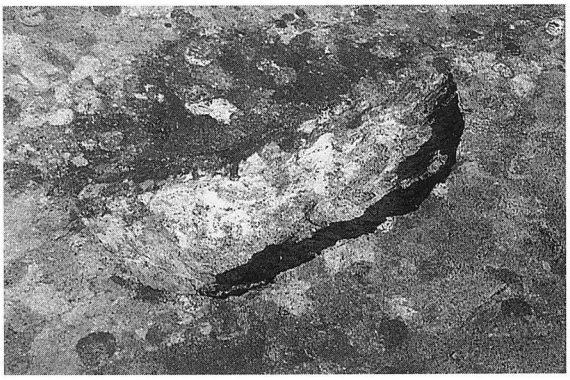


18号　全景



18号　断面

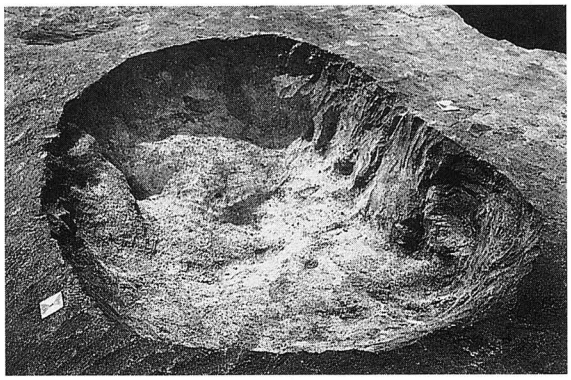
19号　全景



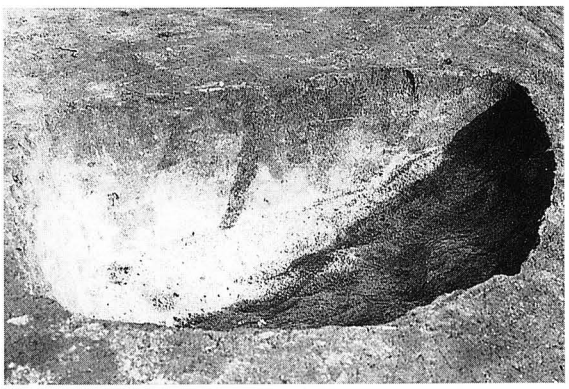
19号　断面

20号　全景

20号　断面



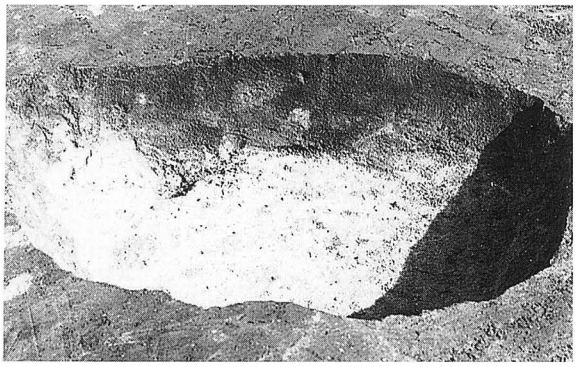
21号　全景



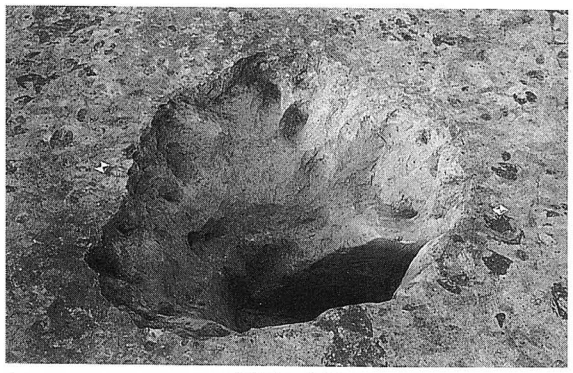
21号　断面

写真図版27　土抗（5）

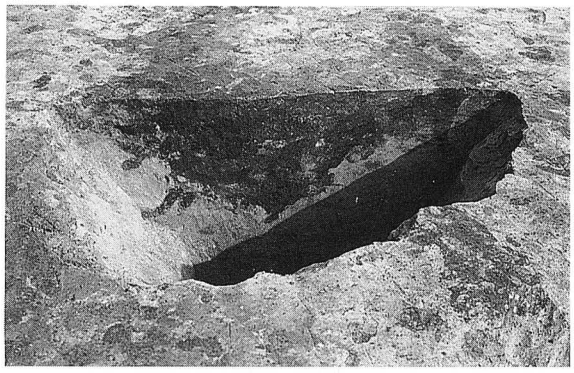
22号　全景



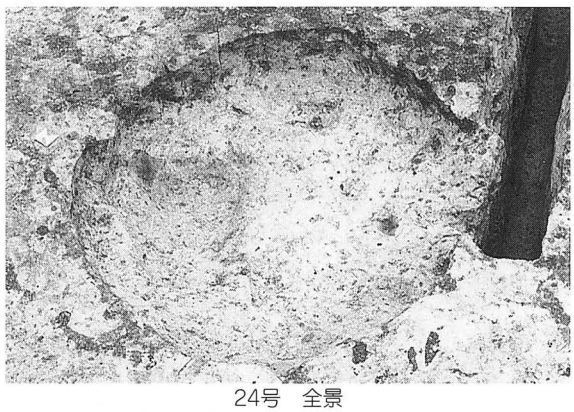
22号　断面



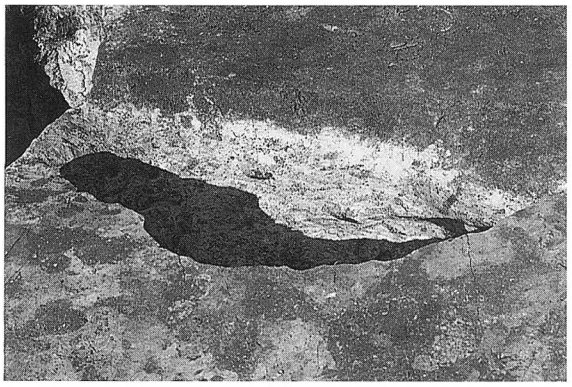
23号　全景



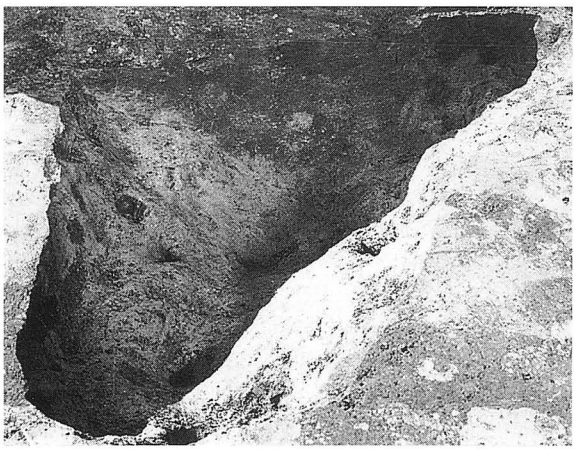
23号　断面



24号　全景



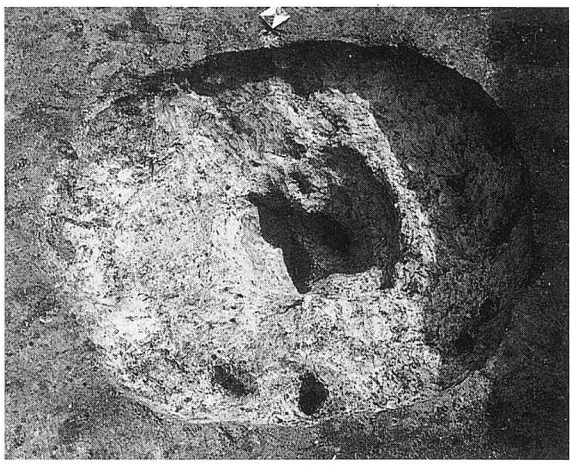
24号　断面



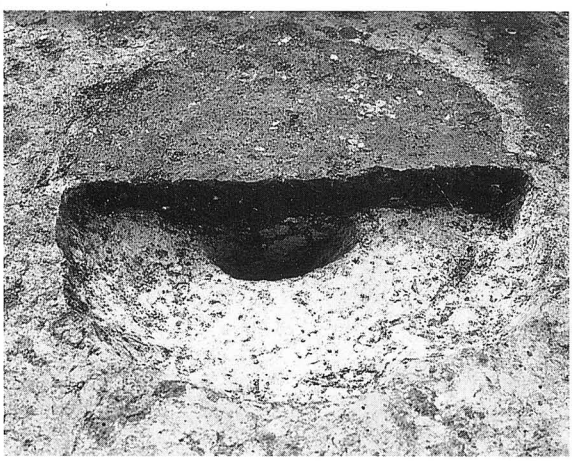
25号　全景

柱穴状小土抗（P85）の遺物出土状況

写真図版28　土抗（6）、遺物出土状況（2）



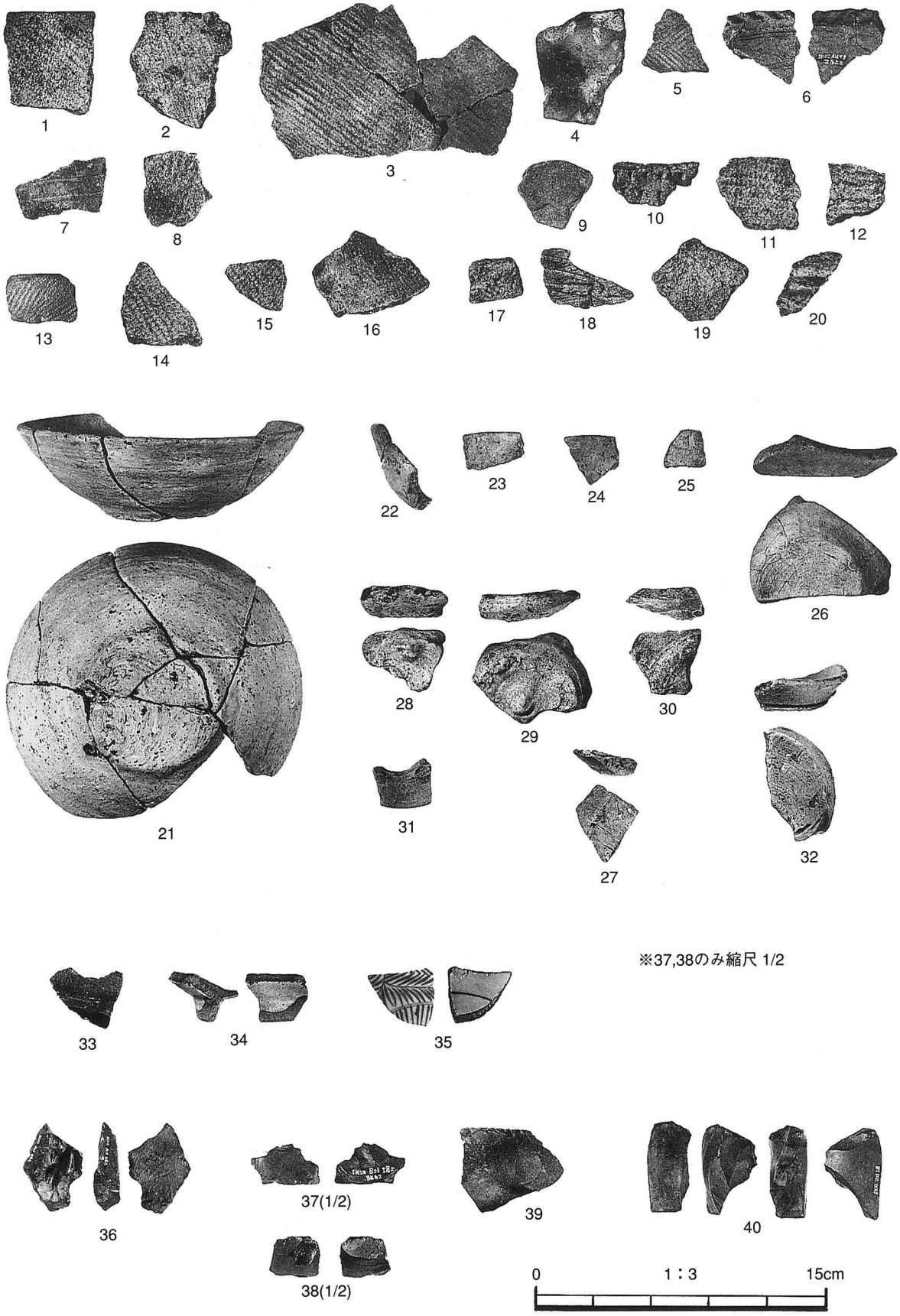
26号　全景



26号　断面

27号　全景及び断面

写真図版29　土抗（7）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
※37,38のみ縮尺 1/2
33
34
35
36
37(1/2)
38(1/2)
39
40
0
1：3
15cm

写真図版30　出土遺物

平成15年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所　　長　木村　昇
副所長　平野允苗

【管理課】

課　　長　韮沢正吾
課長補佐　山岸直美
主　　査　中嶋賢一
主　　事　猿橋幸子
嘱　　託　高橋輝男
〃　湯沢邦子
〃　沼田テル子
〃　伊藤滋子

【調査第一課】

調査第一課長　佐々木勝
課長補佐　佐々木清文
文化財専門員　金子昭彦
文化財調査員　吉田充
〃　亀大二郎
〃　野中真盛
〃　新妻伸也
〃　阿部勝則
〃　杉沢昭太郎
〃　西澤正晴
〃　村木敬
文化財調査員　北村忠昭
〃　八木勝枝
〃　丸山浩治
〃　北田勲
〃　島原弘征
期限付調査員　坂部恵造
〃　小林弘卓
〃　藤原大輔
〃　小針大志
〃　太田代一彦
〃　新井田えり子

【調査第二課】

課　　長　三浦謙一
課長補佐　中川重紀
〃　高橋義介
文化財専門員　小山内透
〃　金子佐知子
〃　濱田宏
文化財調査員　赤石登
〃　阿部眞澄
〃　水上明博
〃　阿部憲
〃　早坂淳
〃　小松則也
〃　阿部徳幸
〃　窓岩伸吾
〃　亀澤盛行
〃　飯坂一重
〃　鈴木裕明
〃　林勲
〃　阿部孝明
〃　羽柴直人
文化財調査員　星雅之
〃　佐藤淳一
〃　星幸文
〃　溜浩二郎
〃　本多準一郎
〃　丸山直美
〃　福島正和
〃　米田寛
〃　須原拓
〃　中村絵美
〃　川又晋
〃　村田淳
〃　（村上拓）
期限付調査員　斎藤麻紀子
〃　石崎高臣
〃　吉田里和
〃　立花裕
〃　江藤敦
〃　駒木野智寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第440集

宿遺跡発掘調査報告書

八重畑地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年１月23日
発行　平成16年１月30日

発行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　（019）638－9001・9002
ＦＡＸ　（019）638－8563
印刷　（有）橋本印刷
〒020－0015　岩手県盛岡市本町通１丁目15－29
電　話　（019）652－1354

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004